

勞だらうとおつしやつて。薬を合して下さるも。みんなあなたの御詞ゆへ。御禮の申やうもない。ナニ私は親の事。たとへどのよな難義はおるか。死んだとても厭ひません。まことにいろく厚い御世話の。御禮にちよつとあがらうと。ぞんじては居ますが。こんな身容でまゐつても。あなた方はよいけれど。男衆のまへも氣のどく。それゆへ實は御遠慮申て。御禮にもあがりません。必ずともに悪く思召して下さりませへ。雁何がさて禮に及ばふ。マアくなると。たけ世話をしいとしらしいおめへの苦勞が。少しも軽くなるやうにと。思つて見ても知つての通り。人を遣へばつかふだけ物入もあり何やかで。思ふやうにはとどかねへ。ア、しかし困るであらうト紙入の中かい探り。紙に捻つて南鏡を。おきくにあたえ。雁是はあんまり少ねへがノ翌病人に看ても。買てあげてくんなせへ。此頃中は白里で。とんだい、鯛がとれる。大かた翌もあるだらう。きくこれはモウありがたう。しかし誠にお氣のどく。雁ナニ氣のどくな事があらうサアく早く往なせへ。遅くなつたら案じなさらう。大に色く長漸でホイ蠟燭が立きつたト別れて立さる里正がうしろ。おきくはじつとふし拜み。どういふ過去の因縁で。里正さまの情ぶかい。われく親子を親類とも。ないやうに世話をして。米味噌までも氣をつけて。贈て下さるのみならず。斯して翌の小づかひに。せよとて貴ひお金を下さる。恩は死んでも忘れぬ。いつの世にかは恩がへしが。出来やうぞいと正直な。心にうれしさ續くと。足を飛してはせ歸り。此よし兩個の親に告。在しがまゝ物をたれば。聞と等一半兵衛も。母も俱く歡びて。里正が情を感じける。かゝる所へ脊戸の戸を。がたくあけて隣のお婆。小妻木綿の綿入に。煤けし色も煤竹の。手垢に光る帯をしめ。草履はたゞ篠竹の。節もて造戸首の。煙管齒室に食しめて。圍爐裡の端にとつさり。と。バア、てへぶ寒いのふ。あんべは些もあゝかへ。ちよつと見めへに來やうと思つても。暮といふものは色く。用はつかりたんとあつて。大きに疎ゑんになりました。それでもよく菊ぼうが。めへにちくく世話をするぞ。朝もはやく起てさせ。寒からうに。梅アやおばさんお出なせへ。おきくやお茶でもあげな。バアナニかめへなさんな茶も今澤さん飲て來

たに。ア、どふぞ正月めへに。ちつともよけりやアいゝにな。梅さやうさ斯して寝て居ましても。ごぞんじの通り人手はなし。また肝心の物はなし。誠に氣がもめてなりません。バア、くそふだらうとつて。ホンニく菊ぼうが大底じゃアねへ。旦那はどふだ菊ぼう。きく「アイちつといゝかと思へば。また悪くなる。誠にこまりますヨ。なんぞはやくよくなる薬はありますまいかね。バア「醫者さまにせへいかねへだものを。別に仕かたもあんめへが。マアく是からして見れば。神信心だ近所の事さのみに思はねへが。こゝの不動さまはとんだ利益があるとよ。此あいだも富口のほうで。二年このかた腰がぬけて。跡へもさきへもいかねへで。ハア醫者さまも見限た所が。まだ若い男だに。つまらねへ事だといつて。此鳴戸の不動さまを。信心した所が。だんくくとよくなつて。モウ此頃じゃアさつぱりよくなつたとよ。此間見りやア擔ぎ物なんぞをして歩行だア。おらもハアたまげたつけ。神佛の信心も。一心を籠てすりやア。夫だけの事はあるもんだなアお梅さん。梅それはモウあるのだんではござりませぬ。私どもも随分信心をば致シますが。誠に難義な中で。兩個ともに大病を。煩らふと申すは。神さまにも佛さまにも捨られたのでござりませうヨ。バアアハ、そんな氣の弱イ事をいゝなざることがあるもんか。今の若さにその位な病氣に。氣を墮してはいきやせん。わたしなんざア若い時分から岩丈で。ツイしか薬一ぶく飲だこともなし。今年ばモウ七十になるが。行燈で針線もする。梅干の種でも嚙割だア。きく「ホンニおばアさんは丈夫だねへ。おつかさんはまだしも。おとつさんは誠に弱くつて。あんなじやア長生が出來まいかと苦勞になりますヨ。バアナニく柳の枝に雪おれなしとやら。弱イから早く死ぬといふ譯もねへなさ。マアく何より信心がいゝ。きく「アアおばアさん今漸しなすつた富口の人。僂伴でござりますねへ。そんな腰の抜たのが直つたのか。バア「そうよ僂伴な事さ。その外にもこゝの不動さまのお蔭で。病氣のよくなつた人が。でへぶあるといふ事此頃はほうくからおめへりがあるよ。きく「どうりて此間も見れば。駕籠なんぞで來た人もありましたつけ。梅そりやアホンニありがたい。遠くの人さへ。馬駕籠で信心

おさつしやるのに。ノウおきくわたしは久しく湯にも這入らず。こんな穢ない體で。拜むのも勿體ないから。代りによ
くおがんで呉なさいよ。そして翌は御符でも戴いておくれ。きく「アイ、翌夜があげましたらば。お参りをいたしま
せう。ヲヤ、お薬が出来ました。おとつさんへあげませう。ば、ドレ、おれがあげてやりませぬ。序に見え
へも言てへからト薬茶碗をもつて。半兵衛が側へゆき。ば、半兵衛さんどうだ。そんな弱イ事じやアいかねへせ。サ
ア、薬を飲ませへ。ヤレ、大進に瘦たの。半、ア、おばアさんか。今夢のやうにだれか人が来て居るそふだと思つ
て居た。アイありがたう何かモウ。お菊がひとりだから。色、お世話になります。近イうち正月も来るのにいつまで
斯して居る事だか。少しいとまた悪くなり。誠に困つたもんでございやす。ば、ナニ、やれ、思はずに。氣を
ながくして寐て居なせへ。また寒ても明て少し緩んだらよからうに。飯は給られますか。半、エ、どふもその食が
けませんのさ。ば、なんでもお飯を給ねへじやア直らねへから。我慢して給なせへ。ム、今の若さに。半、毎度モ
ウおばアさん。ありがたうマア、どふか此容子では。死もしまいかと思ひます。ば、ナニばかな死ぬのなんのと云
んぎの悪イ。さア、薬を飲ませへモウわたしも歸りませうといとまを告て立かへれば。お菊はそこら片付るに。鐘
の音遠く二更とおぼしサア、休んで翌はやくと。母の後に積をかけてうち臥しつくんと。思ひまはして兩親
の。病ひを頼に愈さんには。隣のお婆が語られし。爰の不動に願込して一七日が其のあいだ。斷食をして祈るなら。
定めて納受ましますさん。徳伴里正雁八が情によりて呉たる金。まづ四五日の小づかひには絆もかけずと歡びて。眠る
とすれど荒家の。壁漏る風は短かなる。裾の傍りへふきいれて。夢をも覺すばかりなり。かくて夜明になりければ。
例のごとく起いで。明餉をしまひ何くれと。絆あらましを果しつ。是より鳴戸の不動尊へ。参らんものをと思ひ
しが。イヤ、晝は人目もあるに。この小川にて垢離をとり。赤條々になつて居るを。見られん事も耻かしく日が暮
たらばと思ふにぞ。ヤレ、けふは雁八どの。情によりて樂くと。送るものかと父母の。側につき居て薬の世話。

湯水のことまで心づけ。居ればお梅も半兵衛も。歡ぶものから不審がは「ヤレ、けふは久しぶりて一日内に居やつ
たのふ。それはそうとコレおきくや。今朝からしてお飯を。おぬしはさつぱり給ぬじやないか。どこぞ臘梅でも悪く
はないか。きく「イ、エ何處もなんともなし。ナニお飯をも給ましたヨ。梅、それでもたべた容子を見ないが。アノ斷
食のなんのといふ。馬鹿な事をしまいぞよ。此寒イのに何も給ずに。そなたまでが煩らつては。わたし等が仕やうが
ない。サア、熱く雑水でも。こしらへて給やれト病ふしながらこま心つくは可愛さ八しほにも。まして吾子のいとし
さは。言に詞もなが良川。鶉飼の船にあらなくに。胸の簪は絶やらず。ながき短かき綱手にも。おもふ心は夜の鶴。あ
さる雉子の焼原に。兒ゆへにしづむうき身の淵の。恩愛ふかき與五の海。はては涙となりぬべし。おきくは今さら回
答べき。こともなきま、俯きて。心ならずも焚つける。曲突の薪にそえて燃す。倭にあらぬもろこし壳。春ならなく
にもえ出る薬火も今はたえなく。日も夕ぐれとなりけり尾上おろしの風さむみ。昨日よりして催ふせる。雪はち
ら、門の口降こむほどに。駈いで。戸をば細めにひき立つ。身にしみんと寒かりしも。おもへば雪のしらせか
や。嗟病人に中らねば。よいがと獨咳くも雪を見雨を見るにつけ。心にかゝる兩親の。重き病ひを祈らんと。その日
のくるゝをまち豫て。測り出たる脊戸のくち。彼白居易が詞にも。雪は鷲毛に似て飛で散亂し。人は鶴裳を着て立
徘徊すと彼はいみじき雅言。これは眞の心より。寒さいとはて竹の子の。皮もてつくる大笠に。裾をば高くはし折
て。急ぐとすれど降りしきる。雪はたちまち野も山も。眞白になりて少女子が脛の色をも欺くべし。おきくが心剛なれ
ども。彼方をむけば田の面より。吹來る風に息さへも。吻あへぬまで貌をうつ。雪吹に堪かね此方をむけば。裾より
ふきいる雪礫。腹のほとりも濡つべし。されども親を思ふなる。心ひとつに口の裡。南無や大聖不動明王。この誓願
に與力して。親の病ひを忽地に。怠らしてたび給へと。一心不亂に念じつ。やがて不動の門前に。至ればこゝに小
川あり。流るゝ水は濤々と。響き渉りて凄ましく。岸に生たる枯葎の。戦ぐも今は身にしみて。心細さもいやませ

ど。傍なる枯草ふりはらひ。心づよくも着物を脱ぎ。彼大笠を上に向ち着せ。やがて小川の岸よりいれば。淀みに張し堅凍の。鏡のごとくなるうへに。降つむ雪は脛を超え。思はず慄々胸ふるへ。齒の根もあはて立すくみ。水をなめて居たりしが。斯ては果てじとかねてより。瀬をばしりたる石川なり。眼を閉て踊りいり流るゝ水を手につけて。口をば沃き面を拭ひ。夫よりよふく枯草を。便りて岸へ這あがり。さしにも高き石坂を。登るとすれど足龜まり。踏所をさへも覺へねば。一段昇りて二段こけ。よふく不動の堂前へ。至りにければ平伏て。生たる人にもいふごとく。とよさまもかよさまも。かさねくの不憊倅。そのうへ久しく煩らひまして。人の情にやうくと。薬も飲せ飯をさへ。給ては居れどなかくに。急によくなる容子も見へず。もしもの事があつたらばと。それはく私。心の裡のうき苦勞。並大體てはござりませぬ。まことに新な不動さま。どぶぞ兩個の病人が。はや本復いたしますやう。お守りなされて下さりませ。モシまた天命とやら申事でもよくなりませぬなら。どぶぞ私が命をとつて。とよさまとかよさまの。壽命をのべて下さりませ。二回も三回も線かへし。線かへしては伏おがみ。頓て社壇を下りつ。彼石坂を辛じて。よふく下りけれど。今日は朝より食を絶。勞れしうへに猶やまぬ。雪は虚空に渦を巻。猛風肌を裂くばかり。今はなかく氣も消て。たゞ一足も歩まれねど。二人の親もさぞや。案じわびてぞ在さんと思へばいと氣もせきて。小川の岸へ測りつき。着物を着んと其處等を見れば。笠も着物も埋まりて。少し小高く見ゆるのみ。手をさし入れて笠ひき起し。雪を拂ひて襟をとり。肩には被しが手龜り。袖さへとふす事ならず。嗟便なしと思ふ所に。颯と吹來る烈風に。息もつまりて吾しらず。其處へ礮と倒れしが。更にその後を知らざりけり。かくて上總の瀧新田なる。悪兒徴八は此ほどより。うち續きたる不憊倅に。たゞ一ツなる布子もうち負。三尺帯に燒穴の三ツ四ツあいたる古袴。吠のごとき烟草いれに。煙管さし込懐にし。晝のほとより立出て。この富口に至りつ。ごろつき仲間を尋ねれど。飲代となる事もなければ。夕ぐれ時に立いで。此大雪に笠も着ず。曝しも今は黄黑色に。

なりし手拭頬かぶり。此處へふらく來かゝりて見れば。丈なる黒髪を。みだしてうち伏す少女のすがた。怪しみがらちよりて。見ればいと艶しき少女。譯はしらねど帯ときて。氣絶なしたる容なれば。矢庭に是を引起し。見れば肌は氷のごとく。是は定めて雪吹にあたり。凍へ死んだものであらう。何でも近所の女兒だが。とはじめは少し憐みの。心ありしが忽地に。思ひついたる悪巧。かうしておくはおもしろいもの。薬火で肌を温めて。生かへつたら此方のもの。たとへ療治が叶はずとも。本錢いらすの骨折損。そうじやくと點頭て。矢庭にお菊が死骸を抱き。逸足いだして走りゆく

東都 梅暮里谷 峩著

第九回

風は地を吹て積雪おのづから融けり。肌を劈く寒天に。簑笠着たる一個の旅客。五十ばかりの供をつれ。往なやみたるむかふ風。喘々て來かゝりけり。右手なる森は明神の。社も遠き大門の。杉の林の中垣に。火かけちら／＼薄煙り。彼乞食等がうち集會。樹の下蔭に焚火して。囂々とかたるかと。思へば是はさにあらて。要こそあらめ年のころ四十ばかりの大漢子と。今一個は年もまだ。十まり四ツか五ツばかりの。眉目麗はしき少女なり。漢士は少女を抱きつゝ。右へ掻やり左に伏さし。焚火に膚を温めつ。ヲ、イ／＼と呼活たり。此とき少女は眼をひらき。四邊を情うちながめて。彼雄子が貌うち守り。たゞ。茫然ともものさへいはず。眉をしまめて慄々と。震ふ手元緊と把へ。男ヤいなを震へるぞへ。心太を見るやうに。手足ふる／＼して居すと。正氣になつたら火にあたつて。心をしつかとするがよい。ヤレ／＼果報な事ではあるぞへ。既に鳴戸の川ばたで。死んだを見ればかあいそう。大骨折て被て來て。肌温てやらふかと。思つても火の氣はなし。やう／＼でこの森の下。雪のつもらぬを僥倖に。ふき付たかれ落葉。腹から脊なかを温めたら。息ふきかへした運の強さ。シテお娘はどこのもの。名は何といふ年は幾箇だ。ア、慈悲ぶかい此微入の。めにかゝつたればこそ。サテ／＼運のよいものだ。ト口に任せて少女に。思ひつかする猫なで聲。底意は何としら齒のむすめ。やさしき語に解されて。荒蕪とうちわりひ。何處のお方がかぞんじませぬが。アノ恥かしい

身なりをして。雪吹にあたつて居りましたを。おすくひなされて下すつたは。誠に命の親同ぜん。私は鳴戸村で。半兵衛が女兒きくと申す。男ハ、アそんならアノ鳴戸か。わしも鳴戸の近邊だが。今までおまへの貌もしらなんだ。ア、よし／＼送てあげやう。微入といつちやア富口鳴戸。東金あたりで誰しらぬ。ものもねへ男でござる。サア／＼一所にア、しかし。あるかれるか。きく／＼いぶん歩行てまゐります。ハ、イヤ／＼おれが負てやらふ。今やう／＼と息吹かへして。この深イゆきを踏で往たら。また雪吹にあたらふも知れぬ。サア／＼負て。きく／＼イヤ／＼どういたしまして。ナニ／＼あるいて參じます。ハ、ハテサテ何もそのやうに。義理だてはいらぬぞへ。亦めをまはせばわしが厄介。それより負ふが此方もました。彼これいはずとサア／＼トやがておきくを抱おこし。脊に負つゝ雪ふみわけて。鳴戸の方とは右左り。路引ちがへて走るほどに。おきくは脊なかに負れながら。此方を見れば雪の夜に。それかあらぬか渦だかきは不動の森の幽に見へて。彼處ぞ鳴戸とおもほゆるに。そは迹にして往ほどに。心の裡に訝かりつ。されど恩ある此微入。殊にはいと深切なるにと。思へばそれさへいひ兼て。また一二町をゆくほどに。鳴戸はます／＼遠ざかりて。此ゆくさきに見へわたる。松の並木は土氣とおほし。こゝにていよく氣を悶へ。きく／＼モシ／＼あなたは鳴戸へゆく。おつしやりましたがアノ松は。大かた土氣のなみ木でござりませう。シテ見ますと右と左り。どうしたわけでござります。ハ、エ、だまつてゐろ松原が。土氣であらうが痴漢であらうが。死んで閻魔の廳へゆく。そなたが命を佐けたれば。とりも直さぬおれが子だ。子ならば親の好しだい。煮てくはふとて焼て喰とも。何のさしづをうけるものかト初にかはりし悪口に。おきくは思はず胸どつきり「イヤモウそれはおつしやるとほり。それにちがひはござりませんが。私の兩親は。いつぞやより煩ひまして。此せつは枕もあがらず、夫ゆへに不動さまへ。御願がけに參るほど。遅くなつては猶さらに。案じませうとそれが苦勞。どうぞ迎ものお情に。宿までお送り下さりまし。ハ、エ、ぐす／＼とやかましい。おそくなつて案じるより。あれぎり死んで仕まふたら。五年十年百年立ても。内へけへる事は

ならねへ。苦界十年些の間だ。命までは活きらねへ。おつつけおやにもあはしてやらあさ。何のかのと理くつをいはず。おれがいふ通りになれトよりもつかれぬ會釋に。おきくはますく胸塞がりて。這回は何といらふべき。詞さへなく慄々と。しきりに渾身の震ふのみ。されど命を佐けられしは。たゞ一旦の恩なりけり。それに絆され彼がまにまに。何方へ荷ぎゆかるゝや。それを此ま止べきならず。心地の平生にかへりしこそ。願ふてもなき儂倅なりよしや甲斐なき膂力でも。ふみ外して逃んと思ひ。腰を抱へし微八が兩手を。足ふみ伸しふり拂へば。思ひがけねば手はづし。ばつたり雪へ尻をつく。おきくは得たりとたちまちに起あがりて傍にある。荊に積りし雪かい握み微八が貌へ投つければ。微八はむつくと身を起すを。起しもたてず足くびを。とらへてそこへ引たほすに。かよはき力も此ときには。命を際と思ふほどに。微八はかひなく引ずられて。半身雪に埋みつゝ。片面泥にまみるゝを。手をもて拭ひ目を見はりて。怒り面に見はるれば。お菊はそのま、逸足いだし。走らんとすれどふり積る雪は脛をも超るばかり。一足出しても一あしあとへさがれる心地して。歩びかねつゝゆきなやむ微八はすかさず起あがりて。渾身の雪をはらひのけ。大股ふんで追かくるに。おきくはやさしき身にこそあれ。荒きわざをも厭はねば。心神さながら健なり。少女には似ず足はやくて。微八はほとく追つきかねたり。されど此方は大漢子。臂までも見はして。息を計りに逐なれば。争かおきくは逃果べき。間ひ三尺ばかりになる。微八は猿臂を伸しつゝ。おきくが襟をとらんとす。おきくは晃りと身をかはして。傍の藪へがさくゝと。下葉かきわけ逃るにぞ。微八は猶も奮震して小さかく逃るとも。何方までか逃さんやと。俱に此方の藪蔭へ。踊りいれれば荊茂り。衣の裾にまつわりつくを。うち拂ひかなぐりのけて。それがまにくおふほどに。向躰太股かきやぶりて血しほますく滴れど。絆ともせずして彼方此方とおひめぐりおひめぐり。彼明神の大門なる。相の並木のほとりへゆくに。おきくが心は勇むといへど。今日は朝より食をたち。そのうへ雪吹にあてられて。氣絶なして聞ひもなれば。今は身うちもつかれ果て。はこぶ足さへ四逆路なり。得たり

と微八は引とらへ。ハコレおきくわれはマア。おれになんの意趣があつて。エ、アノやうなめにあはした。モウく此方も合點ならねへ。わいらがやうな恩知らずは。思ふさまに戯淫で。そのうへ活て仕まはねば。腹があねへ。サアこれおきく今さら泣ても吼ても。とてもかなはぬム、かなしいか。コレサこつちを向ねへか。何だそんなにびんくして。ハ、ハ、いやなのか。否でもおふでもコレおきく。まだ〇〇〇〇〇〇〇〇。どりや一口といひさまに。株つらなる杉の木の。根へおしたほして〇〇〇〇〇〇。ほとく辱しめんとす。おきくはアレヨト身をあせり。はねかへさんともがけども。仲々力及ばねば。今はせんかたなくばかり。十方にくれたるその折しも。焚すておきし以前の火影。暴にばつと燃たちけり。微八は思はず首さし伸て。人やあるかと佞と見れば。間ひわづかに十たんばかりを。隔にけれどこなたには。大木の杉連なりて。左右なくは見わからず。されど頻りに火焰たち。もえけるまゝに訝かりて。伸あがりく。見るに思はず抱へたる。手の弛みしを憐ひに。おきくはやをらはねかへし。火影を見るより杉のかげ。かなたこなたへ逃さまよひて。火のあるかたへ往て見るに。溝に微八が焚火せし。明神の寶前にて。大杉の本なるに旅人とおほしく二個づれ。むかひ合つゝ火を吹けて。傍の株に腰打かけ。物かたらひて居たりけり。此者すべて何人とも。わきがたけれど。身にせまる。微八が難をのがれんと。兩個があはひへ踊りいれれば。二人は悔り身をそらして霎時守りてあるけるが。年二十四五なるは。主人と覺しく身形さへ。賤しからざる風俗にて。銀の銅金いかめしく。打たる腰ざしそりうちかへし。エ、なんだ驚散な。見ればやさしい女の兒。此ゆき降に里遠き。こゝへ來やう筈がない。不知案内のわれくを。誰かそふと化おつたな。狐か狸かサ、なんだ。正體を顯はしおれト白眼つければ供の男も。おなじく反をうちかへし。につくいやつト立かゝる。おきくは其處へ跪つき「ア、これわたしは狐でも。狸でもござりません。めつたなことをなされませぬ。チト譯あつて難儀するもの。どうぞ佐てくトあとと涙に哽かへる微八はあとより追かけ來しが。此體を見て序あしと。こなたに潜みて伺ひる。かの弱官は貌を和らげ「ナニ譯あ

つて難義するとか。サ、どういふ譯合て勾引にでもあふたといふのか。ママ。そのやうなことで。ア、モウ息がトさし俯く。二人は目と目を見あはせて。しばし有しがまた弱官が「コレ戀六や此むすめは。勾引されたものと見へる。定めて遠くの者でもあるまい。内をきいて送つてやらふか。戀ハ、アそれがよふござります。コレ〜おむすそのやうに。泣ずとも内は何處。親の名は。何といふと。いふたら直にわかること。送つてやれと旦那のおさしづ。サア〜いふたト詰れば。おきくはいとゞ哽かへる。涙をばらひ彼男の。貌見て恟り呆れけり。此方の雄子もおきくが貌。つく〜と見て呆るゝさまに。主人の男はます〜訝り「ナニそなた衆は知つた中か。戀イエなに知つたと申ではござりませぬ。ア、こりやア此むすめは。エモシ旦那。かたりめてござります。些ともおかまひなされませぬ。且「ナニ此女兒がかたりとは。きく「エ、そりやなんとおつしやります。私がかたりとは。アノおまへこそ見おぼへあるア、それ〜雁八さまに。なつて來て誑してお金を取てにげた。戀ナニおれをかたりじやと。ウヌふて〜少女めだ。咎もねへものに罪をきせたな。どうするか見て居おれそひかゝるを。且「ヤレまで戀六たとへちつとの間ちげへあるにもしろさきは女。怪家でもさしてはいひ譯がねへ。マア〜靜にしたがよいト制しても猶きかず。女兒はおろか子供でも。是はツかりヤア了簡ならぬト。亦もやおきくにとびかゝり。襟くびつかんて引たほさんと。いさむを留る弱官が。ヤレ〜までトたちまはる。おきくもアレヨととび除處に。晃りと落す金欄の。守り袋は見おぼへ。是はととりあげ弱官が「ヤ、此守りを持からは。そなたは半兵衛どのゝ女兒じやないか。きく「どうしてわたしがとゝさんとを「ヲ、それを知らいでどうしやう。わざ〜尋ねて此土地へ。きく「そうおつしやれば麴町の「いかにわたしは文里が助鐵次郎と申すもの。雅ないときにはおまへにも。きく「おめにかゝつたこと處か。とゝさまも母さまも。最大おせわになりましたと。申し出すは平生のこと。戀シテおふたりともお達者か。きく「その兩親がびやう氣ゆへ色〜苦勞をいたしました。戀病氣と聞ては氣づかひな。サア〜是から些もはやふ。何かのわけは距てゆつくり。頼ませうと

立あがる。戀六呆れて詞なく。もぢ〜するをおきくはとらへて「病氣のもとは此人に。誑して金をとられたゆへ。どうしてあなたは此人を。御供におつれなされました。戀これは近ごろ抱へた男。そういふわけは努しらず。そんなら是は盗人じやの。世にいふ盗人猛しく。人を怖れずとやら。たとへるとほり。己れが悪事をした國へ。浮く供をして來るとは。さてこそ大膽不敵なやつ。何は兎もあれ引縛してト立かゝられて戀六も。身に覺ある悪事の露顯に胸まづ恟となせしかど弱み見せてはなるまじと。眼を見はり狂ひまはるを前にはおきく後には。鐵次郎が立塞り左右なくこゝを逃させず。彼方此方と挑みける。蔭にしひし悪兒微八。やうすとつくと伺ひつ。元より親しき戀六に臂力を添んと踊りだし。おきくを矢庭にかきのけて。鐵次郎に打てかゝり。おめき叫んでおひらはらふ。手練さへなき鐵次郎も。年まだ弱き壯夫なれば。二人を兎身に追つかへしつ。打つたれつ挑みあふ。おきくは是見て氣もあぶあぶ。怪我し給ふなと戀六が。後にとりつき足に齧縁。微八が袂を引つかみ。ひき戻せどもかよはき力の。敵對べくもあらざれば。しだいに社の階まで。こけつ轉びつ双方四人が。争ひいまだ雌雄を分たず。此ときギイと寶殿の。戸をあくるおとみ〜ちかく。踊り出たる一個の雄子。物をもいはず戀六と。微八を宙に引つるし。白眼つめるをよく見れば。鳴戸村なる市藏なり。中にも戀六恟くりして。此とき面色青く變し。物いふ術さへしらざりけり。市藏聲を高くして「おきくどのもよく聞れよ思ひ出せば七八年。賭博ばかりを粹として。戀六微八などいふ。悪兒等に突あふところ。ふとした事で半兵衛どのが。尋ねてござつて大まいな。黄金貯はへてござるを見て。ふいと浮んだ悪巧。この戀六めを莊官に似せ。まんまと金を奪ひとり。二人半わけと跡から往て。みればそれより戀六めは。逃さつてゆくゑしれず。始めてわるいことをしたと。氣が付ても取てかへらず。内へもすご〜かへられねば。すぐに死んでと思ふたれど。此戀六めを引とらへて。恨みはらしたそのうへでと。思ひかへして今日が日まで。うか〜命活生でも。商賣なしの乞食同ぜん。こゝらにぶら〜する日もあり。武さしさがみの方へもゆきて。一日〜と贈つたが。さても故

郷が懐かしく。また此邊へ立いらて。是なるやしろに二三日。暮すともなき今宵の雪。降こめられて敬みるに。も
のさはがしき表のやうす。とつくと聞て欠出しました。這奴二人に繩かけて。おまへがたに渡すほどに。またわしに
も繩かけて。かたり仲間の大罪人。ともく引て知縣所へ。訴へなされト悪びれず。傍にあり合繩かいたり。難なく
二人を縛めて。両手を又きどつかと坐しサ、わしにも繩かけて。引立ゆかれよおきくどのと。覺悟の體に鐵次郎も
おきくも俱に感激して。その誤りを改めれば。罪にあらずといふことあり。殊にわれく戀六と。微八がためにうき
めを見んと。したる處を救はれたる。その鶴恩さへあるものを。繩をかけんは思ひもよらずと。しきりに是を辭退し
て。やがて市藏も共。二人の者を引たて。鳴戸村へと急ぎける。かくてその夜半すぐるころ。半兵衛が家に
たり。背戸をがらりと引あくる。音きつけて案じわびたる。お梅はそこへ駈いて。見ればおきくは文里が助。鐵
次郎に扶けひかれて雪うちらはらひいるを見て。一回は歡び一回は訝かりその絆わけをとふほどに。鐵次郎も簀笠ぬぎ
すて。一別以來の情をのべて。絆あらましを説けるほどに着病さへもわするゝばかり。うち歡びて半兵衛にも。しか
くなりとかたりつゝ。暴に曲突を燃つけて足沃がせんと立さはく。跡方よりして市藏が。引たて來ぬる戀六微八。
かやうくと心の底さへ。いちくざんげなすほどに。半兵衛お梅も市藏が善にかへれる心をかんじ。その舊來の惡
をとがめず。よろこびあふこと大方ならず。されば戀六微八の二人は。翌莊官へ引わたし。且市藏も諸共に。引給
へといひけれど。莊官もまた義心を感じて。半兵衛が方にあづけおきぬ。かくて鐵次郎は半兵衛にうちむかひ。先
頃つゞく薄命に。世を疎んじて此邊りへ。蟄居ありしは父文里も一重もゆめくしらざれば。いかにくと日毎にあ
んじ年をかさね候ひしに。ふとしたことにて定かに知れ。しからばむかへ申べしとて。遙く尋ね候ひし。思ひ設けぬ
下奴の戀六。叔御夫婦の仇なりとは。これもまた不測なり。渠近邊より吹擧して。此春抱へし新參。成田の不勤へ參
詣と。いふて供にはつれたれど。かゝるべしとは思ひきや。いざ準備し給ひて。在士へ赴き給へとて。他事なき

文里が書翰をさへ。とりいだしてすゝむるにぞ。今はなかく離むによしなく。その頃無沙汰に此所へ。蟄居しぬる
はしかくなり。それよりかやうと縁故を。はなし聞へて病中ながら。深切黙止がたければ。お梅も髪をとりあげ
などしつ。さて莊官なる雁八にも。此よし具に物がたり。發足の準備をするに。彼戀六と微八の二人は。惡事重罪な
るにより。俱に頭を刎られたり。同類なれども市藏は。善心に立かへり。且善心あるものなればと。その罪を救され
ければ。市藏今は世のなかに思ひおくことなしといひて。既に頭をそり圓め。一ツは父母の菩提をとひ。二ツは是な
る人々が。息災を祈るべし。三ツには渠等が後世を營み。此むらのかたほとりに。さゝやかなる庵を結びて。生涯
行ひすましけり。渠が渾家は生りや死りや。絶て往方を知るものなし。さても半兵衛鐵次郎等は。日ならず在士へ赴
きしかば。文里一重も歡びあひて。死たる人に再會せし。心地にますく悦びけり。かくて其年も暮に及び。あら玉
の年たちかへれば。半兵衛夫婦もだんくに。着病も怠り果。平生のごとくなりけるほどに。是より活生を營みけ
り。鐵次郎は廿歳を超て。定まる渾家もあらざれば。お菊を嫁になすべしと。親の相談とひのひ、婚姻さするに申
睦まじくて。男女あまたの子を設。ますくはんじやうしたりしは。みな孝行の徳なりけり。

孝女二葉錦卷之九大尾

仇
競
今
樣
櫛

仇競今様櫛初編卷之上

紀山人戯作

第一回 ほころぶ花

そもあし引の山鳥は。雌雄眠床を一にせず。山の尾上を隔てて寐るが。曉天の日に映じて。雄の初尾に移れる影を。雌のやうにおもふより。啼ことあるを人よんで。をろのかゞみといへるなり。夫とおもひ合する奇話あり今は六百餘年の昔。右幕下柳都に治國要を開きて萬民歸伏したる頃ほひ是も鎌倉雪の下尾池小路といふ處に。家主の郷兵衛といふものあり。別て貧しくはあらねども。萬おもふにまかせざるが。先の郷兵衛は實躰なる性にして。人にも用ひられたるが。男子一人ありて身まかり。今の郷兵衛は。其跡へ入夫せしものにして。原來はよしある武家の浪人なり。物足らぬ暮しをも。苦勞にはせざれども。天性心ざまよからぬ人にて。下をあなどり富る人には媚へつらひて。おのれが榮利のみを事とせしが。今の主人には男子一人出来たり。先代の忤なる。物領は梅太郎と呼ばれ。器量利發より常ならず。弟は菊次郎とて。是は少しく心ばへ父に似て横しまをのみ見ならひけり。しかるに郷兵衛の妻おりのが爲に兄なりける。比企が谷の金澤屋瀬兵衛といふ者の一人の娘ありしが。天性美麗にして。花も羞るばかりなるに。それのみならずこゝろはへやさしく。幼き時より兩親に。孝行に仕へしかば。父母の寵愛かぎりなかりしも。瀬兵衛は前に病死しけるに。その妻いたくなげき悲しむのあまり。終にわづらひつきて。これもつゞいて身まかりければ。跡を相續すべきものは女子といひそのとき娘お春僅に十歳のことなるゆゑ。その後見はゆきとゞかぬより。伯母の事なれ

ば。おりのは郷兵衛にかたらふて。金澤屋の跡諸事とり片づけて。不用なる品はみな賣拂ひ。その料は人に預けてこれはおはるが身に付べきものとし。あるひは両親の菩提のために寺へ茶湯料などそれ／＼に納め。終におはるを引とりて。わが子のごとくにいとほしみてそだて養ひけり。然るに月日のあしはやく。梅太郎は今年十九歳。菊次郎は十七歳。お春は十五歳になりぬ。梅太郎はそのうまれ顔ばせ美しく手跡もよくし。歌の道に心をよせよろづすなほなる性にして。只實情に家へのみありて。両親に孝行をつくし。人とまじらひ遊ぶ事を樂とせず。又お春も直なる生れといひ。利發ものなれば伯父伯母を實の両親のごとくに孝行を盡し。且容顔はたくひなき美人にて。鎌倉廣しとはいへども。在斯美目かたちうつくしき。女は又外にはあるまじと。なべて評判したるより。近所の人もよき一對の夫婦ごろならんと。送にいひけるより彼等が異名を盛にては。尾池小路の京雛とのみ呼びけるとぞ。その事誰いふとなく菊次郎は聞て。かねてお春をわがものにせんと。子供心の中よりも。おもひ居たる事なれば。しきりに妬くおもひけり。梅太郎もかねてより。このお春に心あれば。何とぞして折もあらばと。心のうちにしたふのみにて。人目の關の繁きといひ。いまだ年わかして何かはづかしきやうなれば。いひよるしほも夏虫の。胸のみこがし居たりけるに。お春も梅太郎が美しき男ぶりに。こゝろときめ。きおのづから。なま情のつくころなれば。おほえし手利の縫物も。いつしか手にさへ束の間も。小袖の妻としよばれなば。嬉しからんと娘心に。仕立おろしの戀衣。針のいとゞにむすぼるゝ。おもひに啣ありさまなり。ある日郷兵衛夫婦は。長谷の境内にて。大間々光榮寺の百観音を開帳あると聞。參詣に出ゆきしが。留守にて梅太郎は一人便室に本を讀ていたりしが。折ふし下女は二階にて。髪を結ふて居るに。菊次郎は毎日宿には寄つかず。遊歩行ゆる。よきをりなりとお春は養花を入れて梅太郎のそばへ持ゆき。はるモシお春はばなを入れました。めしあがりませんか。梅アイそれはありがたい。御念のいつた。はるアノ慇懃らしい。あなたは誠に物がないね。どうぞわたしを實の妹のやうにおもつてくださいますし。梅わたしやア妹のやうにやアおもや

せん。はるなぞでございます。お氣に入らぬ事があらば。どんなにもお呵なすつてくださいますし。梅氣に入り過て居るからさ。はるじやうだんばかり。梅ナニ實に妹とはおもはねへ。女房のやうにしてへとおもふが。それもこつちでばかりかたをもひで。おまへのいやなはしれてある事とおもふから。けふはあすはとおもつても。つい口へは出さないのさ。はるあのネ。おばさんがネ。いつぞや芝居へ參たとき。音羽屋がいつそあなたによく似て居ると申たらネ。伯母さんがおつしやるには。おまへは菊次郎と梅太郎では。どちらがよいとおつしやるから。わたしは菊さんは沙漠のやうでいやでござり升。梅太郎さんと申たらね。菊さんがどんなに腹をおたちだらう。梅ム、菊次郎も一所にいつた時か。はるいつしよにサ。そしてネ。お聞なさい。梅太郎と似合ひころな女夫だ菊次郎はまたお春よりも。美しい象三のやうな。お娘さまの處へ聲にやります。おはるはマアいつまでも。どこへもやらずに内におきますとおつしやつた時はネ。ほんにうれしくつてどんでございましたらう。梅そりやアほんかへ。はるハイそしてね。アノ菊さんにはもう／＼まことにいやだよ。うるさくて／＼。とき／＼いやな事ばかりいふから。いつウかなんぞは。二階に琴をさらつて居ましたらね。来て柱をいぢつたり。爪をとつてかくしたりして。それわたしを無理におさへて。色になつてくれるかなんぞとおいひだから。手をくつついてやつて。そして伯母さんにみんな告條てやつたよ。そうしましたらネ。菊さんが手めへ量見がわりい。マア役者にたとへて見な。兄貴は物領のソレ甚六だらう。おいらは音羽屋の菊といふ字が名頭についてあるから。どうしても色男だなんど。手めへかんで美艶風ばかりお言だから。もう／＼にくい口だよ。梅うつちやつておきなせへナ。ほんにこのごろは。喜瀬川さんへひさしくいきなさねへの。あの本はもうちつと拜借して置てもよからうか。はる新築曲集かへ。ア、ようございますヨ。アノよく委しく書たものだそうでございますネ。梅そうさ。コウお春さんおいらはとうから實情に惚ぬいて居るぜ。はるうそばつかり。梅ナニおめへにうそをいふと罰だあたるはな。はるわたしこそとうから。トいひさしてかほ赤。梅かゝさんは實に二人を夫婦に

りて。お氣をもんでおわづらひなすつて。旦那さまや御新造さまに。御苦勞をおかけあそばすと。やつぱり御不孝にな
 りますから。もしさやうの事があらば。日ごろ何事もおかくしなく。ひとかたならずお目をおかけあそばしてくださ
 るわたくしにばかりそつとおつしやつてくださりまし。人には決して申さず。よい工夫をつけますほどにと。詞をつ
 くして問ひけるにぞ。お秋は重き病ひの床にも。今さらはづかしさにあげかぬる。まくらとかほにもみぢして。しば
 しいらへもせざりしが。あきとねや。よく問ふてたもつた。わしが病ひといふは實はトいはんとせしがさながらはづ
 かしくいひかぬるさまにさてはとおとねはなほとひかけ。とねどなたでござります。あきナニ煩はそれゆゑでもあ
 るまいよ。とねまアなんでもおつしやつてくたさいまし。あきそんなら人においひでないよ。とねなんの人に申ませ
 う。モン。本次郎さまでござりますか。あきいへ。とねアノ旗屋小路の基さんかへ。あきいへ。とね竹さんでは
 ござりますまい。あきなんのばからしい。それよりお刀禰のは豊田町の信さんだらう。とねハイわたくしも申あげま
 すから。マアあなたどうぞおつしやつて聞してくださいまし。あきあてへお見よ。とねどうもしれませんが。まア名
 頭を假字で一字おつしやつてごらんじやいしな。あきかなで一字はむづかしいねへ。とねなんのあなたたとへば言
 右衛門さまならば。この字又。まアそういふ人はございせんけれども。箭布さまならば。やの字と。あき夫はわかっ
 て居るがネ。そんならアノ。む。の字か。うの字だよ。とねエ。むの字と。うの字では。お二人ござりますのかへ
 あき「なんのマアトなみだひとねは。とねおゆるしあそばせよ。そしてうの字とむの字とおつしやいますのは。あき「なにさ。う
 て居るよ。トなくおとねは。とねおゆるしあそばせよ。そしてうの字とむの字とおつしやいますのは。あき「なにさ。う
 の字かむの字か假名の事をしらぬからよくわからないといふのさ。とね「へエさやうならそのお方のお名はよく御ぞん
 じではござりませんで。あき「何ぞそなたもわたしに似てわからないのふ。梅といふ字だよ。むめと書たも。うめと書
 たもあるからさ。とね「さやうでござりますか。梅さんと申すは。ア、あの音羽屋の事てござりませう。あき「なせへ

とね「梅幸ではござりませんか。あき「マア梅幸にいさうつしだよ。とね「わたくしにはわかりませんヨ。あき「ム、おまへ
 はしらなからう。鎌くらに二人とない男ぶりだといつて。とね「あの評判の雪の下の尾池小路の人でございますか。ネ
 れならついで見ました事はございせんが。よく人の噂を申す。京びなどいふ畧名の人。ア、ほんに夫なれば御もつ
 ともてござります。あき「アノ内へたびく来る。郷兵衛さんの息子だはな。とね「エ引。さやうでござりますか。アヤ
 く「あんな九太夫のやうな爺さんの子に。どうしてそのやうな美男が生れたものでございませう。トいふところへ人の来るさ
 て。委細のわけをつふさにかたりしかば。村次夫婦は娘の病ひの根が知れて大きによろこび。これより急ぎ雪の下へ
 使を遣るに。郷兵衛は地代の引負の未進が數多其外にも借用あれば。それを勘定せよとの使なるかと。ひやくもの
 て琵琶小路へいそぎゆき。村次に對面すれば。案の外に酒さかたなど出して大きにもてなしけるに。郷兵衛はぶる
 くものにて。さてだんく御借用が不義理になりましたとあたまをかきていひ出すに。村次はうちゑみて。何さ
 くその事はお返しなさるにはおよばぬ。いかやうでもようござるといふに。なほさら合點ゆかざりしが。村次はふ
 たゞび郷兵衛にむかひ。俗今日わざく招きしは。外の事にもあらず。親の口より言憎けれど。娘の重病は其許の子
 息梅太郎に戀こがれての事なり。助るとおもひて聲に呉てたまはらば。命の親の貴さまの事。なかくあだには思は
 じと。理りせめて泪ながらにたのみけり。

仇競今様櫛初編卷之中

第三回 さよあらし

當時村次が妻のお宇津も。一間を出て郷兵衛に向ひ うつ今内の人から申ましたらうが。扱外の事とちがひ。親の身ではおはなしもしくいくらゐの事なれども。それといふもわが子の可愛さ。その様子をば兼てから。かくしてばかり居ましたを。やう／＼の事で女どもに聞せましたが。梅太郎どのはおまへの惣領息子。お大事の跡取ゆゑ。なか／＼貰ふ事もならず。又娘はひとり子の事なれば。とても添ふ事はならぬほどに。おもひ切れと申てきかそふかとぞんじました。漸くよわる重病。今ははや燈火の。消るを待やうなものなれば。それにそんな事を申て呵ては。すぐさま死は定の事じやと。女どもが申すゆゑ。ア、かわいそふに。あれ程迄にも戀したふものかと。また親の愚痴ではほんに一時も夫婦にして。そはせたならばどのやうに。歡ぶであらうとぞんじますゆゑ。それでまことに無理な事ながら。どうぞ聞とよけてくださらば。トはんぶんきいて郷べるはもとより。せがれをこの大家へ聳入させん事を大きによろこび。一おうの思案にもおよばず。早速にのみこみてしながら。郷それは何よりお安い事と申すうちにも。却てわたくしからこそ。お願ひ申たいくらゐのこと。冥加至極もござりません。なるほど梅太郎は惣領てわたくし方の相續人てござりますけれども。なんのそんな事を申て居られます處てはござりません。ことに舍弟の菊次郎と申すがござりますれば。さしつかへもなし随分きつとさし上ませう。トいふに村次夫婦は大きによろこび郷。斯て郷兵衛はいそがわが家へ立かへりて。目よりこゑ。がう「サア」早く御神酒を上。コレみなこゝへ来い。マア／＼歡べ。こりやなせ燭をはやくつけなれ。目出たい。ト郷をだり出して。お合はせられたる女房はおはし。梅太郎。トの「アヤ」あなたまた御酒に酔ておかへりか。郷酔てもかへ



るし。まア祝ひ事がある酒の燭をつけさせや。りの「アイ今お春ははつを連れて湯にまゐりましたから。わたくしが。トはしらねどおみきをあげ酒のか。扱その容子を尋けるに。郷べるははに。郷さてまづ歡べ。あの大家の萩原屋で。是非悴の梅太郎んをしてもち来りて是をすゝめ。これに越す僥倖な事があらうか。そこで約束をとりきはめてかへつた。トてがらしためを。婿養子にもらひたいとの事。これに越す僥倖な事をあらうか。そこで約束をとりきはめてかへつた。トてがらしたるにのり。トそれはまア／＼おもひもよらぬ。殊に惣領を外へつかはすといふ事は。あまりつまらぬ御了簡またあのお春と兼てからおもひあふた中をむごたらしく引わけると申すはそれはどふもむたいな事。第一柳之助。ト二人が中へも不便なり又先方も大家で。人にしられた大金持なれども。御夫婦ながら人の評判のわるい人たちは左も右も。なぜ又見るかげもない此方など。縁ぐみをしたといふのは。郷ム、夫はおれが人徳といふものだ内ではこなたをはじめ。やかましいのヤレ世話好だのといふが。おれが徳満たるものだによつて因みたがつてこの通り。イヤはやうるさい事さ。時にさめた最ちつと熱燭にさつしやい。おりの「ハイト酒のかんを。さやうならばなせ弟の菊次郎をつかはさる筈にはなさいません。郷ばかな事をいはつせへ。あれは此方の相續人だ。アノ惣領の馬鹿野郎めは。本ばかり讀て居て。第一慾を知らねへけれども萩原屋などの聲には随ぶんいゝのさ。りの「ム、こまつたものだ。あなたのお目には。アノ弟の。大不孝ものゝ悪ものがお氣に入つて。まアそれはそれにもしろ。あれ程に夫婦のつもりになつて居るお春をば。郷これさ／＼貴さまはものゝわからぬといふものだにもかくれてちゝくりあつたくらいの中だ。おれが免した夫婦といふものではないは。りの「それはあなた御無理といふもの。あれ程わたくしが申たらば。すこしおもふ旨があるから。うつちやつて置とおつしやつて。すでに身もちになつて。その子を取あげる時も。あなた手つたひまでなすつたじやアござりませんか。郷やかましいはへ。女さがしく牛賣そこなふとは手めへの事だは。エ、四の五のいふもの。トとして縁談といふものは。第一が當人の心底。それにマア當人にもなんともいはずに取きはめるといふは。郷コレム、わからねへくどくぬかすな。親のいふ事を背く子があるものか。りの「イエ／＼そうおつしやつても縁談ばか

りは 郷エ、七めんどうな事をぬかすか。そんなら言て聞そふまづおはるとあいつがちくり合を。そのまゝ捨ておいたのは日外瀬兵衛が死んで。金澤屋の家財を引うけて賣拂つた金をば。あの子の身に付事として外へあづけて置たはよししかかるところが連々都合がわるいによつて。其金をばちつとづゝ受取て。去々年までにみんな遣ひきつたのだは。それをばかくして居たのは。やかましいからの事だ。處て外へかた付るには。是非身のまはり手道具にした餘りは持せてやらなけりやアならねへは。そこでちくり合せて終子が出来たはなほ幸ひ。疵物にすれば人もゝらはずよしや子はできずとも。今あのごとくして置て。外へ片づけやうとしても。一旦梅太郎の女房になつた女が離縁されたのだと外は名がつかねへは。そこで兄の野郎作めはよそへ婿にやつてしまひ。お春は菊次郎が女房にづるゝべつたり孫はそのまゝ孫にしても。是子細なき上分別。トてまへがつてのながものがたり。興さめたるあまりことばも出ず。夫の顔をうちまもりあるそのところへ。表にどやゝあまたの人。つり臺にさまゝの進物樽さかなをとりそろへて内に入り使の者上下を着し。しかつべらしく口上をのべて。今日幸ひ吉辰なれば直さま結納を送り申すゆゑ。幾ひさしく目出たく御入納くだされて。明後日は最上吉日なれば。婿入の祝言の用意いたし相待をり申すとの事なるに。郷兵衛はぞくゝよろこび。結納のしなく目出たく受納て。いよく明後日善はいそげと申すなれば。相違なくつかはし申べしと。對談してぞ歸しけり。在斯ければ妻のおりのは今更に詮すべなくも。恨み泣にたゞひとり。泪汲出すばかりなりこの折からにお春は湯よりかへりてさき程よりのやうすを立聞。泣よりほかのことぞなきやがて梅太郎も。用むきしまひて歸り来るに郷兵衛はよ。郷これゝ梅太郎こゝへはいれ。梅ハイモシこの樽看は何でござります。郷ア、夫はそちが身の出世の祝事。目出たい結納よ。コレ其方を琵琶小路の萩原屋へ嫁に遣るがうれしいか。トなほくはしくそのやうすあきれはてしし。梅「そりやモシあなた。憚りながら御無理と申すものでござります。さほどの事を當人のわたくしへは。なぜ又おつしやらずに取きはめをばなされました。親子と申しても。最早十五歳以上になれば。一人前の男と申すも

の。夫にあなた親じやと申て。御自分の了簡で。一應いひ聞せもせず。縁談をきはめると申事がまアござりませうか。それは左もあれわたくしにはお春と申す。郷「コリヤゝ手まへもまたお春ゝと。あれはひつけう内證事。親の免した夫婦でない。まづ密通の不義の沙汰だ。梅「これは怪しからぬ。すでに眉こそおとさねども。齒黒もつけさせたその上に柳之助といふ。郷「これさ早い道理が。女房でないといふ證據は。まづ誰が媒人て。いつ取結びの盃をして。いつ誰が謠ひをうたひました。手まへなどはほんの懐子で。世間のやうすも知らず。番處つめる事也。へもたびゝ出動して見なくては。理といふものは分らぬは。トいふとはおはるはしやうじのかげ。はる「そりやあなた御無たいでござります。おかゝさんもあなたも御承知で同床寐を。郷「コリヤ馬鹿ものめが。いつ免許たといった。證人はだれた。うぬ我儘をぬかすと追ひ出してしまふぞ。トもつてのほかにいきどほる。父の一徹といひをぎはらやへつらふて。最早とりきはめしたることなれば。今さら變改はなるまじければ。左右いふは不孝なり。といふてお春を見すてがたく。柳之助もふびんなり。とやせまじかくやせじと。途方にくれて案じわびしが。よくゝおもへば大恩ある親の事。又實の子の菊次郎に。家督相續させるこそ。老ての後も心安からん。親には一命も惜むべきにあらじト心をしかと。梅「いかにもあなたのおつしやること。委細承知いたしました。郷「そんならきつと背ぬか。梅「かしこまりました。トいふに郷べそぞくゝよろ。郷「ア、出来たゝ。それでこそ繼子根性でなく。ほんの親孝行と申すもの。コレおりの。サアゝ喜べゝ。トひとりいもやすはいその儘そこころびねのふじの山をや夢に見るらん。噫無慈悲なり強慾なり。梅太郎はわが部屋。梅「今度の事は最早取りはめもしたるものなれば。左に右背く事ならず。殊にそなたは知るまいが。萩原屋には大まいの借金。なかく急には返済もなるまいと。案じて居るくらゐの事。今回の縁談を不承知といへば。先方は定めて噂にも聞たであらうが尋常ならぬ難題者。なにかむづかしきいふは必定。して見ると大切なとゞさまの御難儀のみか。今の株にも離れてしまはねばならぬやうにもなりゆくこと。じやに因て一旦承知して行はゆかうが。さぞ其方は恨めしい男とおも

やらうが。心の中はいつかな。たとへそなたに半年や一年別れてゐても。決してかはる事はなく。いかにもして先をば離別し。是非添とげるやうにしやうほどに。かならず泣いて恨んでたもるな。こゝのところをよく聞かけて。ア、なんといふても實の親なれば。どふなりといひやうもあれど。義理ある父のいふ事ゆゑ虫をば殺して詞はそむかれぬ。いらくすかしなだむるにおはるはしじうしやくりあ。はるゝみな御もつともてござります。ちつともあなたをお恨み申す心はごけなくよりほかのことばなくや。ふしづみたりしが。ざりません。又とゝさまの被仰事も。御無理ともぞんじませぬ。これもさだめて。據ないわけ。わたくしも實の両親があるならば。このやうなき目は見まいもの。やつぱりわたくしが身の因果。因縁のわるい事と。あきらめるより外はござりません。今のやうにおつしやるは。別れる今日の捨詞。たとへ一年が五年過ても。なんのそうはなりませぬわたくしはともかくも。一生あなたのお側に居られずば。生てはをりませぬ心にとりからおもひこんでをりますゆゑ。どうぞ跡でもこの柳之助をば。御ふびんを掛てやつてくださりました。へ來りていろゝにだめつなきつして三人が。ともに聲たてふししづむは。あはれなりけるありさまなり。

第四回 あださくら

實に世のさまの儘ならぬ。ならひなれば古へより。憂世とこそは唱へたれ。斯てその翌日も泣あかしなき暮して。第三日めは吉辰ぞと。明日の別路今より惜みつ。一夜を千年萬代とも。後にはあふ瀬の有や無やの。關も人目もいはねども。容易に見ゆる幸もなからんなど。死ぬべきばかりかきくどく。お春が心察し入りて。涙はなんと千行の。瀧のしら糸線かへし。別れはをしの一つがひ。うき寐の床になげきふす。明けば早天より萩原屋の迎ひの人。媒人何がしなど。みなく相詰せき立れば。なごりはつき涙をば。隠すとすれどほに出る。尾花が袖を拂ひもあへぬ。露にしれば母親は。たぐささいなめてし。りのコレお春。さぞまア無慈悲な親とうらめしく思ふであらうが。どうもわし

が爲には實の子。でも郷兵衛どのゝ爲には繼子ゆゑ。その義理があれば押てもいはれず。よんどころない今度のしぎ。まづ梅太郎が心さへかはらねば。またよい事もあらうほどに。一旦はつがふた詞にしやう事がない。たゞちひさい子をなぐさめて。とかく時節を待がよい。此すゑはなほさらに。わしもいよゝいたはつて。世話をしてやるほどに。トしんせつにいほるゝほどな。又しばしとして肩衣の。脊中をなほし袴ごし。まがつた親のどうよくしん。そのおしつけたしわざをも。いふ事ならぬ義理の縁がせなかなかききて。梅「たつしやて是からはわしにかはり。御孝行申てくれ。トいふもな。ゑかるゝはかなきわかれとしらが。お。郷「サア。何をして居るぞ。はやく。トよびたてられせんかたなく立出さし。みだにこやぢはとかくにせきこみこゑたて。郷「サア。何をして居るぞ。はやく。トよびたてられせんかたなく立出さし。みだにこ大きによるこび。ともにとりもちてぎんぎめげば。すこしも早くと急がし立られ。いとまを告て立出しが。急ぎてつい脇差の小づかを取落せしとて。わが部屋へ入るに。お春もつゞいて入り。又さめざめと泣出せば。この時お春にだかれし柳之助は父の梅太郎がかほを見て。につこりわらひたるに。おもはず胸いづばいにふさがりて。つい取おとすの。小づか。あやまつて梅太郎は足の大ゆびを切つたり。ちしほながるればおはるはおど。はる「ヲ、あぶない。ほんによく切れるお小づかてござります。トいひつ。おやゆびを。祝ひ事には血のついたものはおわるうござりませう。これはわたくしがいたゞいて。いつまでもあなたの像見と。トほかの小づかをとり。是てよろしうござりませう。トいふうちもまたせきたつる。別れをも思ひ切りつゝ世の人に。未練といはれん耻しやと。梅太郎は立出て一おもひにぞ駈ゆきしは。不便なりける次第なり。然るに萩原屋にては。上を下へとどさくさゝ。そりや婿さまのお着じやと。出逢ふ人々案内の人。立派を盡す婚儀の大禮蓬萊の島臺に種々のかざり付。見れども見えぬ梅太郎は心焉にあらざれば。只お春が胸のうち。左右にあんじ煩ふて。千秋萬歳の祝言の。盃も。忌々しとのみおもふなるべし。花嫁は病中の事なれども。戀筆の梅太郎を。わがものとせんと極まりてより。急に心清しくなりて。床をはなれ髪をかきあげたるに。美しき女ぶりお春にも劣るまじく。梅太郎も心にうき事あらざりせば。この新枕のいかばかり楽しからんに。お春のなげき心にわすれず。顔に

は出さねど胸になく。かなしさしらずもてはやさるゝは。なほひとしほにうき泪おもしろからずうちふしたるが。お秋は露しらざれば。おもひそめたる時の事より。わづらひ着たるその容子。逢れずは死ぬべしと。覺悟したる事まで。残りなくものがたりしたれども。梅太郎の耳へは入らず。よきほどに挨拶しつゝ。只天の明るをのみ今やくと待たびて。東のしらむ比をひに起出で。近ごろ八幡宮へ日參を致すなれば。けふも參たし。よつとかへりてやうすを見たきと。不可簡も出しはせぬかと。案じらるゝより。お春をすかしなくさめて置たしとおもへば斯もいつはりけれども。村次夫婦はこれをゆるさず。三日も濟ざるうちは外へ出す事なりがたし。鶴が岡へは代參をつかはすべしといふに。せん方なくも止りけり。斯く一日を百年のやうに待て程なく三日の祝義もすみしかば。翌朝未明に鶴岡へといつはりて子僧一人を召つれて。急ぎわが實家へ走りゆきて見るに。郷兵衛は前夜無盡へゆきたるよしにて眠たきと見えていまだ起す。下女と母ばかり見ゆる程に。まつなれにしおのが部屋に入り見るに。お春は蒲團を出したるまゝにて床もとらず。臥衣も着更ず。幼子の寐たる枕上にうち伏て。泣つかれ眠り居る顔はせ。消かゝりたる行燈の火かげにちら／＼してめつきりと瘦たるやうに見えて。目元の赤く泣はらし。髪の毛にかゝりたるさまは。見るにあはれとそのままよりそひゆりおこして。梅コレお春。あんまりなつかしさに。どうしたかとおもつて來たぞ。マア／＼かはる事もなくつてといひつゝいだきひきよすれば。お春は涙にくづをれて。よく來てくださいました。といはんとすれば口隠りて。泣音はどかる千筋の涙。いとどに袖にたゝへたり。郷兵衛は目をさまし。おき出でこのよしを聞。しゆるほうきをもちてこゝに入り。おのれ何ゆゑにかへり來しぞと。いひさま打てかゝりけるが。梅太郎さま／＼にあやまりて。只ちよつと親父さまの御機げんき／＼に來れども。いまだ起出給はぬゆゑと。さそくをかすわびことに。郷兵衛すこしにのこりして詞をやわらげ。夫なれば早く歸りて。この後はどのやうな事ありとも。あちらの兩親を實の親と敬ひ

大切に孝行せよ。釋迦に心經ながら。よく用ひよとだましすかしてその儘に。早々に追ひやりけり

仇 競 今 様 節 初編卷之中終

仇競今様櫛初編卷之下

第五回 花ぐもり

借も萩原屋にては。お秋が病氣は漸々に癒たれども。お秋はある時氣に入りの侍女お刀禰にひそかにいへるは。おもひくつてまつ死ぬほとこがれわづらひたるも。其方のとりなしにて今の如くなれる事は。うれしさこれに越す事あらざれども。その梅太郎さま。さのみ邪見にてもなく。よく情ふかきやうにはあれどもとかく夜は俱に寐るといふばかり。ほんの名ばかりの夫婦なり。されど思ふ男を夫として。朝夕顔見るうれしさにいつか病氣はなほつたれど。まことの下紐はとけしなきあだむすひぞと。うちかこちものがたりし。されどもやがて長い年月の内にはまたお心の解る事もあらんかと。そのみいのりて待なりといふをお刀禰はうち聞て。なる程聲さまのお顔つき。どうか物思ひのあるやうと。お兩親さまにも。とんだお氣に入りの結構な聲さまなれど。御苦勞のあるやうなを。とかくにお案しあそばしますと。物がたりをなしけるが。その日郷兵衛は書狀にて。密に村次がもとへいひ越したるは。梅太郎事。當分けて他へおん出しくださるまじくと記し。なほかのお春が事も。巨細に申つかはしければ。原來とおもふより此後門へもいださぬやうにして置たりしとぞ。斯りければ幾日たちても梅太郎は尾池小路へゆかざれば。お春はいとどに案じわづらひ。何となくきぶんあしくて。食さへろくろく喰はざるに。弟の菊次郎は。左右五月蠅お春につきまともて。さまぐにかき口説けば。その時々々に耻しめてたしなますれども。親の馬鹿押のつよきを受つぎて。面の皮厚くもいひ寄りけるが。けふもよき。菊「コウお春さん。なんとまアそうかせいをかけた三絃の糸のやうに。つんとするこたアねへ。おめへといふものも。まア情をしらねへものだぜ。はる「おまへといふものもまア義理をしらない人だねへ。

假にも一旦お兄いさんの梅太郎さまと夫婦になつたわたし。菊「なんのそりやア内證事だ。ソレ親父がいゝのをいひやしたらう。いつ盃をとりかはして。その時の仲人はたれが上下を着て居り込でたれが誦ひをうたつてサ。そして何流のうたひで。節の数は幾ゆすりあると。ソレ聞れちやア一言もなしといふ句で。ぐつと承知して兄貴はしれたのろまどの。うぢくめされてつい聲入その跡を某が。宇治川の先陣と。乗かつ氣ぜんさ。子それ佐々木の四郎といふしやれて。米澤町の。も是調へてありそ海。はまむらや丸むきといふその容顏美麗を。どうまア見すて、おかれものか。そして實は親父もおふくろも。おめへをおいらの北の方と。ぐつときめるといふしやれだぜ。はる「嘘をおつきよ。ト口ではいへどいづぞやおやちがものたりを。菊「ナニ嘘をいふものかな。そしてまづ兄貴はもうくあつちのお秋さんに命と惚こんで。今にかはいや。〇〇〇〇〇〇〇〇。はる「お秋さんといふはお美くしいそうだねへ。菊「いやもう美とやはん艶とやいはん。美艶仙女香京橋南てんま町坂もと氏といふ。はる「そうして年はいくつだとかおいひだつけれへ。菊「年はまづおめへの好な讀本で申さうものならば。青春十六宵は過ぎて十九夜月には足らずと見ゆる女のいと清らの衣を穿ちたるさま。嬋娟とうるはしく。惱めるさまは海棠の。雨を帯たらんがごとく。露にそぼてる大液の芙蓉に似たりさ。はる「なにも惱める事はありそうもないものだねへ。菊「つゝむとすれど天に口なし人をもつて言しむで。ついで我を忘れていひ出しやした。實は兄貴に死ぬほどほれて。戀病に煩ひ出して。大病といふものだから。よんどころなくもらつたのさ處が病氣たちまちに癒てもつてからに。この節ではぶち殺しても死にそうもなく。只〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ばかりしぬくといふそうさ。はる「そんな事より。ほんにどうしてこの頃は。久しくお出でなからうねへ。菊「何のモウくひつついて。こそぐつたりさわいだり。ほんにわつちがきのふ親父の迎へにいつて見たが。いやもう氣の毒なやうだ。あつかましいともなるとも。あんなにも中がよくてできるものか。それだから内の事なざアおもひ出さねへはづの事だ。トいつはりをかざるはわが田へひくべき水むけにのつ。菊「コウなびいておくんなせへ。またなま白い兄

貴より。ちつと男らしいわつちのいふことを聞てお見よ。トおむねにすがり。母のおりのは柳之助を。あそばせて居たるが。又菊次郎めがうるさがるさかとおもひてこゝへ入り来り。柳之助をお春にわたせば。菊次郎はその。舞ア、ほころびを縫てもらつて大きによかつた。母、序にその口までぬつてもらへばいゝのに。菊、へんちんげへねへ。ト早々わかれ。爰にお春は菊次郎が物がたりし萩原屋のやうすを聞。つくぐと思ふに。此ごろ梅太郎が一向に來ざるのみか。便りぐらゐはなるべきを。夫さへなきはもしや菊次郎のいひたるごとくならんとおもふより考へ見れば。一徹なる郷兵衛の。とかく菊次郎の妻にせんとするやうす。又菊次郎は朝夕つきまとうるさゝに。いかゞはせんと沈思にくれたるが。とても言かはせし人の。斯まで心に思はざりしに。今さら存命ても樂みもなきわが身なればとてこの夜ひそかに書おきをこまゝとしたりと。わが子の寝顔つくぐ見て。心のうちでいとまごひ。達者て居よと撫さすれば。落る涙の顔にかゝりて。わつとばかりに目覺る我子を。いんのこゝと乳房を含ませ。やうぐに眠らせ。像見の小つかを懐申し。立出ては又たちもどり。これが親子のわかれ路と。身もだへしてぞ泣伏したるが。はや丑の時の拍子木に。斯てははてしなつむし。火にはあらず水沫と。消んと心一決し。そつと忍んで立出つゝ。滑川へぞ走ゆきぬ。

第六回 花のふる里

山鳥の初尾の鏡掛ふれて。影をだに見ぬ人ぞ戀しきと。俊頼朝臣の歌に似て。二世の夫と引分られて。涙に身もうく一人寝は。實にあし曳の山鳥の。そのしだり尾の長き憂世に。又何事か樂とせんや。しかるに菊次郎が爲にかき口説かれ。既に父は薄々は。菊次郎がおはるにせまりて。夜などひそかに通ひゆくを。知りてもしらすまにもてなし。如何にもして和合せ。早くめあはせんと計る様子に。時々母にはなげきたるが。又せんかたもなかく。に。生てこ

の世にあらんより。長き未來に夫を待んと。女、心におもひ定むるも。尤なる事どもなり。嗚呼それ薄命なる阿春が身。憐むべし。かくて其夜滑川へ急ぎ行。岸邊に夕日ごろ念ずる觀世音の名號を數返りかへし。て唱へ奉り。冀くは極樂園にて。亡父母に逢し給へ。又陽間なる伯父伯母はじめ。第一には梅太郎との。無病にて長生し。未來は何とぞ分て待。蓮葉に招きてたべ。又乳子の柳之助。何とぞ息才に成長し。孝行を盡すやう。守らせ給へと幾たびも。くりかしへ。涙と共に念じ終り。逆巻水の正中へ合掌したるその儘にて。ざんぶと踊り飛入たり。惜むべし在斯婦人は。多く得る事かたしとす。爰にまた梅太郎は。それとは夢にもしらす火の盡す玉琴三絃のいと興ある音曲をかはるぐに坐につらねて。氣をなぐさめんと具へたり。されどもこの程殿しく命じて。外へ出る事をゆるされず。尾池小路へは勿論その外へも。當分は文通だもすべからずと。かたくいましめらるゝほどに。こはお春の事聞出して。斯はいひつけ給ふにこそと。推察しつゝ心にをさめ。うつゝとして樂まず。口に美味を食へども。お春が歎きをあんずるより。更に味ひを知ることなく。只うつとりと夜の目さへろく。眠らぬさまなるにぞ。今日は如何して機嫌をなぐさめんと。いろく評定し。秋にも相談するに。聞ば詠歌を好み給ふよしなれば。和歌の書籍をおほく文庫より出して。その道知りたる人をして。なにか咄しもあるなら。少しはうきくし給ふらんか。といふに有あふ男女も手を打て。いかさま琴や三味せん笛も太鼓も。遊藝は手を盡したれども。一ツとして氣に入りたる容子も見えざればとて。是より父にもかくと告るに。それはさいはひなるかな。近ごろ抱へたる侍女に。元來は棍原さまに奥つとめして。和歌をよくし手跡をもよくせしゆゑに。お氣に入りて用ひられしが。仔細あつてお暇出たるが。その親なる者には地代の貸金三十兩ばかりあるを。催促すれども手だてなく。是非なくその女を奉公にかゝへくれよとの事。給金にてなしくづしの濟かたゆゑ。則ちめし抱へたるが。丁度さいはひなり。それくといふほどに。かしこまりて彼女名をば糸萩といひたるを。爰にてはお糸とよびかへて。すがた風俗も美しく座に出て機嫌をとり。

くさくさのむかし物語なんどしたりけり。はそはへより「モシおつな事をおたづね申すやうだがお糸さん。アノ梅といふ字は。うめと書又むめとも書が。どちらがよいのでございませう」とハイあれはうめと書のが古い假名の例で。むと書たは後の事じやと申す事で。和名抄にあやまつてむの字を用ひましたので梅も馬もやはり。ホ、ホ、ホ、ものしり風なおはもじうござり升。まアアの字が本の事でございませうのさ。あきいつぞやの時ほんにわたしがこまつた事があつたのう。とね、ほんに若旦那さまは。どのやうに若御新造さまをおかわいがりあそばしても宜しうござりませ。あのやうにまで。ほんに夫はそうと。その御本はもし何と申すものでござりますへ。いとこれは源氏の湖月抄で。爰ば浮舟でござります。こちらの古今集。またこちらのは千載集。こしもとおたの「モシこれはをかしい名でござりますねへ。いとほんにさやうさ。とね、まくらさうしかへ。ヲヤ、おつなヲホ、。わるい本がござりませねへ。あき、なにをかしい本ではないよ。とね、さやうでござりますか。どれ拜見いたしましたせう。ととりいだし。成ほどをかしい置はありませぬへ。いとそれは清少納言のでございませぬの。こしもとひやくもし。あの清少納言の夜をこめと申すお歌は。どういたした事でござりませうねへ。鳥の空ねと申す事は。空へねる鳥もありますかねへ。いと、なにあれば子。後拾遺和歌集の雑の歌で。詞書の長いうたで。唐の孟嘗君の故事でござりますとさ。秦王にとらはれとなつて。やう／＼に逃出したるとき。函谷關と申す關を夜ふかく越るに。家來の中に鶏のなく眞似をよくする人があつて。それに鶏の聲色をつかはせると。夜が明たと心得て。その聲に催されて。あたりの鶏がみな啼たによつて。關の戸を明て通したといふ事が。その傳は史記の列傳にござります。梅太郎も好の道なれば。耳をそばだてその婦の才を感じてすこしは心をなぐさむるやうにおもひけり。しかるになほその函谷關の故事の物語りをするに至りて。おもへば我もとらはれも。同じ身のうへ。いかゞしてか爰をのがれ出で。ひとたびは是非とも急にお春に逢たきもの。このほどは夢見はわるしな。なほいや憎す物おもひも。かくして等に歌の道の物がたりなん

ど何くれとするに。このお糸はおもひの外學才ありて。至極おもしろかりければ。粗興に入りしとぞ。又おとねは「モシこの大和物がたりといふ本に。女が身を投る事があり升が。づぶりと落入りぬとありますよ。をかしいねへ何もづぶりと書ずとも事だね。いとそれはいく田の川へ身をなげた。ひらはりの女の事でございませう。男二人におもはれて。水鳥を射て中た方へしたがはふと申ければ。一人は頭を射あて一人は尾のかたへ射あてたと申して。それで争ひになりましたので住わびぬわが身なげてん津の國の。いくたの川は名のみなりけりといふ歌をよんで身をなげたと申す事をあれはぜんたい萬葉の九の巻にある。菟名負處女の事を。花山院の大和物がたりにつくりこんだもので。やはり同じ事でございませよ。ひやく／＼にも死すとも事だね。おたの「おまへならどうおしだ。ひやく／＼わたくしならばなんの面倒なことはない。一人は本の亭主にして。一人は男別夫にして置のさ。とね、わたくしなら一日がはりに亭主にしてやるよ。なんのマア死ぬといふ不意氣なしやればつまらないねへ。いと「そうも申されませぬ。こないだなんどは十七八になるやうな美しい姿の女が滑川へ身を投て死にましたそうさ。と梅太郎は。梅「そしてその女はどこの者で」といふれば。處はその時はよく知れましな。と申すが。丁度わたくしが此方へお目見に參つた時の事でございませ。梅「ム、それはまたこの人に聞なすつた。いと「花水橋の邊の人が遠目に見かけて。とめやうとぞんじておつかけて參つたうち。つい飛こんでしまいましたそうさ。そして跡には守り袋を木の枝にかけて。ねずみびらうどの雪踏がならべて脱であつたと申す事でござります。梅「ム、鼠びらうだの。そして守り袋には。いと「どうぞせめてゆかりへしらせてやりたいと手が、りもあるかに。守り袋の中をあけて見ましたれば。さま／＼のお札があつて。その中には。臍の緒の書付に。建久二年辛亥の正月。幾日とかの生れ幼名はむつとか書てありましたそうでございませ。梅「此お春が幼名は。正月に生れたりとして。むつきといふ心よりおむつとつけしよし。その、ちはると名をかへたるよしは。つね／＼物がたりに聞承知してゐる事ゆゑに大きにおどろきものをもいはず。かけ出んとしたるが。さす

がに人目をはゞかりて。しらぬ顔にまぎらかし。やがて夜更たりけるに。みなく退きたれば梅太郎は顔色かわり。しきりに胸のさわがれて。寐るさまにて考へ居たるが。このうちお秋も来り一ツ夜着に入りて寐たるが。梅太郎はいつものごとく。かたくしてわきを向き。眠りしさまにしてお秋が眠いきをうかゞひながら。ねむり付たるさまなるにぞ。そつとぬけ出雨戸をひらき。植込の松より堀をのりこえ。やうやく表へ立出つゝ。裏の圍は木戸を開き裏店の路次つたひ。終にのがれ立出て。一もくさんに雪の下なる。尾池小路へ走り行

第七回 かへり吹

却説 お春は滑川へ身を投たるが。爰にこのわたり大畑村の漁獵師網八といふもの。毎夜此なめり川にあみを投て魚を得渡世としたりけるが。今宵よりの曇り空に。定て獵のあるらんとて。例のことく投網したるが。爰に重きあやしきものを引上たり。何ならんとおもひしが。やう／＼に船に引あげて網をかなりすてよく見れば。是すなはち死人にてありけり折から雲間もる月かげにすかし見れば。まことに美しく美婦にして。年は十七八なるべく。又たぐひなき容顔にしばし見とれて居たりけるが。かゝるうつくしきものをむぎ／＼と押流してやらんよりは。火にあたゝめ水を吐せ薬をあたへなば百に一ツ蘇生こともあるまじきならずとて。そのまゝ船を岸にこぎよせ。まづ死骸をばいだき上て。爰に枯木を取あつめて。火を焼つけいろ／＼工夫して水を吐すればおびたしく吐いだし。まだ入水して間もなきと見えて。乳の下にあたゝかみあれば。是をたよりにこの焼火にてあたゝめつゝ。ねんごろにいたはるほどに。四支冷々たるも。すこしくあたゝかくなり六脉次第に發動して。稍人肌になるほどに耳に口つけ聲かけて呼びたつれば。やうやくにして心つき。既に蘇生したりしかば。網八はよろこぶ事大かたならず。すぐさま脊中に負ふていはりつゝ。わだ家へこそは歸りけり。

○此網八は信切なるか。不實なるか。其善悪また梅太郎雪の下へ往て奈何なる物語かある。都て後編後市の期を候て見給ふべし。なほあはれにおもしろきものがたり多くして。三編にいたりて首尾全うせり

仇 競 今 様 節 初編卷之下 終

仇競今様櫛二編序

或集に哀れとやつげのをくしもみだれ髪さしもけづらぬ戀のやつれを。とハやごとなき卿の讀置せ給ひける。實にや情ある男女の中らひは。いとど心をつくし櫛。曉つらきさし櫛のさして古代にかはらねど。時につれつゝたどうつり行ものは尊き卑き人の風俗とことの葉のみ。上りたる代には。いと似るべくもあらざりける。其を當風につよりなせる。絲井のあるじの筆ずさみを。こよなう愛聞えしに。予に此端書をせよとて。せちにすゝめてゆるさねば。いとみだしかたくて。そのことわりを例のはかなきよみ歌を添てあたふるになん

戀にのみやつれ果にし我身とて
玉のをくしもさすかひそなき

のちのやよひ風月樓のあるじ

高

敷





んらまふしよも
 工舞自せうは
 せきあふ人形なま
 せ、糸丈

歌妓
絲吉



大畠村の
漁人
綱八

第八回 夕の花

春の夜の闇はあやなし梅の花。色をも香をも知る人ぞ。互ひに心かはらじと。かたくちかひし中をさへ。浮世の義理に是非なくも。しばし隔ちし梅太郎。實家へかたく音信を止められ。便りさへもならずして。囚れ人のごとくにて朝夕おはるが身のうへや。柳之助の事わするゝひまなく。斯とどめられて居るなれども。便りのなきをそれとはしらず。さこそうらみているならんと。うつゝとしたのしませず。胸のみいたみて居たるうち。彼お糸が物がたりにて。おはるが滑川へ身をなげし事を聞。おどろき周章まどひしか。それといふてはなほさらに。身をうごかさん方便なしと。しらぬ顔するくるしさを。癪にまぎらし寐たるが。夜の間こそつとぬけ出て。臥着のまゝに歩素足。氣もたましひも身に添はず。宙を飛て走り行。尾池小路にかけつきて。案内もなく内に入れば。家内の混乱大かたならず。母のおりのは柳之助をいだき。目も泣はらしてことばもなく。あたりに一通の書おきあり。梅太郎はとる手もはやく。ひらき見るその文は。書おきの事とありて

さても御ふた方様是までの御かうおん海山つきしなき御事は今さら筆にも詞にもつくしがたくまた梅太郎様御事につきてもさまんの御くらうかけり御事いか斗か心くるしく御座候せめてながくおそばにをり候はゞまんが

もとくしんのうへなからをりは御おとづれもたのしみくらしをり候うちにも御事おほの御中ゆゑか御たよりもなくそれも御うらみとはさらゝぞんじ不申候へどもなにをたのしみに柳之助をそだてよりはんやまゝならぬうき世とは申ながらあまりゝつらましき身のうへにてわたくしよりたよりいたし御きげんを御うかゞひ申上てはかへつて御身のためあしく候はんとしんぼういたしをりよりそのうちのつらさせつなさいふにいはいれぬうらさき御事も御座候まゝとてもながらへをり候てもたのしみもなき身の上なければこれまでのやくそく事とあきらめて身をなげ相果まゐらせ候

ト讀まして梅太郎は。胸いつばいのためなみだ。千筋の糸とおちかゝるを。袖にとめてもせきかぬる。目をおしぬぐひて。やうゝに。よむ次の文體は

たゞ御ふたかたさまへさきだつ不幸はこれもさきの世のむくひにてもつたいなさもせひなきわけにてかくさだまりしいんぐわづくし御ゆるし被下かし又わけて御ねがひ申上り柳之助事どふぞ御世話あそばし御そだて下されわたくしなきあともとむらひくれ候やう御をしへ被下たくふたおやのなき子にていたづらをいたし候はゞ御ばゞ様の御そだてあしきゆゑと人にわらわれぬやう御しかり人なみゝにおいたち草葉のかけより御いのりをりよりまた梅太郎様御事をりもありて此かきおき御らんあそばし被下候はゞいかに御くませもおそれ入とへどもかならず御ゆるし下されべく又おあき様と御中よきを御うらみねたみ候心よりと御しかりもあるべく候らへどもつゆほどもさやうにはぞんじふしもとよりとくしんの御事にておはしまし候ゆゑあしからぬやう御ふくませ被下かしてせめてふびんとおほし出されをりは御まへさまの御くちより一べんの御糸かうもあそばし被下候はゞなによりませし御くどくとまことにありがたくうかみ候御事と夫のみたのみをりよりどふぞお秋様とすゑ御むつましうめでたく御さかへ下されかしおほし出されぬ此身ながらせめて今一たび此世の御なごりに

御かほを見らるゝことのなきを今さらのやうに御残りおほくくちをしくそんじ上りさりながら夫はかへつておもひのたねにも候はんとあきらめりて只くになに事もさだまりし世の中にてさきのよのいんぐわとやらんとおもひきりたりし

はるる

御ふた方様
梅太郎様

斯と見るより梅太郎は。何とことばもなか／＼に。先だつ泪のみこむところへ。琵琶小路より尋ねの人むかひに。來しと告るうち。郷兵衛もたづねわび。かへり來りて聲たかく。悴は内かと呼ぶほどに。こはたまらじと母おやに。何かさゝやき一腰さして。跡をも見ずに走ゆくは。かの滑川の岸にのこるお春が紀念の守り袋。せめてはそのあたりより。海の中までもさぐりもとめ。死骸なりとも今一目。見ずはあらじと半狂亂の。氣をしづめてもしつまらぬ。胸をおさへてかけゆきぬ。かくて人のをしゆるまゝに。身を投たるところへゆき。誰人やらんの拾ひたる守りを得ても今さらに。なみだのたねとなら葉の。廣き海まで尋ねるに見いだすべうもあらざれば。いかにせんと當惑せしがとても尾池小路に歸るともゆふべのしだらひひわけなく。又こゝろもその身にそはざれば。かの家を繼ぎ歡樂に暮さん心なく。共に死ぬべくなげきても。かへらぬ水の泡と消し。おはるが菩提を弔ふにしかじと。意更に一決し。是より跡をくらまして。志所もなしに走去りぬ

第九回 根にかへる花

それ赤繩のかゝるところ。出雲の神のしるしめす事とはいへど。奇にして妙なり。男女おの／＼知らずして結び。

又知らずして解るを以て。思ふに別れおもはぬに奇偶のあやしき。縁にしもあるなりけり。爰に琵琶小路の萩原屋にては。梅太郎が何處へか何て。行方の知れぬにおどろきさわざ。四方へ人をはしらせて。たづねるうちにも指す方は。尾池小路の實家ならんと。彼處へ重立たる手代をつかはし。すぐさま通てもどるべしと。村次はしきりに氣をいらだち。娘が命にかわる戀舞。やう／＼に手に入れたるに。また失ふては大變なり。殊に尾池小路なる。お春が身のうへその外まで。風聞にくわしく知りたれば。夫婦は物怪の幸ひながら。もし了簡も出すまいかと。ひとしく氣をもむさいちうに。在斯事の出來ぬれば。妻のお守津も聲をからして。下僕をしかりのしり。急ぎ見つけて引たて來れど。立さわぐそのうちに。おあきはかなしさとふるにもなく。思へば戀にこがれつゝ死ぬべきばかり慕ひたる。人を夫にはしたれども。心に叶はぬ事やらん。名ばかりの夫婦にて。まことの下紐はとけしなき。仇むすびなる申なれども。さのみ嫌はるゝ容子にもあらねば。譬にいふ女ぎらひとやらんの人にもや。または愚なるわが身ゆゑ。夫のころにかなはぬを。それとはなしに過したまふか。いづれにもあれかゝる事は。女の恥る筋なればと。かたくつゝしみなほさらに。色にも出さてまめ／＼しく。敬ひつかへたるほどに。思ふにましてうち解たまへば夜の間の事はいづれにも。表向の情ふかく。やさしくさるゝを人目といひ。うれしき事におもひたるが。このごろ不圖聞たるは。梅太郎かねてより。お春といふものありて。柳之助といふ子までなしたる申なりと。その仔細は兩親の。ひそかにさゝやきしを立聞して。はじめて是を知りしものなり。此事かねてふたやお秋にはしらせず又こしもそのほかのそげかくめしつこふものにもか梅太郎がはじめよりの仔細などおあきとまくらをならぶるのみまことちぎりせざりしさればお春にこゝろのこりて。實の情をかけたまもゆくすゑおもふむねあるゆゑなりすべし初編をよみ給へばおのづからあきらかなるべしさればお春にこゝろのこりて。實の情をかけたまはぬ。ものなるべしと心つくより。いと悲しくおもひわづらふ。そのをりからに今度の一條。かねて期したる事ながら。かなしさはまた百倍の。なみだ汲出すばかりにて。身も浮くばかりなげきしが。そのうち尋ねに出したる。男子は追々に馳もどり。いづくにも居らずと聞くに。お秋も今は泣くづをれ。せきかねたりし泪の淵。ふかき縁にしと

おもひしも。それかあらぬか浅茅生の。をの、篠原しのびかね聲立なげくを婢女ども。さま／＼になぐさめて。程なく見えさせ給ふべし。かならずおまちあそばせと。いたはるうちに心をさだめ。をあきはなみだおしぬぐひ。あきおめへたちがそのやうに。いふてくれるをおもふから。又かんがへて見れば梅太郎さまが。不圖人にはしらすぬ。大事の御用かなんぞがあつて。どこぞへお出なされても。すぐに夜の間にわかへりの。ならぬ筋からひまどつて。おいてなざるものでもない。これほどにかなしくおもつたのも。みんな知つての通りゆゑ。かならずわらつておくれでない。もうたしがはやまつて。つかなくしくおもつたのも。みんな申そう。ほんに今夜も思ひの外に夜をふかした。さア／＼聞おけたいづれにも御沙汰のあるはづ。機嫌よくおまち申そう。ほんに今夜も思ひの外に夜をふかした。さア／＼みんな寐たがよい。トなにげなきそていにこしめとどまはあ。お秋は今ぞおもひつめ。とてもこの世でそふ事ならぬ。悪縁といふものならんと。心をきはめて硯をとり出し。さら／＼と一通の書おきしたゝめて。自害せんとする躰に。かねてより今宵の容子。心もたなくおもふから。お糸といへる心きゝの。婢女ひとり立うかどひ。かくと見るよりおどり入り。剃刀を取らんとすれば。おあきはやらじ殺してたべと。あらそふこゑに人々おき出。かゝる事とはしらすれば。うろ／＼さわぐ闇まぎれ。見つくる村次おたつとも。すは絆なりと立かゝるに。お秋は今さら剃刀を取られて死ぬにも死なねば。いかにして両親に。顔あはせん面目なく。あたりの人をふりはらひ。かけいだすをそれ押へよと氣をいらてども烏羽玉の。暗にあやめも。しらすれば。やれ燈灯やらうそくと。立さはぐうち切戸をひらき。とらへられじと一生懸命。娑婆と冥土の一すぢ道。歩はだしにてはしりゆく。所は名をおう龜が谷。合戦澤より東なる。極樂の井はすゞしき浄土へ。みちびく佛のゆかりぞと。こゝろのうちにて祈念して。わが身過去の罪障おもく。今この井に身を投て。両親に先だつとも。おもひつめたる悪縁を。なげくあまりに存命ては。いよ／＼罪を増す道理と。かくなかなき世をおもひきり。死ぬるとも三世の佛たち。ゆるしたまふてこの世にのこる。両親はじめ梅太郎どの。お

春どのや柳之助等が。身のうへつゝがなきやうに。守らせたまへと合掌し。身を踊りて飛入らんとす。この折からに雲はれて。圓の月は四方を照らし。あたかも白晝のやうになるに。爰へさわ／＼来る人あり。うたへおもふ男はア谷間のヲ清水コリヤサイ。どこにイすむウやらおとも引せぬ。せけんんだか／＼ツ／＼へんふるいしやれたの。しかしはやり唄も多いが。よしこのといふやつは。古往今來。このくらゐながく續くものもあるめへ。そうよそのくせろくな文句はひとつもねへぜ。ときにおいらは外へまはるから爰てわかれやう。／＼なにか又きて吉へいくのか。なんにしるも引すぎだぜ。オポラン引あれみや八ツの鐘がなるは。／＼なんの八に噛れて死んだものねへの。／＼すんなら又あすいぢめてやらう。／＼へんつらくもねへが受てくだつし。ト立わかれ一人はこゝろあやしき女の立すがた。身れば身を投んとするやうす。まづ何がなしとどめんと。いきなりうしろから。しかととらへて物をもいはず。堤のこなたへ抱き来て。月かげにすかしみれば。花のかんばせうつくしき。そのありさまのたをやかなるにぞ。しばし見とれて居たりしが。おあきはかなしく突のけはねのけ。身を投んとあせるにぞ。しかと押へてうごかさず。菊なんとおめへさんほどこのお方かしらねへが。身を投ようとは不りやうけんだ。こゝろは一ばんおつとめた。朝比奈の切通して。わかい女を一目見たから。友だちをはぐらかして。一人来たのも他生の縁。わつちやアなにもこわいものじやアねへ。追剝や勾引でもなし。しらきてうめんの若い者で。雪の下の尾池小路で。菊次郎といつちやア年こそ若へが。ちつとひねつた若いもの頭だア。わしが見付ちやア殺さねへ。わりいやうにやアしめへから。まアいふ事を聞なせへ。あきエ、そんならおまへは梅太郎さまの弟子の菊次郎さんか。せしが。なほさらに。面目なしと氣をあせるを。金剛力に動かさず。菊ム、そしておめへは。ム、ム、アしれた／＼。そんならいよ／＼殺されぬ。大事な玉のお春ぼうを。殺したあとは見ぬ戀に。あくがれて居たお秋さん。イヤサおかしくななるな知つてやす。兄貴はお春がなめり川へ身を投てくたばつたので。あとから自分もかけ出して。おなじく滑川にどんぶりこと。身を投じたるものがたり。なんぼうおそろしき物語りにて候

だ。いかに泣いてもわめいても。鶯の見つけた子猿同然。びんほうゆるぎもさせはしねへ。あきや、そんならアノ梅太郎さんもおはるさんも。菊くどい。しかもあの柳の向ふの。あれ黒く見ゆる岸のうへから。逆上せたる一心に。ときいてはいつたんおもひきりしも。まだ煩惱のねたみごころに。しんものほむら身をこがし。逆上せたる一心に。炎や息を月かげに。すつくと立し青柳の。髪も心もみだれたる。お秋は必死の力をきはめ。菊次郎をひと息に。堤のうへより突落せば。岸の芝生をころく。滑川の逆まく浪へ。まつさかさまに落ければ。今は邪魔をはらふたり。心地よしとその跡へ。つゞいて浪に飛込んだり。菊次郎は日頃より。水に馴て事ともせず。此方へおよぎつきけるが。やうやくに這ひあがり。裾やたもとをしぼるうち。お秋はやくもあら川の。逆まく浪にうちかへされ。底の水屑となりてけり。嗚呼あはれむべし。一個の貞婦。夫を慕ふの切なるより。操を棄ずして非命に死す。又よく義理を知れりといへども。嫉妬を含むとする時は。賞すべきにはあらざる歟。復説萩原屋にては。梅太郎が行方のしれぬに。夫婦ひとしく氣をもむ最中。またお秋が何地へ往けん尋ねても見えざるに。彼書おきを讀見れば。こまんとした。めたる。その文中に兩親へ。いひわけをくどくも書て、またはづかしき事まで聞とけたまはり。梅太郎どのと添はせ給はりし。有がたさも今おもへば。かねくのやうすといひ。人の噂を考ふるに。おはるどのといふ言號もあり。柳之助とやらさへある中なれば。とてもわたくし添とげ候事にはならず。又は御ともじさまへの義理にて。郷兵衛さま御夫婦の。得心はなされても。さやうのわけにては行すゑの御爲にもあしく又はお春どのの心のうち。おもひやり候へば。はじめにわが身のしたひまゐらせし。心にくらべて不便なり。それゆゑにいづれにも。お春どのとすゑながく。御そひとげなされ候やうにいたしたく。ねがひよりへども。わたくし有てはさやうにもなるまじく。また外の男を持心はなく。おもひさだためりゆゑ。じがい致しと。くはしく書て硯のうへに置きたり。村次もお宇津もこれを見て。なみだにむせびこえをあげ。さてもつきつめし娘心に。かくはおもひ定めけん。さるにても不便なりと。強欲

無悪の村次夫婦も。子にひかざる。愛着の。心は賢愚正不正。その差別はなかりけり。お秋の死をきかぬし心と。お春のこゝろあり又義によりて一命をおしまざる。男子のよからたがひあり。兩女かたみにおのれをばて。ひとしく縁夫をゆづらんとす。いづれも貞。それよります。お秋のゆくゑを。艸をわけてたづねるうち。その夜菊次郎ははしり來りて。村次に逢ふて申けるは。借わたくし事。今晚龜が谷邊へまゐり候歸りに。合戦澤のあたりを通りたる。お娘子お秋どの。ずでになめり川へ身をなげられ。浮つしづみつながら。ゆゑ。引きあげんとぞんじてつゞいて飛込みたるが。早瀬の川におし流され。かくのごとくの爲躰に。濡れて身内が一しぼり。残念ながら死骸を上ず。やうく命を助かりたり。はやく人をはしらせて。亡骸を上たまへ。注進をしてければ。すはや事こそあわてふためき。あまたの人を急がし立て。なめり川へはしらすに。海に入る處にして。やうくお秋の亡骸を。引上てかへりたり。夫婦のなげきいふべくもあらず。あまりの事に入にかたらひ亡骸の右の掌中に。鎌倉琵琶小路。萩原屋村次女あき。十八才と記したり。是は人のいふ事にて。斯すれば魂魄の。再人の胎にやどり。生るゝ兒の手の掌に。其文字明らかにて。其墓の土をもて洗はざれば。消る事なしといふ。是もせめてもの心やりと。やがて厚く葬送し。ねんごころに申ひけり

仇競今様櫛二編卷之中

第十回

復説お春は先に滑川へ入水せしが。はからずも大島村なる漁者網八が網にて引上られ。ふたゞび陽間へ歸り來つ。やがて人心地つきたる時。さまぐにいたはるほどに。頼にもとの身となりけるがとかく。存命んころなれば。透を見て自害せんとし。または外面へかけ出して。死んとする事たび／＼なるに。網八は妻もなく。老母ひとりも年久しき。病臥の床になやみ居るにぞ。お春が護身の手がはりなく。ひとりの幼子十松は。今年やう／＼八才なれば。わやくいふのみ助けにならず。ほと／＼もてあましけるが。やう／＼にして助けしものを。又殺さんは本意なしと。この頃にては獵にも出ず。家に在てさまぐに。教訓したりすかしたり。死をとめんと氣をもむにお春も信實をうれしくおもひ。母の病氣の薬の世話。何くれと立まわり。ねんごろに仕へたり。ある時網八はおはるにむかひ。網八なんとおまへさんは。どう聞いても名さへもいはずこの何人の娘とも。なんともおいひなさねへからお宿への。知らせる事もならぬわけだが。それといふも死ふ死なふと。たゞながらへるのがいやの容子。はて悪い合點といふもの。四角な文字はしらねへか死は一旦にして安しとやら。たま／＼生れて出た世界を。捨て死なふとは不量見だ。しかしそれには深いわけが。定めてあつての事でもあらうが。最早川へ身を投たので。その事は済んだといふもの。唐の晋の豫讓とやらは。豊家の衣きり裂て。これで帳面を消した例もある。まづ蘇生は一旦死んでたましひが。再人の胎にやどつて。ふたゞびこの世へうまれて來たとおもひなすつたならば。どうか生ても居られそうなもの。町處や親たちの名を。あかすがいやならそれは左も右も。まづ死ぬ事はどうぞおもひとままつてくだされ袖ふりあふも他生の縁

とやらいふに。ふしぎに命を助けたのは。これも過去からの因縁づく。わしも外に兄弟もなく。ひとりの母はあの通のり重病。その介抱も手ひとつで困窮のいとなみゆゑ。看病ばかりして居ては。薬の代はいふにおよばず。飯米代さへその日／＼に。やう／＼買ふて過す世わたり。ならう事なら母の病氣が。本復するまで其命をどうぞわたしにあづけてくだされ。そして薬や何くれと。おまへが世話をしてくだされば。わしもころおきなく獵に出て。つらい世帯もくらすうち。老母が本復もするならば。まことにおまへは母のために。命の親とも観音さまとも。これ手を合せておがみます。どうぞ聞わけてくだされ。ア、ひとつの命を澤山さうに。死ぬの捨るのといふ人もあるに。わしは母の命がたすけたさ。寒中でも毎朝水をあびて。全快を祈ります困窮な世帯に重病の母の世話を。たのむといふはいひにくい。まづ見たところが相應な人の娘御。こんな暮しは聞いた事もあるまいが。旅は道づれ世はなさけとやら。どうぞわしがねがひをば。聞わけてくだされ。ト手元あはせて。さまぐにたのみたる。詞に親へ孝行と。正しきころはしられたり。おはるはだん／＼網八が。ことを分て死をとめ。また頼まるゝ母の世話も。今更いやともことはりかたくはるだん／＼のおことば。わたくしの身にとつては。ありがたいともかたじけなないと。申さうやうもないお情。いかにもよう聞わけました。まことにあなたは命の親。このうへもない大おんを。わきまへぬ是までのふつどか。どうぞ堪忍してくださります。これからは母御さまを。わたしが實の親とおもひ。御かいほういたしませう。網八聞わけてくださるかヤレ／＼うれしう有がたい。どうぞその詞の通り。死ぬ事は是からは。はるアイつゆほどもおもひ出しませぬから。かならず何かとお案じなく。家業を精出してくださります。トしんせつにいふ。ほどにあらはかぎりなくよろこび母にもこの事をものごと。その日より漁に出て。精出し魚を得て賣り。くすりをとめ米を買ひ。母の病氣をねんごろに。いたはりなくさめたりけるは。いと信切なる孝子なり。おはるは今さらふり捨て。死んも人の孝心と。情を無にするやうなれども。生ながらふべき身ならねば。とても罪の重きこの身。恩も義理も知らざるものと。うらまるゝとも死

かねて。爰に舍藏れ居るなど。もしもや人に見らるる事。ありてうわさをされんよりは。死ぬにしかじとおもひしが。また考へ見るに網入が。たのみたる病ふの母。見捨て死なばかの人。困窮なるこの暮しに。なか／＼看病なりかねて。薬の代もなき時は。老母もつひに助からじ。いかゞはせんと躊躇て。さま／＼ころを勞したるが。つひに心一決し。所詮生ては居られねば。片時もはやく冥途にて。なき父母や伯母など。ひごろ戀しき人たちに。あふをたのしみにおもひきり。此家を忍び出。ふたゝび死んぞ恥を知る。ころならんと我に問ひ。我に答へてなみだをばらひ。老母が病ひの枕上にいたり。はるモシすこしはおころよいやうでござりますか。お薬も煎しました。サアさめぬうちめしあがりまし。ほんにお口なほしの水飴が。もうみなになりました。網入さんが氣がついて。どうぞ買つておくれならよいが。マアあとでお砂糖湯でもしてあげませう。母、ほんに何かとおまへさまの。お世話話にばかりなります。殊によく物事に。ころをつけてくださるは。まことの子ども兄弟でも。およぶものではござりませぬ。ありがたうぞんじます。これも前の世のやくそく事か。また観音さまのお引あはせか。見もしりもせぬこの老婆を。そのマアしんせつな御介抱。死んでもわすれはいたしませぬ。はる、これはまた勿躰ないおことは。網入さんは命の親。その親御のあなたの事。どのやうにいたしてあげたいと。おもふばかりにたらはぬわたくし。もの事お氣には入りますまいが。そのやうにおつしやつてくださるほど。もつたいたくなくともなせぬ。どのやうにも御看病いたしませうから。どうぞ精出してお薬をあげり。はやく御全快なされてくださりまし。ほんに人は老少不定年よつたあなたがへつてお達者におなりなされ。わかいわたくしがけふの日にも。もし死ぬまいものでもござりませぬ。その時はだん／＼の御恩をわすれて。御病氣のあなたを見すて。さきへ死ぬ恩しらすと。おしかりは御もつともながら。母、これ／＼何をおつしやる又しても。死ぬのなんのといふやうな。その事を悴さへ。かねてあんじてだん／＼の異見。はる、イヤ／＼なんの死ぬころはござりませぬが。もしもの事のあつた時は。母、ハテそれはいふには及ばぬ事

はる、ほんにわるい事を申ました。かんにんなされてくださりましといひくろめてもとこやうが。死んと覺悟したる身の。やうすを老母にさとられじと。はる、ドレお夜食の支度を。トたすきかけつゝ立いづれば。十松はたちかへり。手にもちし袋をそつとおはるにわたし。奥をうかゞひ聲ひくゝ。十松、おばさん只今かへりました。けふは通りの人が多く。七里が濱を三度やとはれ。一度は腰越から龍口まで。荷を持ってお供をしたら。錢をこれほどもらひました。お婆さまへ水飴を買つて上て。はる、はるとつて。はる、ヲ、よく貰つてお出だ。ほんにかはいや外の子は。八才九才ではくわんぜんもな。水なぶりや竹馬にのり。たわいもなくあそぶのに。網入どのがいひつけて。由井が濱のあたりへ出。たび人の荷をになひ。五文十文のおあしをもらひ。婆々さまの病氣をあんじるゆゑ。遠いところまでやとはれて。たんとお錢をもらつたとて。飴をあげてくだされといふ。そのおとなしさをみるにつけ。見捨て死ぬは。十松、おばさんやおまへはまたちい／＼がいたい。死んではいやだ。はる、なんの死なふぞコレ／＼もうそんな事はかならずいふておくれでない。なぜか名ごりがをしまれて。どうも他人のやうにはおもはぬ。この子を見るにつけても。おもひ出す柳之助が事。ア、かへつてなみだのたね。サア／＼おまへはよく錢をもらつてお出だ。ちつとそこらへ行って遊んでおいておとなしいのふ。十松、アイ遊んで来ずともいゝから。おばさんや。いつまでもかはいがつておくれよ。そしていつまでも爰においでよ。はる、いつまでもあるからサアお隣りへでもちつと遊びにいつてお出。十松、おばさんや肩が痛い。はる、ヲ、ほんに氣がつかなんだ。もつとも／＼。ほんにまア子供の身で。重い荷を持かして。この肩の腫た事。ヲ、かわいや／＼。サア／＼さすつてやりませう。母、コレわしはどこへいかぬがおまへはいつまでもおとなしく。おば／＼さまを大切に。おと／＼さんのいふことをなんでもよくお聞よ。サア、アイぼうはなんでもおと／＼さんのおつしやる事を。いやとはいはぬよ。人の荷を持って錢をもらふ事も。ばどさまはいふなとおつしやるから。たゞ遊びにくとばかりいつておくれよ。はる、ヲ、おとなしい／＼。サア又ばんにもんであげやう。母、おとなしく。そんならおばさ

んあそんで来るよとをいひおくり ころへかねたるため泪なみだ。わつとばかりになきだし。別れにいたりて猶なほさらに。おもひを増ましてぞ見えたるが。期まじであるべきならずとて。後の世のよたのむ佛ほとけの誓ちかひ。せめては心ばかりの香茶湯かうぢやう。佛ほとけだんに燈あかり明あきかゞげ。念佛ねんぶつとなへてつくく位牌ゐらいを見るに粘ねりはなれて。落おちかゝりたるその下に。秋月明貞信女しゅうげつめいしん。建久三年七月十日と書付かきつけたるは。まがふかたなき亡母なまはの戒名かいみょう。こはそもいかなる因縁いんえんありて。こゝにあるらといふかしく。心こころならねば問とふて見んと。また病者びやうしやの枕まくらもとにいたり。はるもしちとお聞申きこす事ことがござりますよ。あの佛ほとけだんに秋月明貞しゅうげつめいしんさまと申まを。御戒名ごかいみょうが見えますが。あれはどなたでござります。母はははて惟ただしからぬ事を問とはつしやる。その事ことについてわしもかねてから。おまへの素姓すじやうが聞きたかつた。あの戒名かいみょうの佛ほとけさまに。どうやら似た面おもてざしのおまへ。といふても又またかくすは必かなら定ず。まづわしが素性すじやうから。いひませうとおもきまくらをもたげつ。お春はるが顔かほをうちまもり。泪なみだながら物語ものがたりる。

第十一回

老母らうぼはやがて起たちなほり。母ははわしが素生すじやうといふは。原もと権ごん原げん様に仕つかへた。小夜戸孫せやとこ一いちといふ劍術けんじゆつの御師範ごしはんせし人ひとこそ。わしが夫つと。その人は子細こさいあつて浪人らうじんし。玉造たまづくりといふところに通とほれすみ。浪人らうじんを立たくらせしが。追おへんに貯財ちゆさいをもつかひすて。のちには困窮こんきやうしてその日ひを。過すしかねてもかねてのお氣性きせう。二君にきんには仕つかへぬとて。かたくふたゝび主しゆどりせず。またわしが姉あねさまは比企ひきが谷やの町人ちやうじん。金澤屋瀬兵衛かねさわやせへいゑといふ人のところへかたづいて。其處そこは相應さういのくらしなれども。浪人らうじんしてからは言信おんしんさへせず。おひく貧うしくらすうち。夫孫つとこ一いちの長病ちやうびやうをわづらふて冥鬼みやうきとなられしが。そのとき十才じゆさいの一人の悴せがれは今の網入あみいれ。そのうちなほさらくらしかねて。そこはかとなくさまよひしも。おちぶれてより身を恥はづれて。縁者えんしやへおとづれせざりしか。先の年人目としのひとめをしるびて。寺てらまゐりしたる時とき。そつと寫かして置おきたる戒名かいみょう。

名な。あれこそわらはが姉あねさまなりと。かたるを聞きてうちおどろき。母ははを姉あねとおほするは。すなはちわがおさなき時とき。いだかれたりし事ことなど。覺おぼえある伯母おばさまなり。いつぞや世よを去いりたまひしと。人のいひしをそのまゝに。この世よには座ざさじと。おもひゐたりし事ことなるを。ふたゝびめぐり會あひし事こと。天てんにも地ちにも二人ふたりとなき。伯母おばさま喃ななつかしやと。いはんとせしが詞ことばをひかへ。はるさやうでござりますか。わたくしもどうやら。聞きたやうな御戒名ごかいみょうのやうにぞんじましたゆゑ。ふとおきと申ましましたがそのおはなしては違ちがひますゆゑかしどうやらあなたがおなつかしいやうにぞんじてをりました伯母おばさまのやうな心こころがいたして。母ははム、なるほど。別べつにおまへの素性すじやうは問とふにおよはぬ。それではなけれどまアなぜか。わしが姪めいのおむつこころにてつけたりそのうちおはるとあらためしなりのやうにおもはれて。しかしこの事は悴せがれへはまづ沙汰さたなしにしておかつしやれこゝろにてつけたりそのうちおはるとあらためしなり。お春はるものみこみそれと口くちにはいはずれども戀こしたいたる伯母おばにあひうれしさいふべきならずして。今いままたおもへば現在の伯母おば重おもき病びやうひにわづらふを見捨みすて、死しぬ事ことならざればまたもやおもひとどまりしも。伯母おばの全快ぜんがいし給たまふか又は世よを去いりたふとも二ツにひとつ行ゆすゑを見とゞけしうへ死しぬべしと心をさだめて猶なほさらにまめしく仕つかへたりこの老母おはるがふるまひを見て姪のおむつとさとりし是幽冥なる亡母の魂魄爰に誘引して。ひき合せたるものなるべく。お春が死しをおもひとどまりし。事の謂いれかくのごとし。扱あそれより網入あみも。しきりに精出せいだしかせぎけるが。考母かうぼのやまひ漸々しんしんに重おもり。今は九死きゅうし一生いっしやうなるに。もとより孝行かうかうなる網入あみは。さらにかたはらを離はなれずして。看病かんびやうをするほどに一時醫師いちいしのいふやうは。この沈痾しんかなみくくの薬くすりにては全快ぜんがいはなすべからず。されど價あたいさへあるならば。助たすけ事こともなるべきが。その困窮こんきやうのくらしにて。なか／＼詮せんすべあるべからずと。聞きて網入あみおはるもともに力ちからにおよばぬ金の事こと。さらに工風くふうのなきのみか。看病かんびやうにて家業かげふをさへ休やすめば。日毎ひごとの入用いりようさへ足たりずして。今はほそき煙けむりさへたつべきやうのあらざるに十松じゆまつが目めごと道みちのべに出て。旅人たびびとの荷にをになひ。案内あんないなどしてやう／＼に十錢じゆせんや十五錢じゆごせんの。孔方くわうほうを得とるのみちからとして。網入あみおはるは朝夕あさゆふの。食事じきじさへせぬ日もありてこのうへ

もなき逼迫となれば。くすりの價の尊きをといはれては飛たつほどもとめて病氣を治したけれども。是非もなき事なりと。かたみに物がたりしたりしがお春は不圖こゝろづき。今奥州街道なる。川崎といふところは遊君歌妓などの數多ありて。繁花の地なりと聞およぶ。わが身はかねて死ぬべき身の。ありてなきもおなじければ。身を賣てその金をもて。藥の代としてたまはらば。幸ひ事なるべし。されどもこの世にあるからは。夫に見えもろともに。臥床をひとしくせん事は。いつそに死なんとせしほどなれば。傾城のつとめはゆるしたまへ。をさなき時より琴三味線の。稽古をもせしなれば歌妓に賣りて給へといふ。網八は聞て頭をうちふり。いやそれはおもひもよらず。人を助けてその人を。勤の里へ賣るときは。わが身の田へひく泥水と。譬にいふうき勤めの。その金をもて藥をとゝのへ。よしや母に與ふるとも。などて本服あるべきぞ。かならずたはむれにも然る事をば。いひも出し給ふなど。更に用ゆる躰なきを。このときおもひ當りしは。先に伯母なり姪なりと。素生の事の知られし時。現在の從弟なる。網八にはその事を。かならずいふなとどめたるは。かゝる事のありし時。他人なりとおもふゆゑ。ものがたき網八の。かたく辭して身を賣らんと。相談をばさせざるためなりと。心づくより網八にむかひ。おん身の母御がわらはの素生を。かねていふなどおほせしかど。この願ひを聞きとゞけて。給はりたきゆ申なりと。さきに一旦死なんとして。佛壇に燈明をかゞげ。粘のはなれて落かゞりし。位牌を見しより身のうへの事。かやうの手のつきにて。はじめ知りしと物語れば。網八かぎりなくうちおどろき。さてはおん身と某は。從弟同志にてありけるが。こはおもひよらざりしと。よろこぶ事大かたならず。されども身を賣らん事は。決して得心せざりしを。おはるはだんく譯立て。伯母の命にかはらんは。願はしき事なりと。達てたのみて用ひられずは。死なんといはんばかりなれば。今は強てとゞめかね。まづこゝろ得たる人にかたらふに。云々してよしと教ゆるまゝに。琵琶の窪なる何某といへる口入の人いたのみ。川崎の里なる歌妓屋へ。金五十兩に賣たりける今に東海道なる川崎なりとわし奥州へゆきととなへざりしかくおはるは歌妓となりて。

うつくしく粧ふほどに。天性の美人なれば。人も目をおどろかすばかりにて。藝は何事も達したるものにて。美聲を發して唄ふときは。世界の男のたましひをうしなはしめ。琴三絃胡弓の類ひ。一回その音を發すれば。いかなる人も是がために。意も身に添ふ事あたはず。實に天女の影降なせるかと。疑ふばかりの光景に。抱へたる人は不測して。大利を得たるひやうばんもの。晝夜に客のひまなくて。流行藝者となりてけり。今はその名を糸吉とあらため。いよ勤めおこたらず。客より得たる黄物をもて。時々網八がもとへさまぐの品とゝのへ。又は金銀にて送りければ。伯母の病氣もおもふまゝに療治して。追々に全快したりしかば。かぎりなくよろこびて。伯母もおはるの糸吉に逢に來りなどして。今はこゝろに障りもあらず。これによりておはるはまた。おもひおく事あらざるより。死鬼の身につきて。死なんとおもふ心ぞ出來たり。未如何なる筋に至る。下の巻を見て知り給ふべし

イ女「マアおひとつめしあがりましなヲヤ是はひえました。お燭をちよつと直しませう。かち「イヤ、事のわからんうち酒ものまん、女「ヲヤどういたしませうねへかうは有たかないものだよ。かち「なんぢやなおつなところへ有たかないぢやの。もう、糸吉さんがうかれぬさかい酒もいやじや、糸「ヲホ、きつい事てありますよ。わたくしはうかれきつて居りますはな。あんまりうかれて氣のぼせがいたしてなんだかも鬱陶しいやうで、女「ほんにこのすだれを巻ませうねへ、トすだれをまけば糸 糸「香爐峯の雪てはなくて。花のさかりがひとしほであります。かち「イヨウエラうつくしいはへ。ヤモ木に咲花よりこの又生た花めが。どうもたまらん、一、枝手折らにやこゝろがとんと落つかぬじやコレつれない無情の君。こちふく風にもなびかんせ。アノこゝな男子殺しめが、トしなだれか 糸「アレサおふざけなさいますな。わたくしやアいやらしい事は。きついきらひでございませうから、女「もし糸吉さん。ちよつと向ふを御らうじまし。それ田圃の先を。あれ、まことにうつくしいじやアござりませんか、糸「ほんにねへ。あれは筏帯屋の花見だよ。アレあのうつくしい女郎衆をお見。先のが梅の枝さん。その次が四季花さんだよ。女「ほんにけふは筏帯の花見でございますね。かち「四海樓はずいぶん負ぢや。わしや好ぢやがな。女「もしへあの逢待さんは美しくうございませうねへ。かち「エ、あの女子はうつくしうても情がないはへ。女「ヲヤ、あのくらの情のある意氣な面白いおいらんはございませんと。かち「江戸ツ子にはそうかしらんが、糸「上がたのおかならば。なほ情がありますとさ。女「糸さん菅浦さんがいゝのを言なさいましたがお聞なすつたか、糸「いゝエなんとへ。女「アノわつちやアお店ものは好ぎますが、人形が衣服はお店者らしくはいたしせんとおつしやるから。なぞでございませと申たらば。朝はやくなくなるだらうとおもふと惜うござますとさ。かち「なんのことだ。それより松坂編か伊勢じまても。不意氣に短かく仕方で。菅縫に入柏なんどが、糸「ヲヤ伊勢編に菅縫かへ。かち「こりやあやまつた。ほんに店ものとかけて借た質種ぢや。そのこゝろは。流す事ながららんはどうぢや、糸「ちよつととしてもお口がわるいよ。かち「またあやまつた。女「糸吉さん。今日は取わけ花見の見物

がたいそうでにぎやかな事ぢやアございませんか、糸「そうさねへ。もしへ爰に斗り朝から御酒をあがつて入らつしやいます。ちよつとは蓮香山へでもお出かけなさいませんか。かち「おまへのお氣のむくやうに。どこへなと往うわいな。女「ほんにそれはよろしうござりませう。先刻から徳平があちらの座しきで。お聲を聞いて花見のお供を、ねがひたいと申ました。かち「みんな連れて来さんせ、ト男けいしや わや、とちつて花見に出かける。趣向のところへ。また向ふに一群見ゆるゆゑ、糸「アレ、花岡さんの新造衆が。あなたを呼んでをりますよ。かち「エ、ありや喧嘩でとふに譯付てしまふた物を、作者曰。すべて是等の名はわかし川さきおんどのはやりしころのさ 糸「あんまりそうでもございませまい。かち「糸さんの甚介にはこまるぞへ、糸「おまはんの。ヲヤ。何とにもこまりますねへ。徳「エモシ且那へ。この藝者をいぢめるには。あれあの木が妙でござへませう。かち「木が妙だ。だれぞの口癖のやうに木妙か。徳「イエサ此梅の木を見ると。忽然としてふさぎますから。いぢめるには最上さし、かたてより 梅太郎の事あけくれに、忘るゝひまのなきものから。梅を見るもおもひのたねと。梅の花は繪がきしさへも。手にとる事なかりしかば。人はふかき譯をも知らて。梅を見ればふさぐゆゑ。みな是を知りてをり、は。おもしろしとて期なぶるなり、半通 モシ梅がきらひとは。おつにひねつた病氣じやアござへませんか。いづれすいな者をばいやがるから夫で。かち「この源五兵衛をきらふのかツ、半「いやア江戸役者の聲色。きつい事、かち「湯又ははだしてあらうが、徳「わたくしなどは梅が好でそれゆゑ齒がこのやうにかけました。かち「いづれ色事の筋から。天神さまへ願かけて。一生梅をたつたぞへか、糸「そんな事より。松づくでもおうたひなさいまし。かち「松はおきらひではないかな。徳「松の下に〇〇〇〇〇〇〇〇あれは。なほ好物でございませと。アイタ、。ぶてばなほいふ、半「それ又梅がある。これさわきをむかずと。こちらをお見。イヤア奇妙ませんかへ。なんだらうねへ氣障アな。徳「おこるべからず、此藝者衆は梅を見るとおこるとおもへば聲はしたな

く罵りて。浦里さんく。かち「大きな聲だのう。それはそうと。いつその事向島として。梅屋しきか梅若などはど
うじやあらう。又どこその天神さまか徳なんの夫よりアノ山を左りへ細い道を登ると。梅ばかりおほくて櫻はとんと
少なうでございます。かち「そりやおもしろい。今は花は散てしまふたが。梅の葉を見るもよからう。半「これはまた物
好子。糸吉さんほもし爰からかへしてくださいましと。ハ、ハ、ハ、糸なぜまたそんなにあまのじやくを。かち「なんて
もきらひなもので責るが一手。さみしくとも左りの山から。どこまでも梅見がよからう。トイヤがる糸吉。おもふ懸路を
かなへんには。けめるに如じとうち連て。人も通はぬ山道の。樵夫のあとを尋ねつ。行けばゆくほど道の左右に梅
の百株枝をかはし。生茂りたる梅岡山。爰ぞ名におふ梅が谷。山深くして人家なければ。何となく詫しきに。未里な
れぬ鶯の春知り顔に聲たて。人來と告るもしほらしく。糸吉がこゝろをしらねば。只口説おとさんには。きらふ
を幸ひ。半「ヲツトみなまでのたまふべからず。此方も大きに腹がきたつたので。さつきから麓に目もはなさず。見て
居るうちに。あれく箱持の八六と。坊主持ではあるめへ。人持でもねへ。なんだか岩持か何かしてうんくうなり
ながら来るは。奇妙く。なんと爰で飲むとは一興だのふ。徳「ナニニ興か三興くらみだらう。トむだをいふうち。かち「サア
く酒ぢやく。なんと糸吉。其様に玉昭君が胡地に嫁したやうな顔つきを。ちつとおきにさんせ。ハ、ハ、ハ、うま
いくサアくさすぞく。半「櫻のじぶんに世界をかへて。梅見とは稀代く。去年の枝折の道かへて。まだ見ぬ梅と
は有がたい。かち「梅花雪を帯びて和尚の頭上に飛だおもしろい。サアのみ給へく。トしきりにすめて。かはりし世界
のおもしろく。みなくさいつおさいつして唄ひつ舞ひつ大さわぎも。はるかに人家を隔ちたれば見る人きく人あら
ざるも。また一事の興なりと。とかくにふさく糸吉に。無理むたいに酒を強て。半「サアくおか梅責にと。しきりに
深く分入りぬ。

第十三回 散 残 花

和風細柳を舞し。澹月梅花に隠るとは。山谷東坡を難ぜし詩。酒肆に美人と眠ると見しは。羅浮が夢にて梅樹の
精なり。梅が香を山ふところに吹きためて。入こむ人にしめよ春風と。西行法師の歌のごとく。道のゆくてにいと
ほき。花の兄なる此花は。今ぞ春とて鶯の宿とし定め來ぬるより。山中曆日なけれども。是を見て時を知る。實に
愛すべき花なりけり。半「なんと美事な梅ではござりませぬか。糸吉さんの柳腰に。この梅が咲いたらば。どんなに美く
しうござりませう。徳「梅のみほむるはにくし其口を。縫ふてやりたや青柳の糸。といふ狂哥がありやしたせ感吟だね
半「青柳の糸吉と。字餘りにしておくがよからう。かち「筋万の糸吉でもよからう。半「きついで。徳「ほんにそれでお
もひ出した。割子提重のたぐひはどうしのさねく。なんのいやがる物かへ。よしこのでもやらかそう。どれくそ
の三絃をこちらへ。徳「氣のつゑひく氣があるか。半「もちろんないこたア申ませんツ。かち「糸吉サアくこの梅の花
をさかづきに入れてのみ給へ。糸「のみますのさ。半「梅さんといふ情夫が。かち「もちろんあるこたア申ませんだらう。
なんと糸吉。あまりむごいぞへく。いかにいやなわたしぢやとて。さうふりつけたものじやないわへ。けふは是非
ともこの梅の。色よい返事をきかねばならぬ。糸「ずいぶんなんとかお返事を。半「しなざるなら善はいそげだはやくう
んと今爰で。糸「エ、なんだねせはしない。そう急にお返事ができるものか子。どうもわたしやアさつきから。病がお
こつてならないから。けふはもう堪忍して。物をおつしやらんでくださいまし。かち「いやもうかねてからいさせてお
きや。わが儘な唐人めぢやな。どうしてこまそふ。ゑらひどいめにあはしてくれうか。糸「とてもよいお返事はできな
い譯がありますから。いつその事ひとおもひに。殺してなりとしてください。かち「ヤこいつがくいけしぶとい。そ
んなら斯してこますぞ。トたちかゝるを。人よりとひさまく。にすかしなくさめて。また盃をあらたむればこの頃の飲つとけに勞れ

て酔ひのいやます嘉千兵衛。いと長閑なる四方の氣色。春風の手で吹れては。たまらずうかく眠るほどに。糸吉は心のうちに。わが身過去をあしくして。死ぬべき時に生ながらへ。はからず伯母に逢しより。またも死なれぬ義理となり。いつたんいやしいこの勤めも。こゝろにおもはぬ時宜ゆへに。泣いても足らぬかなしさを。笑ふてくらす胸のせつなさ。これもこの世に在てなき。わが身の上の事なれば。心には墨染の衣着て冥途とやらんに居る氣なれど。さすがに陽界のかなしさは。西上人の歌のごとく。世を捨て身はなきものとおもへども。雪のふる日は寒くこそあれ。なきものとせしわが身にもまた煩惱は身にそひて。わすれかねたる梅太郎さま山田の僧都にあらなくて。あら果られし此身ながら。おもへばさぞ今ごろはお秋さまともろとも。中よくくらししてけふこの頃の。よい天氣には花見など。さだめておもしろいたのしみを。して居たまはんうらやましま。また柳之助は生の母の。このわしに捨られて。さぞ恨んでゐるならんと。過こしかたの戀しさと。かなしさにいとどなほ。胸くるしくて持病の積の。さしこむをば夫となく。そつとはづして谷のあなたへ醉をさます體にもてなし。人の見えぬ山かげにて樂など取出し。不圖木影の谷間を見れば。一字の茅屋ありて。ちひさき柴の折戸あり。内には梅の木あまた植て。さながら奇麗の住居のさま。額に百梅亭の三字を書り。糸吉はこれを見て。何人やらんこの山奥に人の家あるべきとも思はぬを。かゝる風流の住居するはいと奥ゆかしと見やる時。丸窓の障子をひらきて。手水石の水を筒に入れ。挿はしきみの花なき花。机の上には香もろとも。手向る體をよく見れば。豈はからんやかの人は。月ごろ日ごろわすられぬ。梅太郎にてありければこはいかにとばかりに。あきるゝばかり物いはず。彼方も人のけはひして。來しや誰やと夕ぐれの。外面に立しは別人ならず。妻のお春にてありければ。こは思ひもよらず先づ頃滑川へ入水したれば。今こゝにあるべきならぬをはたして幽霊の尋ね來て。我にうらみをいはんとするか。頓證菩提と爪繰る珠數に。此方も不審晴やらずもしくは日ごろ戀したふ心を狐狸なんどのやくざとりてたぶらかさんと。かゝるさまは見するにもや。よし妖怪にもせよわが夫の。

御姿こそなつかしと。飛たつばかりのうれしさに。案内もせず折戸口。明つゝ内へかけ入りけり。
 ○此のちいかなる物語りにかいたる。第三編の發市を待て。首尾全きを知り給ふべし。

仇競今様櫛二編自序

先にこの今やう櫛の初編を作りものして。文永堂に與へたるに。思ふにまして蒙愛しは。偶中の僥倖にて。闇の鳴銃盲人の躑。速成草稿の二篇目も。全しく評判よいとやまうす。春のはじめに平木履の音。からころも橘洲が。酒も過ぎばあたり升飲と詠せし歌をおもひ出で。過たるはなほ及ばざると。あたるほどなほ勝に乘らぬ。書肆があつらへ三編で。三冊づゝがちやうどまた婚姻の規式まで。かくも三々くどからぬ。約編著も筆のあや。長い趣向をも短文に百萬年の御壽命と巳の孟春の恵方にむかつて。ぐつと端折て試毫ふものは

二代目の

十返舎一九

仇競今様櫛第三編卷之上

第十四回 花むしろ

東風吹ば匂ひをこせよ梅の花。主なしとて春を忘れそ。とは菅家筑紫に坐して。詠じ給ひしおん歌より飛梅といふ故事を。思ひ合する於春が再會その身は不測に生存命。死なれぬ義理になりしより。伯母の持病を救ふべき。薬の代に身を售て。川崎の里の歌妓となり。糸吉と呼ばれては。引手彫の名高きも。原來美麗き生得にて。殊更藝に達する餘り。伶俐なる性なれば。川崎音頭といふ唄を。自ら作り出して節附し。唄ひそめしを世に傳へて藤吉節といへるなり。もと糸吉ぶしと呼びけるを後けふ今鳥は都方の大賈客。攝津國屋嘉千兵衛に誘引れて。花見にとて出たるが。測らず梅丘山へ引連れられ薬を用ひん湯を得んと谷影なる茅屋を見つけ。百梅亭てふ額を目當に何心なく立入れば。豈圖らんや日來より。戀ひ慕ひける梅太郎が。此處に隠るゝ佗住居。柴の戸さしの閑居の身春知顔に金衣鳥の。寛の水の氷解とて。告る外には訪ふ人も山嵐のみ聞く邊山土に。一個の僕と子僧を相手に。梅花數株を庭に移し。見れども意裡は樂まず。開たる儘の活樹を手向に。阿迦汲かへては掌を合せ。俗名お春頓生菩提。脱苦與樂南无佛と。念ずる外は業もなく。桑門の境界にて。行ひすまし居たりしが。二編の末にあり。お春が來たるを見るよりも。梅ヤアお春かトびつくりしなれたも。おはる梅太郎さんトばかりにてゆめか。あまりの事にことばもいはず。其儘隣にとりすがりうれし涙を先だちぬ。梅太郎はこぼれかゝる。お春が鬢の毛かきながら。梅おまへはまアどういふ譯で。今まではながらへて。トいひながら。ゆうれいではあるまいかと。見上見おろしうろくすれば。おはるサアそれにはだんく仔細のある事。あなたはまたどうして爰には。梅されば此處に世をのがるゝ縁故はそなたゆる。譯はいつぞや琵琶小路へ。義理に迫つて聲入りし。や

う／＼一たび八幡へ。日參の事を言立にそなたに逢ふたもちよつとの間。その後かたく門へも出されず。うつら／＼と囚人の。獄屋に居る心地して。空飛ぶ鳥を羨んで。日をくらすそのうちに。滑川へ女の入水と聞た噂が氣にかゝり。根をおしとたづねたれば。柳の枝に掛てある護身籠の書付に。建久二年の正月の誕生。幼名むつつといふよしは前にいへとあるよしを聞いてその儘おそろしい。人の目門を忍び出。尾池小路へゆくうちも。生た心は情なや。そなたは川の水屑となり。跡にのこりし守袋。傳手をもとめて貰ひ受直さま其處より影をかくし。跡くらするも突詰た。其方の心に對しては。どうお秋と添ひとげられう。もとより心にそまぬ縁組も。義理ある親の難義をおもふて。一旦は聲入したれど。一夜も誠の契りは結ばす。名のみ夫婦の冷たい中。どうぞお秋に愛想をつかさ。疵のつかぬ花嫁を。其まゝ人に譲らうと。おもふにまかせぬお秋が深切。とても思ひ切るやうなれば。身投のさわぎの時の儘に。身をのがれて知己を便りに。名に所縁ある梅丘山。爰に菴を結びたる。縁をば長き未來までと。アレ見やあのごとく位牌をかざり。晝夜の看經香花の手向。心は墨の衣着て。世を捨てつる優婆塞行。有て無き身とくらすうち。おもひもよらぬ今鳥の逢瀬。おはるそれはまア／＼だん／＼の。淺からぬお志のほど。口でお禮はまうされませぬ。定めて遺書をば見てくださりましたらう。あの通りの心のせつなさ。また菊次郎さんのうるさいのに。身も世もあらぬかなしさ。一同になつたが絆のはじまり。滑川へ入水て。死んだを人に引揚られ介抱されて蘇生。大島村の網入といふ。情深い人の手に。助けられたは心にあらで。捨てた浮世にふたたび出。おもしろからずくらすうち。死なふとしたは幾回か。留られて又思へば。その人の母人の重病。貧苦の中の孝行心。いやな浮世は左も右も。命の親の恩ある人。見かねてともに看病し。折もあらばとおもふうち。圖らず知られしその人は。わたくしの實の伯母。あなたもかねて御ぞんじの。比企が谷の母の爲には。實の妹の事なれど。孫市さまが浪人して。その後はどこに居るやら。たよりがないと毎日毎夜。口につけておつしやつた。その人に不測にも。たすけられたも盡せぬ縁。その後重る大病の。人參代は

備おいて。日ごとのくらしもゆきとどかぬ。貧しい世帯の細煙り。不圖おもひ出して罪崎へ。歌妓のつとめに身を賣。その金で薬をととのへ。佛伴と本復したれば。嬉しいはうれしいが。惜からぬ命をながらへ。つらい人の氣心をとり。いやな賤しい勤の身。死ねば伯母を救ひたる。一旦恩ある主人に。仇て報ふと思はれては。伯母にも從弟の網入どのにも。たゞぬと思ふ心から。今日まではながらへし。川崎の糸吉と。人に呼れし歌妓とは。推しては糸吉とて名の高い。藝子はやつぱり其方であつたか。行ひすます禪定の身に目の毒なる婦人をば。誓つて四邊へ寄るまじと。おもふたゆゑに名は聞けども。見やうとも思はずに。居たは苦勞を永くさせる。却て身の罪作り。實に天縁は疎しいへども。終に會すといふことなしと。神の結びし二人が中。おはる／＼ほんに不測の身のうへてござんす。息をきつて走來る。箱廻しの八六が。ハ／＼ア／＼大變だ／＼。いやもうとんだ事が出來た。爰に居ると掛り合になつて。親方の大難儀。ア、どこかとおもつて一べんたづねた。サア／＼早く。春は見かへり。なんだナこの人はあわたしい。ハイヤあわがたゞしいならこの子を抱きやれだ。何だかわからねへ。地口つて居られる處にあらずだ。モシ且那御免なせし。かういふわけだ。イヤ咄しよりアレあの通りさ。客人はあの通り。一言も出ぬ高小手。いやもうこわい事／＼。なんでも金づかひがあらいか。ふしぎだ／＼といつて居た。トこのうちかし。人聲。追々近く聞ゆれば。梅太郎は戸をひき明け。窓より覗く外面には。大勢寄つて嘉千兵衛を。太き繩にてぐる／＼巻きよきわかも。サアおどれ同類があらうほどに。隠さずとぬかせ親方の金五百兩と。爲替手形の三百兩。まだ金はようつかひ切るまい。おのれが行衛處々方々。大ていたづねた事ぢやないはい。サア同類をぬかせ／＼。みな／＼く／＼つて親方さんに。渡さるにやア此方等にも疑ひがかゝる。今逃おつたも同類ぢやあるのくち／＼に。遠くは往おるまい。追かけうか。かちべえイヤありや藝者どもぢや。掛り合はないはいわしぢやとてまんざらあの金を盗んだでもない。朋輩の好身ぢや。此所聞分てくだんせ大ぜい。エ、好身も悪身もある物かへアレあこの家に逃込んだのも。大かたおのれが朋友ぢやある。あのゐる

もひとつに縛つて。鎌くらへひつぱり行。琵琶小路の萩原屋は。兩替屋の行事ぢやほどに。世話をしたのんで金の行衛を。極印目當に詮議せいと。親方の命ぢや。手紙で先へたのんで置れた。四の五のある事ぢやないほどに。早ふ逃さず押へよと。申にわかもの忍三人「ヲ、此奴どもをあの家の。主人が舎藏で置かもしらぬ。詮議せい。トヒカ。まつしぐらに駈来たれば。箱廻しの八六は。ぐわたく。戦慄臆病的。ワツトさけびて飛出し。一目さんに逃て行。梅太郎も糸吉のお春とともに。この追人のいふを聞くに。萩原屋へとは禁句なり。緯あらはれてはうるさしと。兩人さゝやき帯引しめ。裏口より潤つたひ。南を當に道もなき。山より山を手に手をとりに難なくのがれ一すぢの。細途を得たりしかば。爰をひだりへたどるほどに。怪しき邊鄙の茅屋に一夜を明し。其處にて山路の案内をたのみ。翌日はやうく。東海道に往還へ出たり川崎おんど。うた。ひらもと結のゆひわけも。かゆいとこへかんだし。とどかぬ人につながれて。ぼうし押への針のさき。つくくどうかかうがひの。ひざりもつるのはしたなく。はしごくるわの別れ坂。トウたひゆく又。伊勢参りの道者大勢。揃ひの單衣も氣がるの江戸者。コウおよそ川さき音頭は。斯唄はなくちやアいけ。そのあとから。ねへ。エヘンく聞つしよ。うた。戀しゆかしい梅の花。枝をば人に手折られて。コウおまへのはおつりきな節だの。おいらのは本家がひなしは是てございだ。なんでも流行唄なら生たお祖師さまだ。なぜといつて見な。おいらはそ。川さき音頭の作者の。かの糸吉から直傳だ。ほんに金さんあの糸吉はゆふべ逃たといふ事だの。さやうサ。全體お伊勢めへりは附たりて。あの糸吉で五六日ぶん流して。川崎音頭を習はふとおもつたのが大てんちがひだ。おほかたかねて男ざらひだなんどいふ評判でも。色男があつて亡命をしたのだらう。あたりめへさ。男ざらひなんど風聞はあつたが。戀しゆかしい梅の花。枝をば人に手折られてなんぞと。何か當りのありそやうな文句を作り出すを見ちやア。大ありさ。ときにその本家直傳のをうかひませう。近う寄て拜聴あらせませう。斯だエヘンく。誰かある。湯をもて。誰か聞人はないから爰でたても飲め。ヲヤ。白い熊が居たせ。爰は生薬といふ所だよ。うた。戀し床し

い梅の花。枝をば人に手折られて。とどかぬ床に濡らる。人の詠めとなるのも浮世。トテチンテン。つくくどうかおもひ寐の。ひぞるも夢とはしたなく。別れの櫛の情なや。チテツトンチリチンく。ヤンヤア引。なるほど糸吉の作ほどあつて仇もんくだの。「コウそんなめんどやうな節より是がい。うれおかげまのりのなア引道者にイほれて引。これそんな殺伐なはやり唄は御免だ。殊に一昨年あたりの事だ。イヤ時々いやな野鄙な節も流行るものだの。こちややれだの。だんぼさんだの。ちよいとなのだの。いやどうも甚だしい子。まだよしこのは免す所ありだ。それから見てはあの川さきおんどだの。このごろ故人になつた秀佳が作の玉川ぶしなどは。どうもかうとうなものさ。いへねへの「うたはれねへのだらう。なんでもかても川さきおんどの事さ。あれも義太夫節にあるのとは違ふと。今の一九がいつたそうだ。すこし一中があるの。大ありさ。二中がものはある。なんとあの糸吉といふものは。うつくしい上に古今比類のない藝者の親玉だ。あの色男はほんに冥加至極な事だ。しかし落命したのはまことに惜いものぢやアねへかエ。いやもう惜いの開山無類飛切まじりなしさ。あれと濱とが惜いは同じ事だが。まだ糸吉は生て居るからすこしはせめてもの心やりだ。トはなしつ。跡から梅太郎は聞ながら。糸吉と顔を見あはせて。人目を忍ぶほうかふりも。もし見とがめられてはと。心づかひぞやるせなき。折から先の庚申塚に。かごかき。ハイ旦那二挺めへりやすか。トいふを。これこれより駕にのり。鎌くらまで通し駕も。世を忍ぶ身の心苦し。しきりに急がするほどに。その日の黄昏には。大畠村に着て。網八が家に至る。網八は何事ぞとて驚きたるを。かやうくと有し次第を物語り。伯母にも梅太郎を引あはせ。まづ爰にて評議するに。網八が了簡には。年季のかよりある奉公人。きのふ梅丘山の出先から。騒動のまぎれに落命したとて。直に判人へことわるがあたりまへ。程なく使の來ぬうちに。此方から先を越して。だんく。のい立を親方にはなしたら。又仕方のあるまじきならず。情深い主人といひ。ずいぶんわかつた男ゆゑ。斯ういふすぢで海太郎に逢たならば。物の手につかぬは道理。とても藝者のつとめは成まいと。よいりやうけんも付てくれさうな

こと、くふうしていきま。直さま掛合にゆきて。相談をしたりければ。是まで糸吉の流行子にては。多分の徳付たる事なれば。さやうの譯ならばとて。通客の主人なれば。證文を網八へ返しあたへ。そのうへ身に付たる衣類諸道具。ことごとく送りつかはしければ。人々はかたじけなきまでうれしく。是より兩個は大島村なる。網八が家の食客となり。二三十日を送りしが。爲事もあらざれば。相かたらひて村稍盡處に。小細なる明家のあるを借て。手跡の指南や讀書など。子等に教るを業ひとし。お春は琴三味線の指南するに。四邊の子供湧がごとく。追々にあつまりて。何ひとつ不自由なく。網八が暮しまで手傳ひて。爰に一年ばかりを送りけり。

第十五回 夢路の花

大島村に程ちかき。八木原といふ處に。山淵託之進といふ浪士ありけり。原は千葉家に仕へて。許多の祿を給ひけるが。仔細ありて退糧し。劍術の指南して。夥の門人ありければ。家さへ富てくらしけり。それが愛女に枯梗とて。天性は古への。小町といふとも及ぶまじき。稀なる美色備はりて。今茲十七の花の顔。鄙にはおろか都にも。又あるまじき評判もの。かねてより手跡も音曲も。よく習ひうかめけるが。かゝる田舎なればよき師もなく。可惜藝をよく仕込ぬとて。兩親本意なくおもひ居けるが。去年よりお春が稽古所を始めたるに。入門といふにはあらねど。習ひし藝の復彈して。何くれと覚えさせるに。原來器用なりければ。教ふるほどはよく浮めたるに。やがて相應なる屋敷方へ奉公させんと。兩親たのしみ居たりけり。然るに枯梗はいつとなく。梅太郎の柔和にて。情深くやさしくて。むかし在る五中將。光源氏も。斯やとおもふ男風俗に。戀こがれても惚子氣の。只顔にのみ紅色して。はづかしさのみ彌増つ。お春もそれと見てとれば。かはゆそうにとおもふから。猶さら親しく馴睦みたり。爰に一條の怪譚説あり。有一夜の事なりしが。枯梗が夢にうつくしき娘の。十七八と見えたるが。いたく願ひし夢にて。うち芝打つといく千

根の。黒き髪のもふり亂し。うつくしとして多みしが。やがて枯梗にいひけるやう。そも妾は鎌倉なる。萩原屋村次といふもの、娘にて。あきと呼ぶものなるが。あの梅太郎刀禰に戀こがれ。わづらひたりしその時に。神ト佛に祈りしが。縁ありて願ひ叶ひ。夫婦とはなりけるが。彼人はお春どのと。深き中とて子までまうけし事なれば。親々の愚智なるより。押て婚姻はしたれども。末の得遂ぬ縁にして。仇結びなる下紐も。解て誠の契りもなく。左につけ右につけ。氣むづかしく。上への情はなかく。思ひを増す媒介なりしを。心ぐるしく暮すうち。その時より死なんとおもひ。書置して身を投しが。淺ましきは女子の愚智にて。思ひあきらめてもあきらめられず。煩惱の燃消かねて。彼人たちの睦じき。中を見るより胸も燃。身も世もあらぬうらやましさに。終に嫉妬の念を起し。とても成佛ならざれば。今おん身が梅太郎どのを。少しく慕ふ氣に乗じ。今よりその身を借。おもひの程を言述んと。閻王の關を破り。捺落の看鬼を忍びつ。ふたゝび閻浮にかへり來て。此一條を頼むなり。といふうち向ふに火の車。あまたの牛頭馬頭をいゝと。修羅の鼓呵責の杖。鳥は鉄の爪を磨ぎ。猛火四方に散亂して。覆ひかゝれば聲をたて。あらくるしや絶がたや。女の深き罪咎を。如何に今さら責給ふとも。思ひし一念止まらじ。啼苦しや妬まじや。と叫ぶ聲さへ末枯て。猛風颯とおとし來つ。なほも利だつ鬼の呵責に。狂ひまはれば打たつる。鼓の音のどうく。さもすさまじき火の雨に。黒雲むらがり引つ。髪は毛より引廻され。あら堪がたやと叫ぶと見えしが。駭然として驚き覺れば。物にやおそはれ給ふとて。寄り添ふ人を突たふし。立上れば是は如何にと。押へとむる人々を。投たふし突轉ばし。嫉妬の念力恐ろしく。力量利き指嚙の。女の一心顔に發れ。心も髪もふり亂し。外面へかけ出走さりぬ。

仇競今様節第三編卷之上終

仇競今様櫛第三編卷之中

第十六回 嵐の花

梅太郎は手跡指南に。心を盡して深切に教へ。お春は琴三絃の稽古に。念を入れて教ゆるほどに。門人は日に増し。月に添ふて。今は夥になりしかば。普請を廣くし庭など奇麗につくり。梅樹數株を移し植ゑ。板塀のかたへには。枝折戸の門ありて。百梅亭の額を掛たり。朝は未明より入來る弟子を。門を開いて。下女ふくどなたもお早うございます子。そのお早いのがわたくしなどは大めいはいく。いつそねむくつてなりませぬ。女子ども「ヲ」よい氣味く。そのかはり晩には日さへ暮るとお居ねむりだからよいは。ふくうそばつかりあなたではあるまいし。又一人「お福どんヤ。きのふたのんでおいた爪袋は縫ておくれか。ふくほんにさつぱりわすれました。晩にはきつと直して上ます。又一人「それお見。なんでも日がくるとねむがつてばつかりあるからだよ。又一人「あのお引初の晩の賑やかな時さへ居ねむるものを。ふくよろしうございますよ。なんとでもおつしやいまし。この内みなく。おはる「どなたも今朝はお遅いね。子ども「ハイ御機げんやう。あの引お師匠さんへ。おつかアさんが子。これはあの引鎌くらの姉さんからもらひましたから。おなぐさみにあげますと。おはる「それは有がたう。たしかお姉さんは。畠山さまへお勤めなさいませぬ。ねへ。おつる「イ、エそれはお龜さんとこの姉さんだよ。わたいのねへさんは子。げぢくさま。おはる「ム、梶原さまかへ。ほんにおつかさんの御奉公なすつた旦那さまだとおつしやつた。御重縁でよいねへ。おまつ「お師匠さんへわたいの江の島が明後日上つて。それからは何をはじめてくださいますか。おはる「なにがよからうねへ。おまつ「あの引おつかアが。櫻餅とかを賣えたら。金澤の借取さんの處へつれていかふと申すましたよ。おはる「まださくら餅は聞

があります。まづ今度は住よしか虫の音のやうなものにいたしませう。もちつと手がまはつてから。櫻餅をばじめませう。お竹あの引六だんの四だんめのはじめを。もうちつとさらつてくださいますな。おはる「アイなせへ。きのふ直してあげた通りでよいのに。お竹「それでも子。はつにお琴を弾せてひきますと。どうも合ませんよ。おとつさんが大かた違つて居るだらうから。また直していただくと。おはる「なにさ。まだほんとうに間がいかないからさ。それでもわたしが琴を弾くと合ふけれど。全躰四段目の始めのうちには琴とは手が違つて。ばち數が違ふけれど。間はをんなじ事。外の物の替手のやうなもので。それであうのだけれど。全躰まだ六だんはちとむづかしいが。覺えたいとおひだから。教へてあげたのさ。三下りのはまだおもしろいから。おしつけをしへてあげやうねへ。ドレひいてごらん。三段目の。チチンチリンチタンといふ處から弾てごらん。お竹「ハイ引おはる「そのとほりてよいよ。琴を八木原の桔梗さんに弾てもらつて合せておとつさんにお聞せ。ずいぶんよいヨ。サア先はお慶さんかエ。きのふ心盡しをおはじめたツけ子。けり「ハイきのふは遅くまゐつたから。桔梗さんにお二階で。あなたの代りに始めていたじきました。須磨の浦廻の浪まくらといふ處まで。おはる「サアお弾。もちつと左りへお寄てないと四を押すのに手が届きませぬ。あのお花さんは跡ならその内二階でお浦さんにさらつておもらひよ。免許ばかりお取ても。おさらひをたんとおしてないと。やつぱりいけません。琴はおさらひが第一でございます。このうち梅太郎「来り。淨手などつかひ。煙草のみながら。梅ム、なんだ工繪双紙がいかい事あるの。みんな新板たの。おはる「お鶴さんが。梅「そうかエドレく。拜見しませう。とかく京橋の仙女香はなれぬやつだ。實によい白粉だそうだ。なんだ二代目の十九の歌があるはへ。百歳の老も若やくおしろいは。是ぞ玉母といふ仙女香その折から。表の戸をおしあけて。入り來るは八木原の託之進が愛女。桔梗。髪ふり亂しあらしく。一文字に馳せ來りて。梅太郎が向ふに座したる。その面色ものすこく。目も血ばしりて髪を亂ろしき。顔をうち見てお春はおどろき。おはる「ききやうさんどうしたのでそのやうすは。そして只おひとりて髪を亂

したうへに。見ればお臥服のまゝで。マアどうをしだトいふかほにらみて。恨の旨を述んとにや。又梅太郎を見つめ居たるが。さながら今梅太郎に逢ふたれば。何となくはづかしき躰に。顔おしかくし居たりける。實にこれ女人の情なれば。恥かしさには突詰し。心もしばし弱るなるべし。やゝありて顔をあげ。桔梗お春さんとやはじめてお目にかゝりましたが。だんぐり聞けば梅太郎さんとは。元來わけのあつたとの事。そうとはしらぬ心から。恥しながら戀病に慕ひましたを。おとつさんからすぐに郷兵衛さんに掛合。やう／＼ねがひはかなふても。おまへさんといふ人があるゆゑ。ついで梅太郎さんの笑ひ顔をも見せた事もなく。そのうへおまへさんは遺書をして。滑川へ身を投たと。偽の風聞をたてさせて。身をかくして待うち。梅太郎さんも約束で。跡から逃てぬつくりと。かくれて中よく暮すとは。ほんに夢にもしらぬ火の。盡す誠に突つめて。一生添はれる事とおもひし。梅太郎さんに捨られて。またお春さんの事。何くれと聞くにつけ。どうも生ては義理たゞずと。遺書して身を投んと。準備をしたる星の井に。菊次郎どに見咎められ。抱き留められたその時に。かの人のいふを聞けば。お春さんの跡をしたふて。梅太郎さんも滑川へ。身をなげて死なしやんしたと。眞赤い偽を誠と思ひ。直に入水して死んだれど。女の嫉妬の罪深く。浮む事かなはねば。宙宇に迷ふ煩惱の。心の猛火は水にも消ず。くるしみ狂ふそのうちに。二人のおかたの存命で。死んだといふいつわりに。わたくしをだましておき。中よく添ふを知りしうへは。片時もこらへていられうか。うらみの念の心かにて。人の報ひは有ものか無ものか。思ひ知れやトいひながら。にらみつめてたちかゝる。そのかほつきも物ごしも。お秋に一點違はねば。梅太郎は驚きながら。梅ム、さてはお秋は入水したか。思へば／＼足らはぬ此身を。それほどまでに慕ふてくれる。心根の不便さよ。しかしよく物を辨へよ。お春は一たん滑川へ入水したには違ひなけれど。此大島村の網入に引上られ。憎からぬ命を助けられしも。不測の縁にて近い親類。その伯母の重病を。見捨て死ぬにも死なれぬゆる。業の代に身を告て。罪時に難者の勤め。又我々は家出せしより。梅丘山に世をのがれ。行ひす

まして居たる處へ。不圖來かゝりしお春さへ。その時は幽霊かと。既におもふたぐらゐの事。菊次郎が何といふたか。その様子は知らねども。全く偽るべきやうなし。その場より爰へ來り。けふまでは過したり。いふ詞の誠言虚言は。幽冥の人なれば。通力にて知り給へ。といふ顔をうちまもり。佛法修行の上にして。羅漢果を経ざるものは。通力はある事なしと。人にはかねて聞くものを。この身は罪の深いうへに。只煩惱の一心にて。思ひつめた二人の衆。悪いにあらでいとさが。積り／＼て恨の種。どのやうに通れやうとしても。金輪捺落の底までも。離れはせぬやりはせぬ。お春どのもいつしよにトはらへどさらす追ひまはず。その聲音さへ寸分違はぬ。お秋がうらみの無理ならじと。おもふにつけても薄命に。人もその身も盡せぬ苦心。如何なる前世の讐家同士が。寄あつまりし事ならんと。いふも。語るも解しなき。一心不亂強氣の冥鬼。逆立兩眼に血をそぐ。鬼女の分野地獄の躰相。三人ひとしくかけ廻る。三途の川の瀬を近み。過去と未來と現世の苦に苦。一同に寄し三巴。太鼓は修羅の呵責の響き。遁れはてじと見えたりける

第十七回 花しづめ

正法念經に説く如く。女人の性は嫉妬多く。これが爲に菩提心生ぜず。よりに佛の憎み給ふ。實に恐るべきは女人の一念なり。お秋が亡靈妬みを逞くし。終に桔梗に屬託て。梅太郎お春をなやまし。三人ひとしく狂ひまはり。くるしむ躰は現世から。地獄のありさま眼前。罪も報ひももろともに。勞れ果つゝ倒れ伏。ひとしく氣絶したりける。その時稽古の子供や下女の福が。四邊の人に知らせたるにぞ。追々に馳せあつまり。さまざま介抱せしかども。更に正氣の付ざれば。もてあましたるその處へ。八木原村なる託之進夫婦。又網入母子もろともに。馳せ來りて周章まどひ。いかにせんとばかりに。爲術つきて茫然たる。外面にイむ一個の修行者。鈴うち振りて。聲高く「罪深き雲魔か

する御佛の。風にぞすめる秋の夜の月。トくりかへし吟じつゝ。南无摩訶般若波羅蜜。罪障消滅南無佛と。唱ふる聲に入々は。幸ひなる折からなりと。まづ裡へ請じ入れ。在斯災厄の侍るなり。人を救ふは桑門の御つとめ。慈眼にみそなほし給はせよといひつゝ見れば年齢は四十あまりの。最殊勝なる尼なりけるが。やがてうち點頭て。仆れふしたる三個にむかひ「觀世音。南無佛。與佛有因。與佛有緣。云々と。十句觀音の經文を誦すれば。皆三人もろともに。聲を揃へて唱へけり。斯する事三度にして。一回に吻と一息つきてひとしく。心附たりければ。梅太郎お春は夢の覺しごとく尼僧を見て大きにおどろき。こはそも如何にと顔見合すれば。並居る人々その意をさとらず。如何なるおん方にて候へば。此危急をば救はせ給ひし。願くは道號を聞せ給へと願ふほどに。尼は爪繰る念珠さしおき。妙わたくしはどなたにも。お目に掛るははじめてなれば。御存のない筈なれど。この梅太郎の爲には實の母。鎌倉雪の下。尾池小路の郷兵衛といふ者の妻。この春と申すは。わたくしの兄比企が谷の金澤屋瀬兵衛といふものゝ娘なれば。わたくしの爲には姪。梅太郎とは従弟同士。十才の年父母に死別れ。只一人の娘なれば。家財をみなとりかたづけ。引つて養育し。久後は梅太郎と配合せんと夫婦約束して。兩人の者にもいひ含め。中よく睦ましく暮すうち。改めて婚禮の規式は致さねども。夫婦にして柳之助といふ子まで産。世間の人も知る事を。繼しき父親の強慾に。萩原屋といふ大家は。預る地面の地主にて。一人娘のお秋どの。梅太郎を戀ひ慕ひ。わづらふほどに親々が。無理に郷兵衛へ相談して。得心もないを親に不孝のと。倦ぬ中を引割て。萩原屋へ嫁にやり。その事より事おこり。ほかに夫はもたぬといふ。つまつめたお春が貞心。つひに入水をしたれども。ふしぎに人のたすけに逢ひ。ふたゝび生て世にあるとは。神ならぬ身の知らざりしが。引つゞいて梅太郎は行方しらずなり。またその事を苦に病んで。義理を知つた。お秋どの。これも身をなげて死なれたれば。さまんかかなる。宿業の。せめてもの罪ほろぼしと。わたしも直さま夫に願ひ。松が剛の御手にて。誦經し。誦經をば妙慈と唱れ松の剛之助は一人あるきのなるまでとわたくしの。手もとへ張

とり。養育すれども有てなき。一所不住の雲水の身。心ある方に一日一日と。頼んで今日まで育てたり。柳之助やトよぶこゑに。おもてのかたにうか〜と。餘念もなき子供心に。揚る風見てうらやましげに。空うちながめ遊び居たるが。柳祖母さままたひもじくなつた。なんぞほしいトゑんがはより。遠慮もなき童のかはゆらしく。妙英が側へ寄り添ひ。柳ばどさまや。今日は何處に寐るのだよう。昨夜寒くて眠らないから。坊は眠たいよ。はやくうちへ歸りた。い。よう歸らうよ。此間の事をよく覚えていふから。はやくうちへ歸つておくゑよ。トこゑに。南無大慈大悲の觀世音。父母の後生安樂に守らせ給へ。おばどさんや。斯いふとの。ちゃんや。おつかさんが。遠い處で柳之助をほめておくれかエ。なぜおいらにはちゃんもおつかさんもないのう。サアなんぞおくれよう。南無大慈大悲の觀世音トくりかへし〜。となふるさまに梅太郎も。お春もともにすがり付。その儘膝に抱きあげて。梅コリヤ柳之助。そなたのちゃんはおいらだぞよ。柳おばさん。おいらのちゃんはどこにおいでだ。おはるおまへのちゃんだよ。わたしはおまへのおつかアだよ。柳おばさんやわたくしのおつかアは子。遠いところへいつてもうかへらないよ。あの引觀音さまや地藏さまといふおぢさんのそばにおいでだと。早くいつてだかれて寐したいなアトいふにぞわつとなきいだしおはる。ア、かはゆそうに。この母が生て居る事はしらず。今日まで慕はせて泣せたのも。どうも知らせてやられぬ譯。そしてまアあなたにはどうして尋ねて。妙されば松が岡からあちらこちらと。梅太郎が行衛。この子をつれてたづぬるうち。今朝不圖途中で桔梗どの。亂心した體を見かけ。かねてより信仰の。松が岡の妙雲禪尼さまから。お授けをうけた觀音の秘法にて。加持して狂氣を愈してまらせんと。思ふにまかせぬ亡靈の。嫉妬の恨みになす事あれば。一旦その人に逢はせたいと。跡について来て見れば。おもひもかけぬ子供が住居。その亡靈はお秋が亡魂。それと知るゆゑ一首の歌は。罪深き雲薩かするみほとけの。風にぞすめる秋の夜の月とは。摩訶般若波羅蜜といふ。お秋どの。戒名を。その儘佛陀方便の詠歌を手向る後世のいとなみ。萬部の經にすぐれし功力。一旦の恨みを述べたれ

ば。念を遺さず成佛し給へ。またせめてもの心やりにはひとたび。魂魄婆に通ひて。假託したりし桔梗どのを。萩原屋村次の養女とし。名をもお秋とあらためて。梅太郎と婚姻し。前のお秋同様に。めでたく添ひとげ給ふべし。またお春は梅太郎の妾となりあらためて。柳之助を養子とし。萩原屋の相續し給へ。村次どのを呼寄せて。この事を相語はど。承引ぬといふ事はあるまじ。此座におはする託之進どの。聞わけて給はれと。事を分けたのむほどに。いかていなみ申さんとて。直さま萩原屋へ人をはしらせ。事の仔細をいせけり。網入親子も母方の縁者なれば。妙英は幼少の時分より知りたれども。久しく逢ねば見わすれたりしが。この時また名のりあひて。不測の再會を悦びぬ。さて妙英尼は人々にむかひ。此桔梗どのは一人娘にてもなきよし。いよ／＼萩原屋へつかはされねば。ならぬといふその仔細は是を見給へトいひかけて空心として座したりし桔梗が左りの腕をまくれば。あり／＼と文字あり曰く。鎌倉琵琶小路。萩原屋村次娘あき。行年十八才とあらはれたり。洗へどもふけども落す。是先にお秋が水死せしとき。書つけたりし文字なりけり。此時も桔梗はいまだうつく／＼と。正心はつかざりしとぞ。

仇 競 今 様 櫛 第三編卷之中終

仇 競 今 様 櫛 第三編卷之下

第十八回 花 が つ み

却説鎌倉琵琶小路の萩原屋にては。愛娘のお秋が變死したりしより。村次はいふも更なり。妻のお宇津は甚く歎きて。朝暮かなしみ泣明し泣くらすほどに。終に煩ひ着て。冥途の鬼とはなりてけり。強慾無慚の村次も。娘の變死妻の災厄重なり來たる禍鬼に。さらに爲術知らざりけり。斯て月日のたつ事速く。今日は亡愛女の一周忌なりとて。數多の僧を招き供養し。追善の營なみして。回向したるその折から。大畠村より急の使に。娘の亡魂人に假託て。梅太郎はじめお春を惱ませし事。また郷兵衛が妻のおりの。剃髪したる妙英尼が。緋の仔細。一封の文書にしまめ送り越しければ。見るよりいそぎ支度して。郷兵衛にも委細を言やり。兩個ひとしく大畠村に至り。人々不測の對面をよろこひ。爰にて妙英尼がとりあつかひにより。桔梗は今より村次が養女にもらひうけ。梅太郎を已前ら通り聲として柳之助を養子として。お春をば妾とすべしと。親を親族うち寄りて。既に評議決したりければ。殘忍無頼の郷兵衛も。妻の道心よりしきりに恥。己が心より數多の人の災難變死等。種々の騒動となりしを。今さら先非後悔し跡をば次男の菊次郎に譲りて。相應の縁組し。相續させて給へとて。人々にたのみおき。すぐさま剃髪して。是より後世のいとなみに。造りし罪を亡ぼさんとて。稻瀬川の淨照和向といふ道徳の聖に謁して。懺悔受戒し。法名を淨光と給はりて深澤の里に菴室を結び。堅固に佛道修行したりけり。それはさておき。桔梗はうつく／＼正氣つかざりけるも。妙英尼が教化によりて。終に本心に歸し。此時先のお秋が墓所の土を取て。今のお秋が改名なり。腕の文字を洗へば。こと／＼く落たりけるにそ。これにてうらみもはれて。得脱成佛せしなるべし。人死したる時掌中に名を書けて葬れば。かなら

す再生たる兒の手に。その文字ついてあらはるゝを。墓所の土にて洗はざれば。落る事なしといふ説もまた誣べからず。扱琵琶小路へは。梅太郎。お春。柳之助。ともに呼とりて事調のひ果たりしかば。村次もしきりに佛心を起し。邪念を捨て菩提に入り。亡人のために六十六部を思ひたちて。回国修行に出たりけるは。殊勝なる志なりけり。

第十九回 花がたみ

爰に大畠村の獵師網入は。孝心慈心の切なる事。梅太郎等が風聞について。都鄙に噂したりければ。親孫市が古主梶原殿きこしめされ。たちまちに役人を以てその實否を糺され。則ち歸參おほせ付られ。親の祿の儘を給はりて。小夜戸孫之進と名のらせ。母子ともに引とりて。安樂に過しけるが。ある時京都の商入より。盜賊の事にて願ひ筋あり彼攝津國屋嘉千兵衛といふ悪漢を縛しめて。事の顛末を訴たへければ。役人委細を吟味したりけるに。原京都三條の大買家。攝津國屋何某の番頭なるが。主人の金を盗み關東へ下り。その後所々の悪棍に同意して。追剽切取強盜を事とし。鎌倉にては名に聞えたる。福有の家へ忍びて土庫の。財寶を奪ひし事を伏告に及び。今回は川崎のほとりなり。梅丘山にて糸吉といふ藝者を呼び。酒のみて居たりけるとき。彼處にてからめられたりといふ。なほくからめたりし人に尋ねれば。彼山に隱者の住居ありて。四邊に梅を植たるが目印なるが。其家に嘉千兵衛を舍藏しものなるべく。その證は藝者をはじめ。あまたの人等皆彼小家に逃込たれば。是を穿鑿したまはゞ。果して嘉千兵衛の同類あるべしといふ。よつて彼處は梶原家の領地なれば。時の執權なるものから。掛りの役人より手入を遠慮し。まづ梶原への由を掛合におよびけるが。この時小夜戸孫之進は名なり。重役に進みたれば。事の次第を聞いて大に驚き。その事きびしく糺すときは。梅太郎などの風聞は。今處々にかくれなき事なれば。なかく掩ひかくしがたし。さすれば掛りあひにて難儀におよぶべし。いかにせんと思案したりけるが。まづ左も右も彼處へ役人をつかはして。その所

のものに案内させ。彼小家を穿鑿するに。諸道具家財も早くとり片付。小家の残りあるのみにて。爰は村の地内なれども。地先の飛地なる隣村と入會の片山影にて誰が持分といふ事もなく。住む人のあらざれば更にその手がよりを知る事なければ。所の人に尋ねても。爰には百梅亭勝色とかいふ。狂歌師やうの者住みて隱者の菴室なりけるが。先よりその人は行衛しれず。世話して置たりといふものもなし。所の者もかゝる不用の地なれば。その人の自分の物入りて住居するは。かへつて地守のやうにて。田畑へ出る猪鹿の防ぎによしとて。谷むるものもなかりしといふ。さては盜賊の同類に極りぬ。少しも少がよりはあらざるかと。猶さまんに尋ねざるに裏戸口の竹椽の下に。古き小柄刀ひとつ落てありけり。役人これを取あげさせて見たるに。赤銅にて金銀にて高く置たる山鳥の模様あり。是もひとつの手がよりなるべしとて。其儘引とりて。事の仔細を言上し。件の小柄刀を出しければ。孫之進これを見て。並居る役人に見するに。一人がいふ。是はもと畠山殿の秘藏の品なりしを。故あつて浪人由井郷右衛門といふものにつかはさる。その浪士は往る富士の牧狩の時。卒士の宰領して。功あるにより。召抱へらるべきを。辭退して町方に在しよし。その後倅郷兵衛といふものより町人となりて。雪の下の尾池小路あたりに住むよしなりしが。その郷兵衛は篤實のものにて。當家へも畠山家へも出入せしが。はやく死して又跡へ入夫したる今の郷兵衛は。心さまよからぬものなりといふ。しかれども此小柄は。彼が手にあるべき管のものなるを。いかにしてか彼處に落散けん。もしは嘉千兵衛が同類の盜賊ども。盗みとりしものならんかと。その來歴を物語りぬ。孫之進これ聞いて。さてはとおもひあたる事あるにより。まづ追て評議のうへ。事の仔細をまうし立らるべしとて。その日は退出したりける。さても嘉千兵衛といふものを。追々詮議ありて尋ねられけるに。處々にて強盜押入等して。あまたの金銀を奪ひとりたるものにして。同類も多けれど。今は何國にあるや知らざるよしにて。また彼の糸吉といふ藝者の事をたづねられ。金子にても外の品にても與へし事はあらざれども。久しく川崎の驛に逗留して。買ひ馴染たる事よし。すなはち委細に言しけるよ

り。なほさまざまに吟味あり。川崎の里の長。何某をも呼び出されこの頃はすべて里の長とよばるゝ者ありて人をやどし女を子細を吟味ありけるに糸吉といふもの今居らずとも。彼に手がりのたづね方あればとて。そのものを呼ぶべしとなり。この時梶原家よりも。件の小柄を添て。有し次第をまうし上小柄の風聞等の事までも進達し給ひければ。孫之進よりは梅太郎へ内通して。もし糸吉の事呼出されん時は。いかなるものにもその時の糸吉なりとて。さし出さば一通りの事にて濟やうに。内々たのみおきたれば嘉千兵衛と突合せにもなるまじければ。その旨こゝろ得て取計らふべしといふにぞ。いかゞはせんと案じけるととき。川崎の長よりも。その通達ありけるまゝ。許議したりけるに。先にお秋の病氣の頃召抱へたるこしもとお糸といふもの。いまだに勤め居たりけるが。器量といひ藝といひ。尋常ならざる才ものなりしが。お糸此よしを聞てなにとぞわたくしこれまで御恩おくり。其時の糸吉といひて。御吟味うけ申たしと。思ひ入て願ふにより。すなはちお糸を糸吉なりとて。ひそかに川崎の長に談合し。訴訟の場に出しぬ。此お糸が事回花すり衣といふ。斯て役人その時の掛り岩永左久次郎といふ人。事の仔細を尋ねられ。またこの小柄は風聞に。其方川崎の驛にて。藝者のつとめしたるとき。大切に所持して。人にも見せざるやうに。守身袋に添て持たるを。見たるものありといふ。さればこの品梅丘山の庵に落ありしは。彼處の小家に住たりし嘉千兵衛が同類のものを。汝よく知りたるなるべし。さればその行衛は何かたなるぞ。くはしくまうせと詰り問ふ。この時風聞の掛り合なりければ。郷兵衛が跡の菊次郎をも呼出し。小柄の事をたづぬるに。先に紛失せしよしを。親郷兵衛まうしたりしが。いつのころと申す事も承はず候とのみ答へけるまゝ。糸吉へ猶たづねらるゝに。その品は何方の人ともしらぬ。旅人にもらひたるにてその人の身のうへ品の出所も。更にぞんじ申さず候。といひさまやがて懐中より。一枚の紙をとうて。おそるゝ申けるは。わたくし事川崎にて歌妓のつとめせし頃に。川崎音頭といふ流行唄を作りいだし。節附してうたひしがもつばらはやりて鎌倉にも。京都にも唄ひもてあそび候よし。しかるにある人川崎音頭の唄歌を作りて。わたくしへ遺し。是をも節を付てうたひはやらせ。候へ是こそ日本一の盗賊の事をつくり。また國に變のある事をつくりしなり。とておしえられしが。讀て見ても愚なるものゆゑ。文句わかりかね。候故。その儘にしまひおき。所持いたしをり候なれ。もしは嘉千兵衛が手がりにもなりもやいたし候はんか。御らんくだされかしとてさし出すを。畠澤重藏岩永佐九郎。ふたりひとしく聞き見るその唱歌に。

星月夜鎌倉山にかゞやきて、靜にぞすむ和田の原。おさまる御代の時まさに。あれ浦風があるまぞへ。沖にさわげるしら浪の。事はちひさし大海の濱の。まさごの盡ぬこそ。ほんにうたてのよの中や。

この唱歌をくりかへし吟じけるが。やがて畠澤重藏。横手をうち。さすがは名に聞およぶ。川崎の歌妓糸吉いしくも此唱歌をばさし上たり。嘉千兵衛が掛り合は。事分明なるうへは御構ひなし。この小柄は返しくださるゝぞとて。くだんの小柄を下つかはさる。糸吉はありがたくおん受し歸りたるが。このまゝ嘉千兵衛は罪科のがれす。由井が濱にて死刑に行なはるすなはち件の小柄といふは。さきに梅太郎が琵琶小路へ鞆入りの時取落して指に痕の付たるまゝ。お春紀念ぞとて梅太郎よりもらひ受置たりしを。片時も身を放さざりしが。この事は初へん。梅丘山にて再會のとき。兩個ひとしく逃去らんとして。終に彼處の庵へ落したりけるなり。扱もかの歌の文句は。和田の原とは和田義盛をいひ。時まさにとは時政なり。和田合戦の起るべき前風をかくは作りたり。白波とは盗賊の異名。その盗賊の事くらひはいと小さし。まだ大きな國賊とは。北條をさしていふか。時政外戚として逆威を震ひ。ほしまゝの行狀のみするにぞ。尼將軍なる政子の前。是を用ひ給ふ。濱の眞砂と作りしは。政子の事なり。畠澤重藏これを見て。更に咎むる事もなく。歸せしはまたその意あるなるべし。その才發を見聞およびて。小夜戸孫之進深く感心し。やがて梅太郎にかたらひて。お糸をば孫之進が妻に貫ひ迎へけるとぞ。和田北條の前見妙なるかな。時に建曆三年癸酉。改元ありて建保元年和田北條確執して。合戦には及びけるなり

第二十回 花 の 錦

爰に郷兵衛入道浄光は。淨照法師の徒弟として。佛道修行したりけるが。今よりお秋お宇津等が。菩提の爲。またつくりし罪を亡すべき。善根の爲にとて。深澤の里に大佛を建立せん。と都鄙をめぐりて勸進し。しきりに思ひ起したりければ。村次もやがて傳へ聞て。所々にて人を進めつゝ。その料を送り。妙英尼も力を合せて勸進したりけるに。時これ合戦静まりて。いまだ幾程もあらざれば。死亡の人の追善にとて。合力寄進の人多く。さればいさゝかの思ひたちも。その間十八九年にして後。嘉禎四年三月二十三日。終に志願満足して。阿彌陀如来の大像成就したりけり

○因にいふ大佛は稻瀬川の邊にして。見越が嶽の麓にあり

鎌倉や見こしが嶽も雪消ていなせの川に水ぞ増れる

と鎌倉の右大臣の詠み給ひし所なり東鑑にいふ。嘉禎四年三月二十三日。深澤の里に大佛を建立せしむ。その始め僧浄光といふ者。尊卑勸進せしめ。此營作を企つる。御頭の廻り八丈とあり。又頼朝の代に建立ありしは。木像にして今はなし

○昔の堂の跡今なほあり。作者一九。先の年。前の一九と共に江の島へ詣たる時。鎌倉に逗留して此大佛を拜みしが。堂の跡居石一間四方ほどなり。中の柱の穴あり大佛の膝の廣さ七間半。後へ五間の中高さ積りがたし。大なる男ひざのうへに上りて。二間一尺の槍胸にも至らず。大指ふとさ三尺八尺。爪一尺二寸有大佛の像の中へ入りて見るに。千體の佛像を安置す實に大きなものなり。何人やらんの句に。のびあがり見越が嶽や花の枝とせしも思ひ出らる。

○鴨の長明が紀に。油井の浦といふ處に。阿彌陀の大佛を作り奉るよし語る人あり。やがて誘ひ行て見れば。尊く有がたしと記せる中に。遠江の國人。定覺といふ者延應の頃より思ひ起して。とあり。此定覺としるせしは別人にや。

其後今のお秋が實父山淵託之進も。古主千葉家へ歸參してめでたく暮し。浄光は此大佛の前に菴室を結び。生涯行ひすましてくらせるが。後寺となりて妙英山郷光寺と號せるも。妙英尼と郷兵衛といふ俗名と。浄光といふ法號の光の字と。則ち夫婦の道心者の名によりて。號けられしものなりとそ。村次はさゝめが谷のほとりに辻の塔といへる塔を立て。又六觀音を建立す。是も道心堅固にして。目出たく長壽したりしとぞ。扱も梅太郎は家業出精したりけるほどに。追々巨萬の財寶をまうけ。地面出店の數を知らず。お秋お春は數多の子を産みて。菊次郎も志をあらためて。篤實に精出すほどに。是も日に増て繁昌し。琵琶小路へ大造なる普請して。數十人の召仕を扶持し。何れも上の御用達とて。將軍家より格式まで免許され。兩家安樂に暮したり。是を琵琶小路の二軒長者といふ。また二箇櫛といひけるとぞ。櫛と號る事は。入り來る人の櫛の齒を挽くがごとくに。絶間のなきをいへるなるべし。また菊次郎も人にもてはやされ。梅太郎も同じく人によくすかれるといふ心にて。櫛といふ名は負せけん。又は人の上につくといふより。櫛とは唱ふる歟。生まれ右まれ六百餘年の。昔を今にひきなはず。故きを尋ねて新しき。當風櫛の趣向の首尾を爰に全うして筆をとどめぬ。

仇 競 今 様 櫛 第三編下之卷 終

跋

今の十返舎先生は。東武臺麓に住す。上毛州黒河の里の産。姓は糸井名は武。始め夷曲詞を能して。故蜀山翁より送らるゝ雅名を。瀧糸丈と呼れしが。後春興とあらためられて。號を梅園といふ。蹄齋先醒に隨ひては。畫筆に一風の妙をあらはす。一號紀山人。また花輪堂。赤城子の諸號あり。一回は教訓亭の舍盟に遊びて。數十部の著述に妙案を盡し。其後前の十返舎重田一九老人。十字亭の別號をおくられ。今の先生其時は年才によりて。三九と號られしなり。今の先生二十七歳のとき前の老人考が然して半九子一寶子一河子一得子一八子等の社友と交りて風流を盡されしが前の老人遺狀して。その雅名をば。三九主人に譲られたり。爰にその遺書を摸し載。四方の看官に是を告て。披露を跋に換るのみ

例の戲作の道づれなる三九子のもとへ

予が號をおくるとして

しら紙を雪にたとへてふみつくる

筆のゆきゝの道ひらけかし

前十返舎一九賦

二代目の大先生と今からは

糸井の水のたゝへまうさん

東武飯臺逸民

狂月舎のあるじ

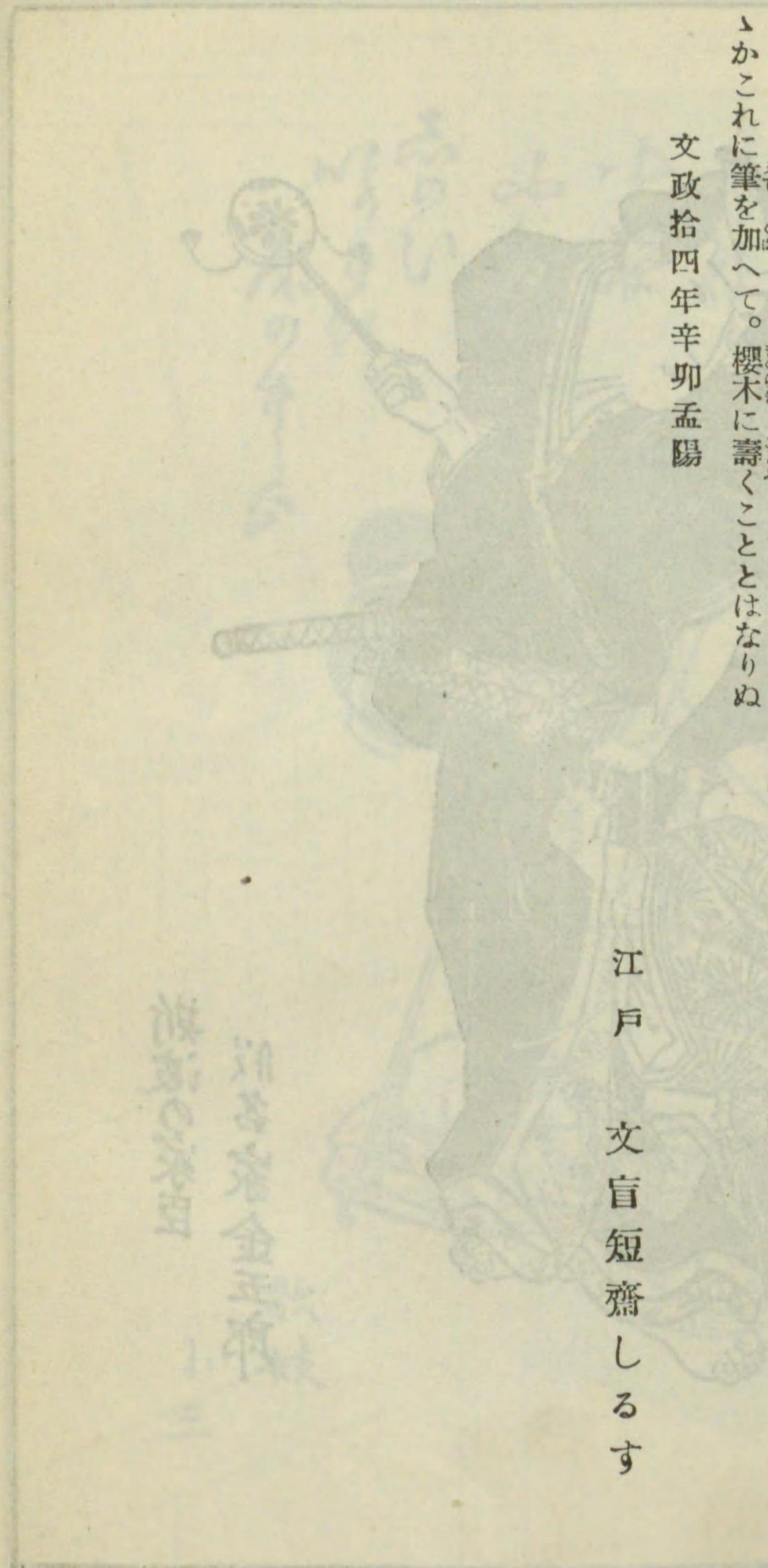
四方正木誌

小三 金五郎 假名文章娘節用

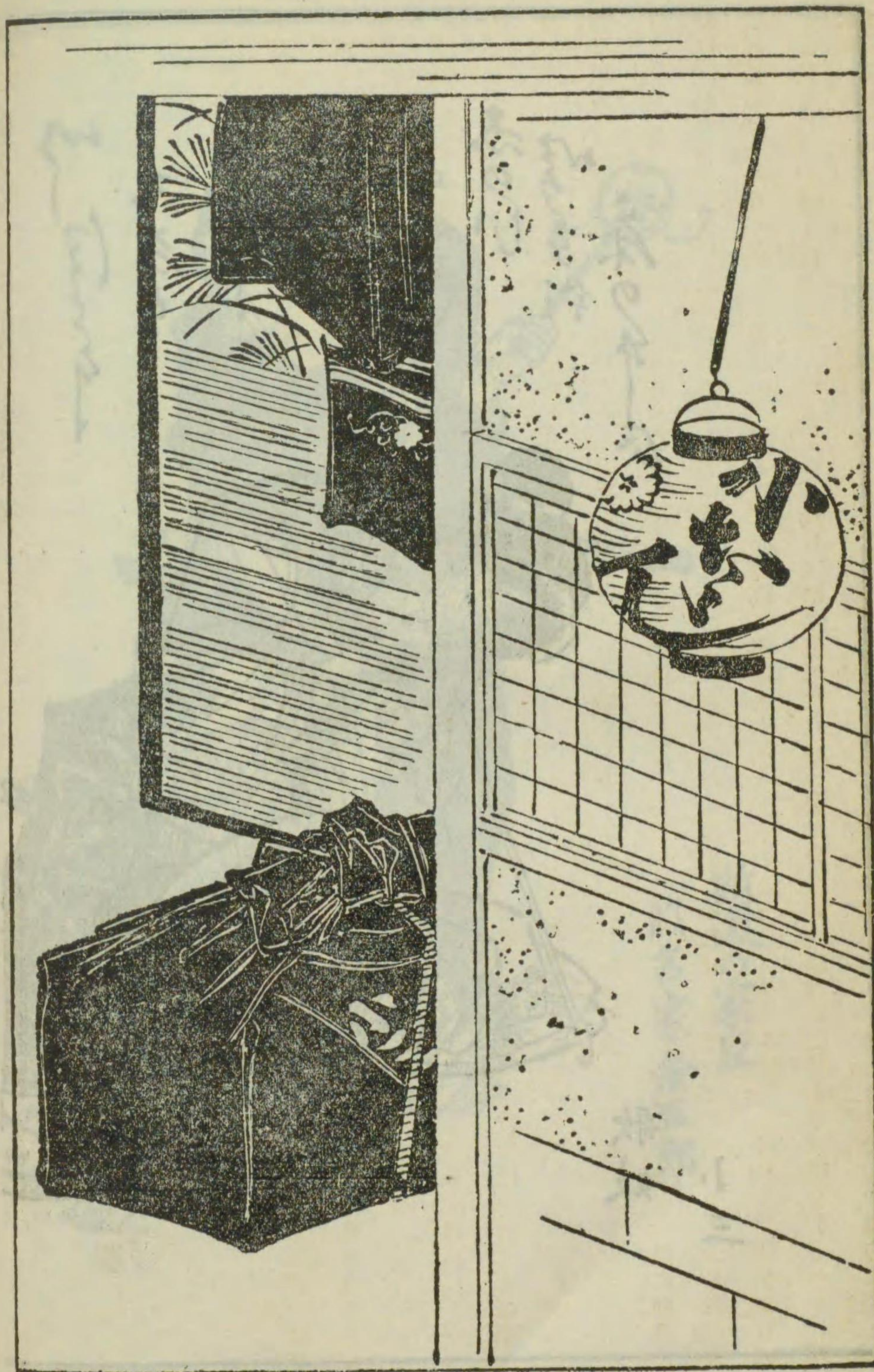
そもく男女のなからひは。八百萬の神達の。出雲の御社に群つどひて。結ぶえにしのさまくなる。龍の前の三介が。相摸出生のおさん殿と。物置の出合の國訛。片言まじりの口説事。寡婦と養子の芋田樂。喰はぬは損者のびんづる隠居が。むしろやぶりの女ぐるひ。あるは帯屋の長右衛門か。老實をして管入の。お半の壺へくらひ込み。浮名を桂川に流せしも。皆ことく縁なるべし。こゝにあらはす一部の册子は。いかなる人の筆に稿けむ。小三金五郎が一期の奇譚を。いと長く綴りたるを。書肆のもと来て。補ひてよと。需めにしたがひ。をかましくも。いざかこれに筆を加へて。櫻木に壽くこととはなりぬ

文政拾四年辛卯孟陽

江戸 文盲短齋しるす



文盲短齋しるす



小三 假名文章娘節用 前編上卷

江戸 曲山人 補綴

ほつたん

太刀は大山石尊の。さげ物に納れば長刀はひやめしの。草履にその名を止めたり。弓は矢場のあねさんが。活業の助となれる静けき御代のことになん。斯波家の藩中に。假名家文字之進といへる者あり。二人の男子ありけるが兄は文之丞といひ。弟は文次郎と喚なして。兩人ともに文武の道を。常にはげみて勤めしが。兄文之丞はいつしかに。奥づとめの御側玉章といへる容貌よき女と人しれず。契りをこめてかたらひしが。日にまし互ひに思ひつりて。しのびくの密語に。玉章はいつか只ならぬ懐妊の身となりけるにぞ。此事今にもあらはれなば。とても添事なりがたしと思へば二人ひそかにかたらひ。ある夜館を忍び出。すしのしるべを便にして。難波をさしてのぼりつ。彼地此方とさまよひて。おもはしからぬ日を送れば。この地にをりても要なきことと。夫より皇都へおもむきて。三すぢ町のほとりにさゝやかなる家を借て。學文劔法の指南をしつ。月日をごにおくりしがもとよりその技に勝れたれば。わづかのうちに弟子の。あまた付て繁昌しければ。おのづから金銀の。融通もよければ。些づの金を人に貸などして。その利を取て不足なく。暮すほどに月満て妻はやすくと玉のごとき。男子を産出しければ。名を金五郎とよびなして。蝶よ花よとそだつるうち。満れば缺る世のならひ。妻は産後肥立ぬうへに。あしき風を引そへて。醫療手をつくすといへどもその験更になく。つひに無常の風にさそはれ。冥途の旅におもむきぬ文之丞はたよりに思ふ。

妻に別れて今さらに。かなしみやるかたなしといへども。いかんともすべきやうなければ。泣く野邊の送りをなし
て。跡ねんごろにとむらひけり。かよりしほどに幼児を。乳なくてはそだてがたしと。乳母をかへ養育させ只金五
郎を手の中の。玉のごとくにいとをしてみて。光陰の過をかぞへけり。こゝにまた珠數屋町に。古鐵買の六兵衛とて。
夫婦かすかにくらすものあり。年ごろ子の無りしかば。つねに是をふかくなげき。神佛にいのりしゆゑ。その信心の
通じたりけん。妻は今年四十歳にあまりて。はじめて女子を儲けしかば。夫婦のよろこび大かたならず。名さへいは
ふてお鶴と号。いつくしみそだつるうち妻はふたゝび妊身になりて。次の年また女子を産ぬ。しかるに今度は養生の
悪かりしにや四十のうへの。年子のこと故おのづから血心をとるへ循環せざるにや。悪血さへもをりかねて。あと腹
のしきりにかぶり。そのなやみの堪がたきと。心のつかれに養生かなはず。つひに空しくなりにけり。こゝにおいて
六兵衛は子なきを神や佛にいのり。二人まで子をまうけしに。今はた思ひがけもなく。妻は子を捨亡靈の。數に入ら
る身の當惑に。なげくより外なかりしを。近所の者にいさめられ。まづ亡骸は取納めても。をさまりかねし胸のうち
に。とやかくおもひつゞくれば貧しきくらしに男の手二ツいかゞして二人の子をば。そだてんやうもなかりしゆゑ。心
を鬼とも蛇ともなし。藪へなど子を捨んかと思ふまでにくるしみて。一日くらくらしけり。さるを假名屋文之丞は
つたへ聞くおのが身に。引くらべては捨置がたく。今ふ自由なくくらす故。當才の子を親しらずに。もらひうけて育
てなば。その親の手もすこしはかろく。なりもやせんと人づてに。この事をいひ入て。妹娘をもらひうけ。名をお
龜となづけまた。幾許の金を六兵衛におくり。姉なる娘をはぐくみ給へと。情ある深節に。六兵衛はいたくよろこ
び。むすめが行すふかく憑みこれより後めぐまれし。金を少くお鶴に添て。さる家へ里につかはし。あぢきなき
世をおくりけり。さればまた吾妻なる。假名屋が家には文之丞が。不義なして家出せしかは。文字之進は怒りつくや
みつ。にくからぬ件といへとも。世間のおもわく上への聞え。親の名を出す不孝の罪。うち捨てもおかれねば。これ

等の趣き主君へ達し。文之丞を勸當なし。弟文次郎に家督をゆづり。嫁を迎へて是に娶合せ。その身は隠居し名を
白翁と。あらためてくらすうち。文次郎夫婦の中に。一人の女兒を儲けけり。是につけても文字之進は文之丞のこと
をりふしは。何かにつけてうち案じ。おもひ出しつゝほのかにきくに。今は花洛に住なれて。男子持て不足なく。く
らすと人の風便ゆへ。案じの胸もやすまりて。ゆく／＼は文之丞が子を。文二郎が娘に娶合せ家をゆづらば血すぢも
絶すと心に思ひひたりけり

第一回

されば月日に關守なくて文之丞が。金子五郎は今年十七歳お龜は十五の春となりしが二人ともに天性の美男美女に
して華洛廣しといへどもたぐひまれなる容顔は梅と櫻の婀娜くらべおとらずまさぬ風情なり文之丞はこのとしごろ古
郷をはなれ遠き都に世をおくるそのうちも二人迄子をまうけ何ふ足なき身のうへにも十年あまり過しころ鎌くらの家
をぬけ出て父のところへ便さへ。ならばいとどなつかしく。子を持てしる親の恩。報じがたきをくちをしくおもふも
のから考へ見れば。主家の掟をやぶりつゝ。妻と不義して出奔せんかど。今にも侘のかなひなば。ふたゝび主家へ立
歸る。こともあらんとゆくすゑを。彼はおもひあはずにぞ。はやくより金五郎には。文學武術を教へしに。もとより
さがしきうまれゆゑ。一を聞て萬をみる。文武の才に長たれば。幾程もなく上達して。今ははや金五郎は。武士の道
くらからず。殊に和歌連俳茶の湯插花のたぐひまで人なみ／＼より勝れたる。よき壯士とはなりにけり。お龜もまた
世にめづらしき發明のうまれにて。文よみ歌よみ手ならふ道はさらなり物たち縫針の技藝にすぐれ。琴三味せんの調
へさへ。いとつしく何にまれ。女子の道にくらからずその生立もたのもしく。人もうらやむばかりなれば。文久
丞は何とぞして古郷の父に勘當わびて。子どもの顔を見せまほしと人を憑みてつく／＼と父白翁にわびたりける。鎌

倉には白翁も惣領の文之丞か身のいたづらから家出して。今は花洛に相應に文學武藝の師範しつ。不自由なくくらすうへに孫まで出来しと聞つるが。いかなるさまに生立や尋ねまほしとおもふをりから。人づてにて文之丞よりわび言をいひ入れれば。白翁はうれしきひとかたならねど。いつたん主君へ勘當と披露せし身をたやすくは。ゆるす事もならざればそのうち首尾を見つろろひ。君へねがひて出入をさせん。文通のみは苦しからず。又孫の金五郎は罪なき身ゆゑさいわひに。文次郎に男子なれば。迎ひをつかわしこなたへ引取。いく／＼は假名屋の家名を相續さするほどに。支度をとゝのへ待べし。と返事に委細を聞よりも。文之丞は大ひによるこび。わが身の出入はかなはずとも。悴を本家へつかはすは。このうへもなき事なりと。金五郎を近くまねき。鎌くらの事くはしくかたり。日あらず迎ひの來るをまちて。鎌くら表へくだるべしと聞て金五郎は今さらに。思ひがけなく本家を繼は。身の本まうといひながら。一人の親をのこしおき。そのうへ子どもの時よりして。行すへたがひに夫婦ぞと。胸におもひしお龜にも。わかれんことのこゝろ憂苦。いまだ枕はかはさねど。何かにこゝろおくをこもなくうちとけてにくからぬ。中なるものをうち捨て。行ことにやとさすがまだ。おほこそだちの心には。當惑するも理りなり。お龜もこの事聞しより。心細さの案じごと。とやせんかくやとおもふうち。鎌くらより金五郎を。迎への人の着しかば。今はわかれとなりけるかと。人目の關のしのび泣。ふさぐは女子の常ながら。いとどに胸もむすばれ。部屋に屏風を立まはし。衣引かつぎうち臥て。なみだのひまもなくばかり。をりから障子引あけて。立まはしたる屏風のはしを。折かへしてはいる金五郎「おかめけふはどふだ。やつぱり氣色がわるいのか。つこりにおかめは目をみひらき。ハイいろ／＼のことを案じますと。こゝろぼそくて氣がふさいでいつそ頭痛がいたします。金五郎は見てとりて。おふかた今度東の本家へおいらが別れてゆくものだから。それでふさぐといふのだからうマア。何はともかくも。けふは南であつたかいに。こんな立こめたり引かぶつてはなほのぼせてわるいからちつと庭でもながめな。おかめはやう／＼おき直りたまをさへてさしうつわく。金五郎

ウおかめ。つよく頭痛がするなら。なんぞ薬でもやらうか。おかめ「ハイありがたふござります。あんまり氣がふさいで。頭がおもくてなりませんから。今しがた實母散をのみましたヨ。金「そうか。あんまりつまらぬことをくよくよと思つて。ほんとうの病氣が出るとわりいから。今日はちやうど天氣はよし。芝居でも行て見ればいゝ。おかめ「いゝへわたくしは芝居も見たくはござりません。金「ハテこまつたものだ行て見ればいゝがのふ。團藏だの璃寛だの。國五郎なんぞが大ひやうばんで。それに東からのぼつて來てゐる路考の門弟の路之助が又新作のはやりうたを。舞臺てうたつて三絃の手があるか。いつ見てもまことに妙だヨ。おかめ「さやうでござりますと子。アノいつぞやあなたと御一所に浪花へまゐりましたとき。濱芝居で見ました評判のよい。紀伊國屋はどういたしました子。金「源之助か。今は東路へ歸つての。ます／＼評ばんがよ／＼つて。去年の春向町の芝居で。勘齋の狂言をしたが。近年にねへ大あたりでそれからなんでも當りつゞけて。町もやしきも紀の／＼と。べたいちめん／＼に女子供が。ひいきすること上がたまで。もつばらの評判よ。おかめ「そのひいきの多い紀の國屋にも。まさつたお方がまた東へおくだりあそばしたら。マアどんなでござりませう。金「紀の國やよりいゝ男とはそりやアどこの人だ。おかめ「どこのお人か御存じてありながら目もとから口元まで音羽やに紀の國屋を。一ツにしたよりよい御容貌と學文のけいこにお出なさる。みなさんが常々斷。さういつておほめなさいますよ。金「なんのこつたさつぱり解せねへ。おかめ「わかりませんか。あなたのことさ。トにつこりわらひ金「なにをいふかとおもつたら。おいらが顔の棚おろしか。いゝかげんにおひやるものだ。おかめ「アレほんとうでござりますよ。それだから私は。いちばいくらうに成まして。いろ／＼な事を案じますと。胸がいつぱいになりますよ。金「なんのこつたなおかしくもねへ。戯談はじやうだんだがほんにあんまり案じなさんな。迎ひと一處にあしたの朝。鎌くらへ立て行ても。落ついたら早速におめへをむかひによすからちつとのうちだ。待てゐなしかし未しどうは。親父がおめへとおいらをば。夫婦にするとかねての量見。なれど今までついしかに。親の目をしのんだり。なまめい

たこともしねへからそこがおめへの量見一ツでもしおいらに遠ざかつて、呼によすがが待どほなら。縁つく共どうなりと。それはマア勝手次第。おほかたモウ東へ行から。いやになつた時ぶんだらう。のふおかめいやか。かめいよへなんのいやでござりませう。心にもないことばかり。たとへどのやうなところでもあなたが呼でくださいますなら。私はうれしうござりますが。あなたも東へお出あそばしたら。あつまの女中は上品でまことに意氣だと申しますに。私のやうなものは。とてもモウお捨なさるはしれてをりますもの。末の事を考へますと。寐ても夜の目もあひませず。そのうへ實の父さんは。お顔さへ見ぬ其うちに。三年跡にお果なされ。跡に残るは姉さんひとり里に行てお出なされば。いっぞや逢て名告あひ。便になつたりなられたり。いたしませうと存じましたに。そのかひもなく里親に。だまされて身を河竹に。おしづめなさりしといふことゆゑ。今は杖にもはしらにも。力に思ふはおとつさんばかり。末を憑みしあなたにまでおもひがけないこん度のおわかれ。心ほそい身になりました。トはひつゝなみだをそでのごおもひやりつゝ、金なんのこつたな。そんなに末のすゑまでを。案じるから氣がふさぐ。なるほど兩しんにはやくわかれ姉さんにも生わかれては。こゝろほそいもつともたが。人間は老少不定。さだめないのが世のならひ。命ばかりは神佛の。力づくにもゆかぬのは。みな定まれる身の宿世。それをよく氣にしても約にもたぬことじやアねか。又たとへわかれに。遠くへだつて行ばとて。おめへにこの家をゆづりでもすると。せひ筆をとらねばならぬが。さういふ時はマアどうする心だ。おかめ「そりやアモウあなたがおつしやらずとも海より山より御恩の深いおとつさんのおつしやることを。そむくこゝろはござりませんが。この事ばかりはそむきます。たとへ妹背のおゆるしみをうけずとも。あなたをのけて余の人に。添ますこゝろはござりません。あなたが東へおくだりあそばして。問音信もござりませんと。わたくしはそのときはとも生きてはをりません。死ぬる心でござります。金馬鹿なことをいひな。それはほんの短氣といふもの死くれへなら何も苦勞をするにもあたらず。添たいとおもへばこそ。いろくに氣をも

むじやアねへか。ほんにわりいことはいはねへから。すこしのうち辛抱して。便りをするのを待てあな。コレサおかめ。なぜそんなに泣なされる。子供かなんそのやうに。わかれて一生あはぬといふことじやアなし。ちつと氣をしつかりもちな。れしかなしきやるせなく「あなたがそんなにことをわけて。やさしくおつしやつてくださるほど。猶かなしくなります考へて見れば見ますほど。しきりに心ほそくなりましてあなたが宿にお出あそばすうち。いつそ死てしまいたく成ました。ト金五郎の膝にとりつきな。金「エ、おめへもマア心のよわい。なんぞといふと死くと。譯もないその縁言マアよくものをつもつて見なこんなことをいふと年寄めくが今世の中が静だからよけれ昔の亂世の時に見ななほおいらのやうなちよろつかな者でも。武士の種だから軍のところへ。是非出なけりやアならぬへ。よし出れば敵の首を取るやら。こつちの首をとらるゝやら。二ツに一ツ命がけ親を捨て。戰場へ出るは武士のならひよむかしと今とくらべて見な。まことに樂なこの世の中そんな危い狂言もなく武士の身に取ては本意じやなければ實に今は極樂世界。こゝの道理を考へると。三年や五年遠ざかつて。苦にするほどのこともねへがそこがやつぱり自己勝手。十分でも不足におもはは。人情のあたりめへさのそれだからかならずとも。きなくおもはず時節を待たよ短氣を出したそのあとでは後悔してもはじまらねへから心を大きく持がいよ。トとしわかなれど金五郎がしきとばに「わか旦那さまへ。旦那さまがちよつと入らつしやいまして。トいふに金五郎はライノトおかめの部屋を出てゆく。父文之丞は一間のうちに。煙草くゆらし文よみる。金五郎はしとやかに。父の側へにかしこまる。文「ヲ、金五郎か。扱モウ鎌くらへ下るのも。明日なれば旅の調度を。落なく用意するがよいぞや。それにつけてくどくといひきかすまでもなけれど。獅子はわが子を谷へ投。其生立を見て安堵して手ばなすと。燒野の雉子夜の鶴。子ゆゑにまよふは親の常。鳥獸でさへそのやうなるを。況て人間は猶さらに。子を見ること親にしかず。譬高貴摺紳をはじめ稻刈漁どる下さま迄。子を思ふのは全じこと。もはやそちも十八なれば。案じるほどのことはないが。かういふては異なるものなれど。

人なみくより文武の道も。すぐれたといふではないがマアどのやうな人中へ出してまんなら恥かしくもなし。といふておのが智にほこり。藝に漫じて多くの人を。眼下に見くだしてはならぬぞや。又一ツには祖父さまを大事にかけ。われにかはりて孝行してくれ。二ツには弟文次郎は。養父といへども其方が爲には。いはずとした血すおの叔父ゆゑ。ずいぶんともに心にそむかず。これまた孝行せにやならぬぞ。また鎌からは繁華の土地ゆゑ人氣が都と違ふからよく風俗をのみこめよ。仲間の付あひそのほかも。時宜によつてはのつひきならねど。物事萬うちばにして花にさそはれ月にうかれて女郎買なども三度に一度は。はづされなけりやア行がよいはさ。さりながら傾城傾國の譬もあれば。かならずふかくはまらぬやう。心にこゝろをみたしちやならぬぞ。忠孝に心を勵まば。その身の末もあしからねどとかくに酒色は染りやすく。むかしより名將勇士も。色に迷ひ酒に溺れて。大切の身をほろぼすためしも。まあることゆゑこの道はふかくはまらずつゝしめよ。こゝが常言の恥をいはねば理がしれぬといふ通り。はやい例はこのおれが。若氣のいたりといひながら。無分別な心から親を捨古郷をはなれ。家出なしてしばしがうちに住居もさだめずさまようたが。親の身では不孝な子でも。にくし罰あたれとは思はぬにやこゝに住ひを定めてから。仕合と不自由なく暑さ寒さの難義もせず。人なみく世をおくる。今このくらしも浪の。日かげ者の望みはなけれど。不孝の罪なりやどのやうに。今さら悔てもあとへはかへらず。サこゝの道理をよく辨へて。女色その外あしきことは。遠ざかるやうにするがよい。今度そちがわが本家へもらはれゆきて御主君へ。つかゆることはとめてたく。我身のよろこびこのうへなし。又お龜はちいさい時より。そちにこの家を譲りなば娶合して夫婦にしやうと。おもふては居たれども。本家へゆかば何として。わが手でそだてし娘でも氏素性といひ弟の手まへ。いやしい娘は妻にひなるまい。殊にかためのかづきを。させたといふ中ではなし。そちを彼地へ下したうへ。おかめには婿取てこの家をゆづらばわれはまた。ほかにたのしみのぞみもなければ。かならずとも今この教訓わすれてはならぬぞやとわが身のこと

まじへてさす言の葉の。はじめをはりを金五郎つぶさに聞て胸にたゞみ。ありがた泪とわかれのなみだつ目のかめ金だん／＼と事をわけて。お心ふかき御教訓。きつと骨身にこたへまして。ありがたふござります。もとよりおろかなわたくしなれど。こゝろのおよびますたけは忠孝二ツをはげみます。あなたもずいぶんお身のうへを。御大切に御養生なされ。おすこやかにおくらしなされてくださりまし。トしとやかなる。又イヤそれはかくべつ。おかめもそちとおなじやうに。ちひさいときから共にそだちて。兄弟同様にくらしたから。今わかるゝもかなしからが。これも定まる約束事無分別の出ぬやうに。よくいとまごひしたがよいト粹もあまいもかみわけた。ことばをしほに金五郎は。父の前を退きておのが部屋へ入り。翌日出立のことなれば。何くれ彼くれそれ／＼に旅の準備を落もなく。とゝのへて夕餉をしまひ。やうじをつかひながらおかめの部屋へそつと來り。金どうだお龜ちつとは氣色が直つたか。おかめハインんだかどうもふさぎつゞけて。やつぱり頭痛がいたします。アあなたはどうでもあしたの朝。お立あそばすのでござりますかへ。金さうさモウ迎が來て居るから。どうものばされもしねへのさそれだからおめへの顔を見るのも今夜かぎりゆゑ。わすれぬため見をさめに。能見て置ふとおもつて來たよトわらひながら顔を見れば。おかめははづかしげにかほをあかめ。おかめまたそんな虚はつかり。それはほんの氣やすめて御ござりませう。金さうさいづれおいらのいふことは虚さのふ。どうでモウ明日から。居ねへのだから。ほんとうにやアしねへはづだ。さつきおとつさんがいひなすつたことを。おめへも大かた聞たらうが。おいらが行たその跡ではおかめに才子をとつて。やつてこの家をゆづるとおつしやつたヨ。のふ。もしその聲が色男なら。首つたけはまりこんで。おいらのやうなものはいしるむきでつばきだらう。おかめ「なんのマアもつたない夢にもそんなこゝろは持ません。たとへ業平さんが生れかはつてまゐりましてもわたくしはあなたに見かへるこゝろは爪の垢ほどもござりませんヨ。金いゝかげんな事をいふ。見かへるこゝろは富士の山ほどあるだらう。おかめ「モウ／＼あなたはなぜそのやうにわたくしが申すことを。おうたが

ひあそばしますへ、金うたぐりやアしねへけれど。虚らしいひやうだから。それが信實まことならかならず短氣を出さねへで。便りをするのを待てゐなよト脊をさすればお龜はうれしく、おかめ、わたくしはどのやうにも待てる氣でござりますから。どふぞきつとお便りを早くなすつてくだざりまし。トたがひにつきぬ名残のなみだ。いとしかは、いもまだしらぬ。明のからすのなくくも、おかめは金五郎が支度する。かたへに持ものなど取そろへるうち。用意となくくと、のひしかば。いざ出立とさよめくを。金五郎はさすがにも跡に心の残れども、詮かたなければ氣をとりなほし。父とおかめにわかれをつけて。迎ひの者ともろ共に心づよくも旅立を。今が名残と文之丞。おかめも共に門邊まで。おくり出つゝ金五郎の。蔭見ゆるまで見おくれれば。あなたも見かへる別れの泪。たがひに胸の憂也露にかくれて姿は見えずなりぬ。

小ざん 假名文章娘節用 前編上巻終

金五郎 假名文章娘節用 前編中巻

江戸 曲 山 人 補 綴

第二回

在然程に。お龜は金五郎が鎌倉へくだりし後は。いと心もむすほれて。とかく浮立事もなく。今日や便のありもやせん。あすや音信あらんかと。あだに過日を指をりかぞへ。一日くくらすうち。はやくも半年あまりも過て彌生の末に成にけり。されどいかなる事にやありけん。金五郎の方より音信の文さへ來ねばひとしほに。おかめはおもひいやまして。ほのかに聞ば鎌倉にはお雪といへる娘ありて。ゆくくは金五郎に娶合する約束なるよし。きいて猶さら胸つぶれ。さうとはしらずうか／＼と。たよりの文をたのしみに待し心のおろかさよ。殊に妹脊のかたらひも。せぬ中なればなかくに。いつの世にかは添事ならず。といふて今さらにそほかの。男持氣はさら／＼なく。今は日ごろのたのしみの。甲斐さへ泣てくらすのかと。おもへは千々に胸くるしくあるにもあらぬせつなさを。父文之丞にもかたられずひとり心をいためしが、只その事のみおもふものから。うつら／＼と床病の朝な夕なの食事さへ。ろく／＼すゝまずうち臥ぬれど元より妬む心なければ。あぢきなき世とうちかこち。一日二日とおくれども。夜の目もあはさて案じ事。行すへこしかたおもふてみれば。よく／＼幸なきうまれにて。親にはおくれ姉にはわかれ。たよしさへなき身の因果。こゝろの願ひもかなはねば。生ながらへても樂からず。いつそ淵川へ身をしづめて。果なんことこそましならめと。戀にこゝろもみだれ髪。なであぐる氣もなかくに。なきしづみたる閨の戸を。ふけゆく夜半の風

ア聲色だ 目八「エヘン〜。エヘンノヘンツ。なんのこつた。へば、ハテやばなことを聞給ふな。よく考て御らんじろ。すなはち咳が三十らうサの 醉狂、おきやアがれアハ、ハ、ハ、ハ、目八「モシ旦那妙なことがござへます。まことにどふもどふもまことに。實に妙〜妙でござへす。 醉、なんだやかましい何をいふのだ 目八「イエサあなたがまことにどうも 醉、おれがどふした。女が惚るでうらやましいか 目八「いかなこつても御挨拶オホ、ハ、ハ、ハ、ツ。エモシおまへさんはお目が二ツあつてよく見えます子。實にうらめしいアこのこつた 醉、ハ、ハ、ハ、何をいふかとおもつたら足下は目が一ツだつての。をしい男だがあつたら玉に疵だのふ。へば、青さやうさねへ。モシ旦那。よくごらうじまし。顔の丸みあんばい肉合なんどは。てもなく珊瑚珠の緒メの再来。モシ鼻筋が横のはうへぐつと通りて。眉毛がによつくりとなめくじのやうで。鼻は獅子でもねへが赤くむくれて口は錢湯のざくろ口だが。流し男の給金が安いかして。齒は一向にみがきあげず。匂ひのあしきこといはんかたなし。譬ていはどてん〜むき〜の。寄合世帯といふ顔がまへサ。ア。なげかはしいが愛敬のねへ。女縁のなさそさな御面相だぞ 目八「こ〜貴さまは何の遺恨があつて。おれが顔の棚おろしをするのだ。隣りの實をかぞへるやうに。人の疝氣を頭痛に病むとはよつほどおめへも苦勞性だぞ。ア、とかく男のいゝものは。そねまれるのでうるせえぞ。オホン〜。へば、ヘンおつうとまりたがるやつだの。コウ戯談はおどけたが足下暫間をさらけやめねへ。いゝ金まうけの筋があるぜ。九月になると 目八「なぜ〜。へば、よく考へて見さつし容貌といひ口めへと言 目八「ハテナ富てもとるといふことかノ。へば、ヘン押の強へ神明の祭りだからよ。目八「ナニ〜神明のまつりフウめつち生姜か。ヤいま〜しいことをぬかしやがる。コレそんなに難非を付けてわるくいつても。是ても女にやア憎がられねへ男だよ。へば、そのかはりかはいがられたこともあるめへ。その顔ぢやア。目八「そねめ〜顔にやまよはぬ姿にやほれぬと。へば、フウたつたひとつの目に惚るフハ、ハ、ハ、ハ、おたこ、ヲヤ〜。目八さん今日はまことに閉口だねへ。 目八「ナニサ〜。こんな理も非も辨へねえ。田夫野人と論は無益だ。へば、ナ

ニおれが田夫野人なら。足下は牛蒡にんじんだ。みな〜ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、目八「時にモシ金さんとおつしやいませした子ぢやいと一ツけんじ。天皇秋の田のといたしませう。金五郎「こりやア一ツお押へだ。目八「ナル。そこもあれば蓋もあるか。モシ旦那實に妙といふことがござへますトいふ來歴は。モシ千年屋のか〜への子で。このごろまで引込てをりましたのが。けふ突出しの眞名鶴といつて。ぶつつけ、のお職さネ。その容貌といつば。天人は羽衣をかぶり。辨天さまは冠を落し。拙者がお宿の山の神も。尻をまくつてにげ出すばかり。へば、ヘンがうぎに山の神をあがめたの。目八「大きにス。エ、とまづこの天盃はそちらの旦那へさ〜げて置きのト。そこでモシ旦那。今にモウこ〜へ眞名鶴さんがめへりますからよくお拜みなせへ。實にびつくりおいたちこ。ねずみこつこは千話の初まり。とけつこつこは雞よ。はとつぽつぽにや豆をやれすてつぽうには油断をするな。ふてへやつならぶちめせ。じたいわれらは都のうまれ。色にそやされこんな暫間になられたア。ハアどんどこん。どんどこん。ツア、せつねえいきがはずむアツハツハ、ハ、ハ、ハ、醉狂「エ、やかましいよくしやべるぞ。そんなにどなると天井の煤が神事舞をして。疊の芥がをどり出すだらう。目八「違へござせん。酒吞猪口がきやりをいつて。銚子の引物を引出すと。吸物膳の箸がつつ立て。硯ぶたのくわいをおつちらかしやせう。とんだ化物屋しきのやうだ。アハハ、ハ、旦那おどけはのけて。モシ噂をすれば影ぢやねへ。正眞正銘本家元祖まじりなし。外八文字でしよなり〜。アレ〜あの挑灯がそて御せへます。 醉、ほんにのう金さんおめへもよく目利をして。もし無疵で氣に入つたら今夜の花にしなざるがい。金五郎「ちげへねえそんならおまへともやいにしませう。トおどけをいふうち千年のつき出し女郎まな鶴は新造かむろをひきつれてゆ〜。 おかめの姿に生うつし。もしやそれかとつく〜見れば劣りはせねどどこやらが。違ふ様には思はれても。目もと口もと愛敬ある。品かたちのよく似たれば。胃とどろきて心まどひわが身の迷ひか酔たるゆゑかと。しげし見とれて詞なきを。見てとる 醉、間醉狂も金五郎のかたをた。 醉、コウ金さんおまへはこのごろひどく物案じなやうすだから。いろ〜にす〜めても女郎

もげいしやも地者もいやだと。だつ子がすねるやうに。いやだ〜といひなすつたが。なんと今の花魁はどうだエ
 金「さうさ子なかく美しいネ 酔「よつほどさそふ水あらばたネ 金「ナニさういふりくつてもねえけれど酔「けれどが
 をかしい。あながち気がないでもあるめへ金「ハ、ハ、ハ、マアなんでもいふから。わたしやアあの子にきめよう 酔「そ
 れがい。それがいふそんならおれも行ってたれぞ見立やう ト二人ともちとせやへをどり お定まりの 盃事も程よくきり
 あげ床へまはれば藝者たいこは御機げんよふ トみなくどやど 金五郎は初會の事ゆへ羽織は枕元にぬぎ捨て。横にな
 つて寐てゐるところへ合方の眞名づるは。藍御納戸の唐縮緬裾に光りんのつるの染出し緋縮緬の裏襟つきし。ひとへ
 ものについたけのしゅばん。黒の紋天にひのころふくりんの腹あはせの帯をだらしなくむすび鼻がみを持ちそへてつ
 まをとり たりかほをさしのぞいてよりかゝり 眞名鶴もしへモウおやすみなんしたかへ。なぜ起てゐておくんなんせぬへ
 サア目をおさましなんし トゆすりおこせば金五郎はわ 金「ヲヤおいらんいつの間にマア來なすつたくるなら來ると前びろ
 にちよつと人でもよこしなさればいゝ出しぬけに起されちやア蟲が動じるから まなづる「ヲヤ〜いやておすよ金さ
 うだらうネいづれわたしのやうなへうたんは。可愛がられぬへのはあたりめへさ まなづる「アレさうぢやアおざりい
 せん。お氣にさはつたらおゆるしなんし トたばこをすひつけて出す 「これは御馳走をしげく見てゐる 金「ヲヤなんさんすへ。ぬ
 しやアなぜそんなに顔ばかり見なんすへ。ぬしにそんなに見なんすと。恥かしくなりいすヨ トにつこり 金「ヲヤま
 ことにふ思議どうも生うつしこんなにもよく似るものか トわれをわすれて まなづる「ヲヤなんでおすへ似いたとはそりや
 アたれさんに似いたへトにつこりわらふ 金「ソレその笑ふかほつきから物こし恰好似たとはおるか瓜を二ツにわらずと
 その儘 まなづる「ヲホ、ハ、ばからしうおすヨ似たにたとおつせへすが。誰に似申したのか。はなしてお聞かせなんし
 な 金「はなしませう〜。その似たといふ子細はマア聞いておくれかういふ譯さ。わたしが幼い時分から行すゑかけ
 ていひかはし女房にせうと思つた女にサ。ほんに野暮な野郎だとわらつてくんなさんな まなづる「なんのマア笑いんせ

うそんならモウぬしは御新造さんかおざりますネ 金「ナニサその女はモウとつくに死んでしまつたのサ っる「うそ
 そ。そんなにお隠しなんせずとよいぢやアおつせんかへ 金「うそぢやアなしサ。實にしんでしまつたよ っる「ほんざ
 んすかえ。ソリヤアマアさぞお力がお落なんしたらうネ譬また虚いつはりにも主に思はれてお出なんした。そのお方
 に似たと思つておくんすりや。わたくしが身に取しちやア。しんじつうれしうおざりいますヨ 金「なんのうれし
 いことはありやすめえ。そりやアほんのつとめの手くだ實は七りけつばいだらう っる「ヲヤ勿體ないなんていつはり
 を申しせう。初會からこんなことを申しいたら。おさげすみなんせうがぬしのためなら都合しても。呼びまうした
 うおざりいすが。ぬしやア大かた通り一遍で。もうお出なんすこつちやアおざりいすめへ 金「そりやアみんなこつち
 ていふこと一河の流れ一樹の蔭。他生の縁があればこそ。かうしてわざ〜來るといふもの。おめへがさういふこゝ
 ろならわたしも根かぎり通ふ氣だが。いゝ時分に突出しちやア恨みだよ っる「どうしてマア。ぬしを突出しいしたら。
 それこそ罰があたりいせう 金「それはそふと。たとへにも。佗人の空似といふけれど。どふも佗人とはおもはれえが
 おめへはマアいつたいどこの生れか。なじみがひに咄してきかせな っる「そりやぬしのことざんすから。おはなし
 申しもいたしいせうが。身のうへをあかしいしたら。ぬしに愛相をつかされいせう 金「そうおもふも 尤もだが。い
 づれこの廓へ身を沈めるには仕合がよくつて來たものはねへから。なに耻といふではなし咄してきかせてもいゝぢや
 アねへか っる「ほんにそれもそうでおすネ。そんならおはなし申しせう。アノわたくしはまことに〜遠くの國で
 おざりいすよ 金「ハテネそれぢやア蝦夷松前か。紅毛の果からでも來たのかへ っる「ヲホ、ハ、ばからしうおすヨ
 アノ上方でおざりいすからさ 金「フウアノ上方ハテナほんとうにか っる「アイそれだから遠くだと申しすのさ 金「な
 んの上方の生れなら遠くなくがあるものか。ハテ縁といふものはおつなものだネ。わたしもやつぱり上方せへろく
 さ っる「ヲヤ虚をおつきなんし。なんのマアぬしなんぞが上方だとおつせへしても。上方にやアぬしのやうないきな

おかたはおざりいせんよ。金さうざわたしの様な不意氣な野郎はどこの國にあるものか。そしておめへは上方のもし
 數珠屋町の邊ぢやアねへか。つるエほんにさうでおざりいすヨよくぬしは知つてお出なんすネその數珠屋町の六兵衛
 と申しいすまづしい者のむすめ。金ヤ、そんならアノ數珠屋町の古鐵貫の六兵衛どの、むすめであつたかアノおめへ
 がトあきれてはばしとはなしわが身のうへはおざなき時より。母にわかれ家まづしきゆゑ。去るかたへ里にゆきて。やうや
 成人なしたるところ。里親にだまされて過し年この大磯の苦界にしづみ。父六兵衛は夫より先に。亡靈の數に入り
 たつた一人の妹は。藥の上から情ある。おかたにもらはれ育つと聞けど。つひに一度逢ひもせず。便りなき身はつ
 ねくから。妹ばかりがゆくく。力とおもへどかひなきつとめ。まめで居るやらどうしたやらと。案じるの
 みと身の素生をかたるをきいて。金五郎は驚くことひとかたならず。我こそそなたが妹の親の。文之丞が男子なる
 が。をさなき時より妹おかめは。吾身と共に人となりていまだ枕はかはさねども。行末大夫の約束して。仲よくく
 らすそのうちに。われは此地の叔父の家へ。もらはれ來りしその後にて。おかめは家出し果たるにや。行方の知れぬ
 その處に。今また思ひがけなくも。姉のおん身にめぐりて。今宵名のりあふといふも。やつぱりつながる血すぢ
 の糸。あやしきえにしなりけりと。いちぶしじうを物語れば。ますく駭く眞名鶴は便りにせんと樂しみ待し。只一
 人の妹まで。世になき人と聞かからにかなしさいとゞいやまさり。しばし泪にくれにけり。かゝるえにしの淺から
 ぬ。申なればなほさまへに。身の上の事かたりあかしぬ。されどもたがひに一ツに〇ず。一旦金五郎も妹お龜に
 女夫の約束せしことなれば。今さらその血すぢの姉が流れの身とて枕かはすは。さすがにうしろめたくおもへば眞
 名鶴もまたその心ゆる。すいた男とにくからねど。帯紐脱ては死したる妹の供養にならずと心につし。みやら
 しきことさへ言す。さりながら金五郎もこのまゝにもふり捨られねば。是より常の客のごとく。をりく眞名鶴の處
 へ遷へど。決して枕をかはずことなく。酒などのみでは愛をかたりぬ。かくてその月もくれ八月のはじめになりける

に。例のごとく思ひく。俄狂言をどりなどさまへあるその中に。頼儀やといふ茶屋の今度かへへの藝者の小
 三。品かたちといひとりなりまで。五町にまねなる容貌ゆる。淺間のをどりにこの小三を傾城奥州に仕立。衣裝着つ
 けも美をつくし。淨瑠璃は登見本阿輪太夫にて。人の耳目をおどろかすをどりゆゑ。廊中での大評判。をりふし金五
 郎は。待宵の月をながめつ。俄を見物なすべしと例のごとく守田屋の二階にて。眞名鶴と共にさけくみかはし。今
 や來ると待あるところへ。程なく來る淺間の踊り。節おもしろき太夫の上るりあさい心としら糸の染てくやしきなれ
 衣ありしながらの一ツまへ小づも揃へてしどけなく風に柳のふくまゝにまかせはづのつとめちとていやな客にも
 比翼ごと思ふ山鳥のトかたる文句につれて踊る小さんを。金五郎何心なく。見ればふしぎやすぎし頃家出して死したる
 おかめに。寸分違はぬ顔かたち。これは不思議とまたきもせず。見れば見るほど違はねば是もわが身の迷ひかと思
 ひ直して見るもの。外の女と思はれねば。もしや浮氣なこゝろを出し男をこしらへこの廊へ。にげて來てあること
 にやと。まはり氣すれば腹立しく。ざりとて人に間も異なるもの。とつくりやうすを見きはめんと。そしらぬふりにて見
 てゐれば。幫間のへぼ吉見とれつ。へぼイヨく濱の本店。小さん大明神さまく。外には決してござへせん
 三千世界にたつた一人り。目八イヤ有がたし妙でござへす。濱むらや丸むき頼儀屋の大黒柱。ありかたの天上め。
 咲屋姫の再來か。三國一の無類く。金たいそふほめるのふ。賄賂でももらやアしねへか。目八モシ旦那賄賂どころ
 かけふもきのふも昨日も今日も文玉章の數く。は。ヤモシあんなうつゝい美婦人がつけ文をするのでのぼせやすのぞ
 女げいしやおとわ「ヲヤ目八さんきついつたネ。十九文やの見せさきのやうに。うぬほれかゞみが澤山だヨヲホ、
 目八へんやつかましい妬なく。おとわぼうは氣めへはいが。とかく妬のでおそれるのツ。おとわ「ヲヤよしてお
 れおまへのおかみさんとはちがふによモシ旦那アノ小三さんはネ。上がたからこのごろまゐりましたさふでござい
 ますが。よく早くのみ込まましたぢやアございませんか。金さふかとんだ遠くから賣れて來たの。大かた男と欠落ても

して。其男にうられたのだらう。目八、旦那きつもの。おめへの判談の通り。男とはるゝにげて来たがその男にたぶらかされて。泥水へ沈んだのでござへますツサ。まなづる「ヲヤ」アノ子がかへ。どふもさういふやうすには見えせんねへ。もしへさうぢやアおつせんかへ。金、おいらんはさういふけれど。そこが譬の小袋と小娘油断のならねへ世の中さの。へば、ナニ／＼旦那。さういふ譯ぢやアござへませんサわたくしがこのあいだ額重へめつた時。よく氣をつけて見ましたが。それは／＼起居ふるまひの物しづやかさ音聲はさはやかにして。鶯のさへづるごとく多辯でなくはすはでなく意氣でしやんとして程がよく。鴨川の水を産湯あびて。京おしろいをぬかぶくろに入れて。みがきあげた眞の美女さネ。庄吉出きたりて。モシ旦那額重の小さんをこらうじましたか。金、フウなんだかろく／＼見なんだが。よつぽと美婦人ださうだの。馬さやうでございます。先此ごろでの藝者だと申すまい。金、篋をかへました。トとり／＼ひそのうちも金五郎アノ小さんこそ面ざしといひ。上がたから来たといへば。おかめにも相違はあるまじ。眞名鶴にもうはむねに手をおき。アノ小さんこそ面ざしといひ。上がたから来たといへば。おかめにも相違はあるまじ。眞名鶴にもうち明て。やうすを聞んと思ひしが。なま中あからさまに語りても。健て彼してゐるからは。心がはりて男のために身をしづめしぞはかりがたし。とさま／＼に思案して。今宵は去りがたき用ありとて。そこ／＼に座しきもきりあげ。眞名鶴に別れて大門を出しが。忽ち又取つてかへし。ひそやかに額俵屋重兵衛の處へゆき彼小さんに口をかけて。二かいへあがり酒のみながら今や來ると待つところに程なく小さんは俄をしまひ。うかぬ顔にて何氣なく。二階のはしごとんとんと。上り來りて金五郎の。そばへ立寄顔見合せハツとばかりに驚きあはて立んとするを金五郎は。目をつりあげ。「コウ小さんとやらなぞ逃る。氣障な客だからさに入らぬへか。きざならきざでいゝけれど。ものもいはずにしらぬふりは。見わすれたのか見くびつたかよもやわすれはしめへがの。未練が残つた來たのじやアねへ。聞くとあるから下にゐる。トいはれて小さんはむねにくきなんといらへんことばもなぐんばく。コレあいさつしねへか。面目ねへか。エ、そのさまはマア誰ゆるだ。定めしはかはい、男のために。心がらのこのつとめ。敷よく物をつもつて見るよ。犬猫でもそれ相應に。

恩といふことをしつてゐるぞ。それになんだ己の顔を踏みつけにするはおろかな事。わらの上から育られた。産の親より恩の深い。養親の情をわすれ恩を仇の犬畜生。ぎりある親の名をけがし。耻をはぢとも思はぬ狸め。よくマア面もかぶらずに。のけ／＼と出てうせたナ。いかに遠路をへだつるとも。多くの人のいりこむ廊。この鎌くらにもおれが親父の文武の弟子はいくらかもあれば。この街へもみないりこむはそれに面を合しても。耻ぢやアあるめへ耻ぢもなからう。さういふ事とはつゆしらず。親父は直なこゝろから。神かくしにでもなつたのか。又は身をなげて死んだかと心を盡して尋ねさせ。うらなひ八卦御圍にも生死の程もわからぬから。家出した日を忌日として。佛事供養も懇にする。くはしい書狀がきたゆゑに。こどもの時より一ツに育ちし。馴染がひに朝な夕な。念佛申てやらふとおもへど。今は養子の身の上なれば。両親の前へも遠慮がちで心にはまかせねど。合間を見ては回向して抹香くさい佛いぢりも。萬一たつしやでゐるならば。身の祈禱にもならふかと。心づくしに引かへて。生根のくさつた恩しらす。大切な親をふり捨て。この土地へ來て泥水活業。ヲ、貞女だ節義ものだ。髪のかざりの櫛笄。はてな衣装にうは氣なとりなり。長唄豊後はやり唄や。一中ぶしをうなつたり是見よかしに踊ををどつて。客のきげんをとることゆゑ人も迷はふ惚もしやう。悪性ものゝ天上め。モウ／＼あいそのつかしをさめた顔を見るのもいま／＼しい。ものをいふのも是ぎりだから。勝手次第に浮氣をしをれ。に只なきしづみたりしが。モ大事とあはて。取付。小三、サ、、、みな御尤でござりますが。マア／＼待ってくださいまし。くはしい様子を御ぞんじないからお腹をお立あそばすも。すこしも御無理はござりませんが是にはいろ／＼ふかい譯が。金、ヲ、譯もあらふし義理もあらう。けれどもそりやア聞耳やもたねへ。エ、いけふさけたはなさねへか。小三、いゝへはなしはいたしません。言がひのない心から思ひもよらぬおうたがひ。死のふと覺悟極めしは。今日の今まで日にいくたびやつぱり死なれぬ因果どふなりとして今一度あなたのおかほを見たうへにと。あまたの人の入りこむこの花街。そればかりをたのしみにつらひ苦界に身をしづめて。恥や人めに

氣もつかず、金エ、やかましいよしにしるどど一の文句めいた。そんなせりふはをかしくねへ。流行言に道理をつけたり間に合の口ぼこでも。モウその手ぢやアばかされねへは。小三さやうではござりませうがどふぞ情とおぼしめしたつた一言申すことをお聞なすつてくださいませ。そのうへにてはともかくも殺してなりとお腹いせ。御勝手しだいになされましト身をなげてすがりとめ。なみだながらにわびるにぞ。金五郎もさすがまた心づよくはいふものよ。にくからぬ小三のことゆゑ。すげなく立ても歸られねば。袖ふりはらひ身をそむけ。銚子の酒を手酌にして。茶わんにうけてぐいと呑み。手まくらをして寐ころびゐる。

小さん 假名文章娘節用 前編中巻終

金五郎 假名文章娘節用 前編下巻

江戸 曲 山 人 補綴

第三回

當下小三は胸なでおろし。泪を袖にぬぐひつゝ。金五郎の側へさしより。小三今さら實を申ましても。一旦お疑ひを受ましたれば。誠とは思し召まいがあなたにお別れ申てより。一日片時わすれませず。泣てはあかし哭てはくらし。いつそかなしい日をおくるも。やがて東へ落ついたら。呼によこすとおつしやつた。そのおことばを力にして。今日か明日かと指をりてまてば一日も十日のおもひ。明ても暮てもお便なく。一ト月たち二ヶ月過三月四月と日は立てども。風のたよりのお文さへ。ないてくらしてゐるうちに。この春の彌生のころ。日さへわすれはいたしません。上の八日の夜もふけて。みな家内は寐しづまつても。わたくしばかり目も合す。こしかた行すぞどうかうと。思ひまはせばいとどしく。たよりのなき身にあなたにまで捨られては世にたのみなく。いつそ死なふか果やうかと案じすごしてをります折から閨の戸とん／＼うちたゞき。小さん／＼とあなたのおこゑ。さてはと嬉しく戸をあけて見ればなんにも眞の闇これ心まよひかと。また寐ますると又とん／＼小さん／＼とよぶこゑの。三度四たびときこゆるゆゑまた出で見れば物もなしわれとわが身で合點もゆかず。途方にくるれば寺／＼にひびく夜中の鐘の音の。あはれ無常を告るか。ながらへがたく胸せまり。物うき月日を送りますもの。心ぐるしく苦患になり。いつそ死んだかましてあらふとおもへばしきりにぞく／＼と首すぢもとから身の毛たち死ねよ／＼と死神の。ついて死ぬのをすゝめますのか

立てもゐても落つかずわれをわすれてぶら／＼と家をぬけ出はしりましたが。その後の事はさつぱりしらすどうして身を投しやら。加茂河へながれ着たを近所のものに引上られ。息ふき返して見ましたところが。顔も見しらぬこい男が。ぜげんとやら人かひとやらいふ。男とふたりでいろ／＼なあたいやらしことをいふて。〇〇〇〇るかいふと聞かど。いはれてこはさおそろしさ。いろ／＼にわび言してもこはい目ばかりいたしまして。聞入れのない無理非道。といふて身をけがすくらひなら。舌を喰てなと果ませうと存じましたが身を投てさへ助るものを。まだ命の盡ぬことなら。どうぞして東へくだり。あなたのお顔をもう一度。見ましたうへで死たいものと。おもふた心の通じましたか。その悪棍がいふことときかすは遠い大磯へ賣こかし。金にするとやら申ますゆゑ。とても運わるく死おくれ。悪者の手にとらへられては。おとつさんのところへ直すなほには返すこともありません。どうて憂目を見る位なら。大磯の廓は朝暮に。人の入りこむところといへば。そこへ身を沈めたなら。あなたにめぐり逢はれふかとはかないことを便りにして。御恩のふかいおとつさんを。お見棄申す心はなけれど。心一ツに詮かたなく。とう／＼この額俵やへ。歌妓にうられてまゐりましたが。おもひもよらずたつた今。あなたにお目にかゝりましてあまりのことのうれしさに。ものさへいはずに立ましたは私。が前後の考へなく。不調法でござりますから。おゆるしなされてくださいまし。殊にあなたに逢たいばかりに。覺期いたしてこの苦界へ身を沈めは沈めましたが。今さらお目にかゝりますとまことに身のほどがはづかしく。消てなくなりたふござりますとふて大切のおとつさんを捨。道ならぬことに身を墮し御苦勞かけてあなたには。御憎しみをうけたこの身いつまでながらへをられませう。どふぞこの世の思ひ出には。今までのおうたがひをおはらしなされてくださりまし。トレウなみだのうるみごゑにひとのきこえをはかりてわびること。かくまでわか身をふかく思ふてこの泥水に身をしづめても。蓮に似たる心の潔白。苦勞さするもわれゆへか。不便のものやと心にはおもへど野の藪なれば。そのまゝ心もをれかねて。返事もせず空眼。こゝろはなほさきより。もしあなたは是ほど

まで申すのにおうたがひがはれませぬか。エ。金五郎さんへ。どふぞ御堪忍あそばして。お心を直してくださりまし。もしおうたがひがはれましたら。たつた一言いつものやうに堪忍するとやさしいお詞。お聞せなすつてくださりましよ。トちがねあらはすむすめ氣の金五郎にと。こゝろづきで涙をばらひあたり見まはし金五郎の側へに置たる指添を音せぬやうにそろりと抜を。見るより金五郎はねおきて。その手をしつか。金コレ何をするあぶねへは人おどしの双物三昧が。トいふかほつくり。小さん、エ、お情ないそのおことば女子だてらに人おどしのはい双物が持れませうか。そりやあんまりでござりますなんぼあなたが男でもお情ないお胸欲でござりませぬ。是ほど事をわけて。お詫言を申すにたつた一言のおへんじもなく。しばらくお目にかゝらぬとて。そんなにもマアわたくしがにくくておいやになりましたか。夫りやあなたでもありません。たとへ女夫のかためはせずとも一旦あなたのお口から。戯談におつしやつたかは存じませぬが。行すゑかけて女房にするの。二年や三年遠ざかつて。かはる心はないこと。短氣を出さずに便りをまてのと。人ばつかりを嬉しからせて。わづか半年あまりのあひだに。左様お心の變りますはあんまりきこゑぬあなたのお心。どうてそのやうにおきらひなされば。なにを樂しみに今日が日からむだに命をながらへませう。わたくしはなき後でせめて一遍の御回向をと。申た處がおいやの私。とてもそれかなひますまいこれみんな約束ごと。いたしかたもござりませぬ。トゆだんを見すましましたぬきかけ。金はやまつたことして後悔するな。それほどにふかく思つてゐるなら生ながらへて後の世まで。人の物わらひにならぬやうに。にがりし名をもすゝぎあげ生わかれた眞身の姉に。めぐりあふて名告あひ。古郷に残したわが親父に。孝行せうとは思はぬか。殊にそなたの身のうへは。此家へ賣れて来たことゆゑ。我ものならぬ主人の骸なりや今こゝで死て見ると。主人も難儀。このおれものがれぬ申て難儀をするは。死は一旦にしてなし易く生はかたしといふところへ心づかぬかコレ小さん。小三、エ、そんならあなたおうたがひがはれましたと申しますのか。そりやほんとうで御座りますか。金ウソヨなに虚をつくものか。小三、エ、うれ

しうござります。それでちつと氣が落付ました。トながひに心はとけながら金五郎も男のいちいひつけて唄妓暫間をよびにやると。ほどなくみなくどやくと来る。目八「へい旦那その後は一別已來とんと見參つかまつりませぬ。金「ほんに目八公。さつき逢たまんまだつけ。目八「ホイさうでありましたつけか。目八「大しくじり目八公それぢやア先刻已來といひてへのふおとわ「ヲヤ旦那お歸んなすつたとぞんじましたら。またこの穴へお這入なさいましたネ。ヲホ、ヲヤ小三なん是はおはやう。さぞおくれたびれなすつたらう。トあいきつするに小三はけ小三「アイやう／＼今しまひましたヨ。まことに／＼暑くつて。びつちより汗になりましたよ。トいひまざらせどとかくむねのどうきの。もく藏「ときにおいらんはまだ御入内がごせへませんね。モシ旦那やつがれがちよつと勅使に立ませうか。トいふに金五郎は「ナアニ足下の足を勞すまでもなしさ。ちつと見かけた山があるからおいらんの處へ勅使もたてず御内意もしねへのよ。おとわ「ヲヤ／＼旦那はおいらんに。かたい約束をなすつたぢやアありませんかへそれにマアそんなことを。金「ナニサ今に容子がわかりせへすりやア。眞名鶴も呼にやるのすまア／＼そんなことは借置として諸事酒だ唄へ／＼。トぎよいにしたがつ。いざうした黄菊としらぎくの。おなしつとめのその中、外にのきやくしゆは捨小船かたいはやしてにぎはしく。しだいに銚子の數もかはれば。はやことくせりのはやり唄。上がたうたてさはぎ立れど。とかく小三はうき／＼せず。目八「は小三の目八「コレ女房どもなぜマアそのよにふさいでをる。ちと浮／＼しやいのふイヨ成田屋ア。小三「アレモウいやだヨおふざけてない。目八「コレサなせそんなにびんしやんするのだ。人目が多くてはづかしいかさうか／＼ハテ初心な子ではあるぞ。おまへとわたしのその中、はしらねへものはネエもし旦那。金「大きにサの。右左この子は男が嫌へだそうで。なんぼ馴染のねへおれても。ちつとかそつとは何とか彼とかのふおとわ。とわ「さやうさねへ。今日ほどふかおしださうでまことにふさいでお出なさるが。こりやア何か譯がありませう。トけどつたやうすの口うらに。金「さうヨ大かた色男が。待てるのを。こつちへ呼だてられてきつくふさぐだらう。どふておれがやうなのつべらはんは女にやア縁遠いから。

兄弟分になるつもりだ。ちいせへもんぢやア面倒だからサア／＼是へついでくん。ト大きなゆのみへ酒をつがせの。モシあなた。それではあんまり過ますぞへ。金五郎「なぜ酒がすぎぢやアわりいのか。小三「わるいと申すぢやござりませんが。あんまりあがるとお身の毒わたしがすけてあげませう。是もやつぱり勤の一ツみなさんわらつておくんなんさんなよ。トつとのみほ。もく藏「イヨ濱／＼ありがたし玉藻前の再來め。これらがほんのよしこの。目八「モシ旦那わたくしが目のわりいせへか。小三「さんほどふもおいらんに似てゐなさるぢやアごせへませんか。トいはれてふたりはむねにぎつ金「ナニ小三がカどれ／＼。トわらひ小三「顔をさしのぞけば小三「はうれしき恥かしさに。はながみでか。金「ほんにのふ足下の目のせへでもねへ。おれにもさう見えるやつヨ。他人のそら似とやらだのふ小三「むねどき／＼。小三「どふてございませすかわたくしなんぞか。金「ア、ひどく酔がまはつたケイ引コウ小三水を一ぱいもつて来てくん。トそのまゝそこへう下へたり。もく藏「旦那もし。モウたぬきてお逃なさる子そりやアちかごろあなたでも御せへません。モウ一ツ厭ませう。モシ旦那およつちやアいけません。モシ旦那これはしたりモウおよつたそふな。目八「そんならモウそろ／＼軍勢はこの陣を退かふのふおとわさん。おとわ「さうねへ。トいふとこへ小三はちや。小三「ヲヤ旦那はおよつたかへ。目八「さやうさ。あんまりあがりつゞけだから。ちよつとおよるがようござへやせう。そんなら小三さんおゆるりと。もく藏「しかし旦那と小三さんとさしむかひぢやア。猫に鱈節泣子に乳で。ちつとあぶねへものだテチ。小三「ヲヤいやよ。わたしも今に下へ行がチアノおとわさんほどかりながら。枕とかいまきをちよつと下へさういつておくんなんさいな。おとわ「アイ／＼合點でございますヨ。トみなく／＼は。引ちがへて下女かいまきと枕を持來り。下女「モシ枕をおさせ申ませうかへ。トいふとき小三「の膝をそつとつく。小三「はこゝろを呑こんで。小三「ナニわたしが今お起し申て上るからそこへ置いていつておくれ下女「ハイ／＼かしまりました。トまくらをおい。金五郎は目を明てあたり見まはし枕を取て又ねころび。金「七段目の由良といふ計略だサアもつとこつちへよんな。ト小三の手を。小三「また誰かまゐりますよ。金「なんのこつた。そんな野暮なも

のがあるものか。但しはいやかうれしくねへか 小三あなたのおこころがとけまして嬉しいことはうれしいと。思ふにつけて又一ツ。心がよりが出来ました 金、そりやアマア何が。やつぱり誰にか義理だてか 小三人の事よりあなたのことさ。聞けば千年屋の眞名鶴さんと。深い中とおつしやること。眞名鶴さんは情を賣か。勤めのならひに引かへて。わたくしは又座敷ばかりのはかない歌妓の身のうへゆる。たとへどのやうな譯あつても。彈妓は抱への女郎衆には。勝れぬが廓のならばし。それゆゑなま中お目にかゝつても今日より末はどのやうな。つらひ憂目を見ませうか。しらねばしらぬて心はすめど。あなたと眞名鶴さんとの譯もあれば。やつぱりほむらをもやすたね。怪氣は女子の嗜なれど。さすが女の浅はかに。よい貌ばかりはしてゐられず。どのよなことでああなたのお名まで。出るやうなこともありません。今からそれがさきだつ苦勞。思へばかなしうござります 金なんのこつたなこりやアおかし。そんな苦勞を今からすると。天井で鼠が笑ふによ。この廓の立だといつても。思ひこんだが男の意氣地。廓の掟をやぶつて見せうと。いふはまことの意氣張づく。だが眞名鶴とおれが中も。ふかい馴染であらふかと。一寸聞ても腹が立はず。牽頭歌妓もくはしいことは。たがひに顔に出さぬから。惚て通ふとおもつてあれど。これにやア深い様子があるのヨと。言譯は外でもねへが。おめへが家出をしたことをしらせの状にがつかりして。この世に望みも絶たから。ながらへてゐやうとおもはなんだが。又よく／＼考へて見ると。實に死だか壯健であるか。又は外にいひかはした男があつて逃たのか。取とめたこともわからぬのに。已ばかり心中立るもあんまり愚痴な穿鑿で。末代人のものわらひ。殊に上方の親父をはじめ。此地の養父や養母に。苦勞をかけるは大不孝と。心でこころを取直しても。おめへことが忘れられねへから。他の女にや心もうつらず。一日／＼とくらすうち友達にさそはれて。いや／＼燈籠を見物に。来た日が丁度眞名鶴の。突出しの日でとり／＼に。美しくいと評判するゆゑ。もしや少しも似てゐるか。見れば迷ひかそなたにそのまゝハテ似た者もあるものと。客になつてよそながら聞けばやつぱり都といふから。心ゆかしく

なつしかしく。初會の晩からうちとけてたがひに身の上あかした處似たのも道現お鶴といつて。里にやられた六兵衛どの。惣領娘と聞てびつくり。妹のおかめは斯くと。咄せばお鶴も共に驚き。泣つかこちつあはれなはなして一ツに寝るは借おいて。妹のそなたに心中立。帯紐とかぬさすの氣性。おれとても又おめへの生死が。知れぬからとて姉の。眞名鶴を抱いても寝られず。といふて見捨るも本意でねへから。妹のよしみに客になつて。末ながく力にならふと。約束をして通ふゆゑ。深い様子のあることを。誰一人知る者もなく。今日まで義理であそびに來たのヨ。ところが今度額重で。かゝへの藝者の小三といふが浅間の踊りをおどるといふが。廓中での随一と。とり／＼に評判するを。守田屋の二階で眞名鶴と共に。見ればそなたに違はねば。どういふことでこの廓へ。遠路を隔て來てゐるか。不審に思へば幫間どもが。男のために身を賣たの男と逃たのなんと彼のといふを聞てはこの胸が。はりさくばかりに腹が立て。心のくさつた女の事。ふりむいて見るもいま／＼しいと。あきらめて見ても凡夫のことゆる。やつぱり迷ふ心の愚痴からなんでも實否を糺したうへ。ともかくもしやうとおもつて。みんなにしらせず歸つたふりて取てかへしてこゝへ來て。見ればそなたに違ひはねへが顔を見るよりもいはずに。逃るから猶腹が立て今のやうにいつたも無理ぢやアあるめへがの。かう心かとけるからは。眞名づるを爰へ呼て兄弟の名のりをさせてやるぜ。トきいて小三は「エ、そんならアノ眞名づるさんは。わたしの姉さんでござりましたかへアノ姉さんで 金、さうヨ正眞正銘のおめへの姉よ。小三、エ、そりやマアうれしうござります。さうとは微塵もぞんじませんで浅い女のこころからいろ／＼愚痴な恨こととはもつたいたないとも恥かしいとも。又嬉しいもやま／＼なれど。なんの因果でこのやうに。兄弟ふたりがそろひもそろつてつらひつとめの流れの身はかないなりで名のりあひ。つもるはなしのうきことも。亡兩親が草葉のかげから。御聞なすつたらうかばれますまい。おなじつとめの中でもだまされしとはいひながら。眞名鶴さんは親のため。苦界にしづむもばちでもない。それに引かへわたくしは。いたづら事の心がら。御をんの深いおとつさん

ござります子。どうもまことに風といひ。甲といひ。いつそ好た形でござりますヨ。金「コウとき小三は都合は能かの。どこぞ座敷へ出てゐるかへ。きく「イ、エなんでござりますヨ方から口がかゝりました。なんだか氣色が悪いとやらで。みんなおざしきをとわつて引こんでゐなさいますよ。金「さうかどふしたの。又れいの積だらう。きく「ナニ積ではありますまいが。大かた此雪に。あたんなすつたのでありませう。小三さんの氣色のわるいは。おまへさんのお薬が。いつち。よくきゝますからにはやくしらせて參りませう。金「何のかんのと嬉しがらせるのか。おまへもよつほどさるものだよ。トキセるでしりを。きく「ヲホ、、有がたふござります。トおきくは立て下へ行ほど階子をあがつて出来る。すがたは何か。なやましげに顔色さへも常ならず。あらひ髪なる島田鬘。髪のおくれ毛寐みだれしを。黄楊の小櫛にかきあげつ。おもき顔にもつこりと。わらひをふくむあいきやうは。俗に所謂のち取男ころしといふべけれ。金五郎はあんかへあたり寐ころびてゐる側へ。小三はよりそひ。さしうつむくをきつ。金「どふしたひどくふさぐのふ。雪の寒さにあたつたか。かせても引アしねへかの。小三「風もちつとは引ましたが。そればかりではありません。金「フウそれじゃアいつもの持病の積か。小三「持病や酒の二日酔なら。ふさいてゐてもあなたのお顔。見れば直るは常の事そんなことではござりません。金「ハテおつなことをいふもんだの。そしてマアどふいふことだ。小三「なんだかいつそ苦になつて。人にも言れぬ心の苦勞。金「ナニ人はいはれぬ苦勞が出来た。ハテナ。ハ、アそれぢやア大かた。なじみの客が身うけをするといふことか。小三「なんのマアそんなことがアノなんでござります。金「なんだとは。小三「アノ是でござります。トはらへゆびをさしては。金「そんならとまつたのか。アノ夜喰のかたまりが出来たといふのか。小三「ハイそれだからモウ。まことにくらうでなりません。金「なんのことかと思つたにどふでかういふ。なかだもの。子の出来るのは覺悟のうへ。なにも苦にすることはねへ。そふしてとまつたのはいつからだ。小三「モウ三月ほどになりますヨ。金「そりやア大さうはやかつたの。しかし身おもになるからは。いつ迄つとめもなるめへから。追つけ春になつた

らどふなりと。重兵衛に懸合つてつがふしてつとめをひかせるから。必ずあんじることとはねへヨ。マアノ、何はともかくも實をむすぶ目出たいことだ。こゝろ祝ひにこれからわつさり。みんなをよんで酒とせう。小三「とは言ものゝこれからは。一ちばいあなたに御苦らうを。かけませうかとそれが今から。金「くらうになるとは金ばかりのくらう。つまらぬことを案じ立して煩つてくれぢやア。いかねへゼサアノ酒だトこれよりいつもの幫間藝者。大せいあげて大さはぎ酒筵にときやうつしけん

小さん 假名文章娘節用 前編下巻終
金五郎

娘節用二編叙

いろは引の節用集は。日用の御重寶にて。士農工商が朝暮の引書。乾坤時候草木器財。何でも撰採十三門。部分に四聲の書引入らず。和らかいのが當世ど。思ひついたる假名まじり。娘節用とこじつけしを。俗ていゝとか實意だとか。茶かして稱る看的の。洒落を販元實とこゝろえ。二編は今些色氣澤山。戀といふ字の趣意を。穿々の平催促。初編の縁にひかされて。いやといはれぬ義理と犢鼻褌。書れるものは新趣向。變らぬ口舌の魂膽も。おもしろ狸の腹合せ。帯の心實解盡せし。小三金五郎か偕老の。その約言のひそくと。枕に残る仇言は。こんなものでもあらうかと。書肆の携せし稿本へ。ちよつびり加へた補書の。序に朱墨を摺ながして。口繪の前をすこすといふ。

江戸 三文舎主人戯題

小五郎 假名文章娘節用 後編上之卷

江戸 曲山 人補綴

第四回

こゝに又。千歳屋の眞名鶴は。妹の小三に名のりあひてより。力になりつなれつして。いとむつましく萬の事をかたらひてくらせしが。かねてつき出しの時分より。さる有徳の商賈の。隠居がふかくなじみきつ。何くれとなく深節に。よく世話をなしたりしが。其としの暮眞名鶴はかの隠居に受出され向じまの邊に樂々と世を送る身となりけるされば月日の過こと速にて明る二月のころには小さんははや五ツ月になりしかば座敷へ出れば夜もふける又は無理なる酒も呑むゆゑ身のためにあしかるべしと金五郎は頼俵屋のあるじにかけ合些の手付の金をつかはしてちかきうちには受出すほどに夜の坐しきへ出さぬやうにとたのみにあるじ重兵衛もさすがは粹な男ゆゑ早速に承知して。いと深切にいたわりけり。かくて金五郎は。小さんを身受の金とよのへんと。さまざまに思按したりしが。もとより大金の事なれば。養父文次郎へ。うち明ていふべきやうもなかりしゆゑ。いかにやせんと左や右に。ひとり胸のみくるしめしが。やうく思按をめぐらして。京師の父文の承かたへ。ひそかに言ひ送りけるは。この程三條の小鍛冶宗近の銘作にて。大小のはらひものあり。殊に焼双世にすぐれしわざものにて。其價は。一包との事なるがもとより。兩刀は武士のたしなみ。何とぞ是を手に入たきまゝ。内にて右の金子。御かし被下候やうにと。ひたすらに懇望の文面ゆゑ。文之丞もいとひそなる。一人の子の望なれば。いつわりなりとはつゆしらず。まこととおもへばわが子な

がらよき心がけ未たのもしく。本家を継げとも。兩親のあるゆゑ萬事まゝにもならで。心にまかせぬがちさこそあらんと子をおもふ。なさけある親ごゝろに。故なく百兩の金をとゞのへ爲替にてひそかに金五郎のかたへおくりけり借も金五郎はげいしやの小さんが只ならぬ身となりしより猶さらに可愛さいやましはやくつとめをひかせんとおもへど身請の金とゞのはねば是非なくみやこの父のかたへ刀もとむる金なりとていつわりて書状を送りしかどかの地で金とゞのふやそれさへ當にならざればとにかくに心安からずみやこのたよりを待うちにしたいに月かさなりて小さんははやこの月が臨月になりしかば額俵屋の重兵衛夫婦も深切なる心から欲をはなれて小三をいたわり殊に金五郎の親もともゆたかなることしるゆゑに手附の金を取しのみにて残の金はうけ取ねどさらにあやぶむこともなく産の手當を何くれとのこるかたなくまめだちて安産をこそいのりける金五郎はかくまでも額重夫婦の深切のひとかたならねばすこしもはやく身請の金をわたしたくおもへどそれも自由ならず。ひとり胸をぞくるしめける。はや月みちて小さんは。玉のやうなる男子を産しかば。金五郎はさらなり。額重夫婦もよろこぶこと大かたならず。その名を金の介と名付しが。兩親に似てうつくしければ。金五郎は日ごろにまして。小三金の助の愛にひかされ。とかくそはく氣もおちつかず。内にゐることは稀にして。額重へのみ行ものから。白翁は惣領の。文之丞が不身持にて。大かたならぬ苦勞をしつれば。秘藏孫の金五郎。いたづらものになりもやせんかと。はらくおもひひたりしに。ちかきころは外を内。内を外と居つかぬも。はじめほどは若ものゝ。ならひとさのみとがめもせず。うち捨ておきけるに。漸々につのるゆゑ。かくて身のためあしかるべしと。おもふてある日わが居間に。孫娘のお雪に琴を弾せ。たばこくゆらし聞たるがよき音をわたいて。「コリヤお雪よ。モウ琴もよいにしやれ。この頃は太ふん上達したが。ずいぶん身にしみてならふがよいわしもおのしが琴をきいて。大きにうさはりました。年がよるとおつなもので。外に何もたのしみがないから。お念佛でも申したり。おのしが琴や三味線をきくのが。なによりよいなぐさみしや。イヤそれはさうと。アノ金

五郎は内にゐるかのトおはつておゆきは母のつらみ。「ハイお兄さん。お部屋にお出あそばしました。なんぞ御用でござりませうか。自ヲ、さしたる用もなければ。わしが今茶をいれるから。ちよとはなしに來いと呼んで來やれ。ゆき、ハイ、ハイ、かしこまりました。お呼んでまゐりませう。ト琴をかたよせ出て行く引ちがへて金「ヲ、金五郎か。サア、もつとこつちへ來て。茶が出来たから一ツ呑みやれ。茶菓子はいわひ御前から頂戴したのをとつてある茶をのみつゝよまのしきに金五郎も。自「コレ金五郎。おぬしも今が血氣のさかり。老人のいふことおもしろふあるまいが。マアよふき、やれ。おつなもので子をおもふは親の常で。貴い賤ひの差別はないもの。さきだつていつの頃であつたか。上方から狀が來た時。あちらは一統風がはやると。さういふてよこしたもやつぱりおぬしを案じるゆへ。氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親。又兄弟とても外にはなし。もちろん文之丞はじめおぬしまでも。かくしてはゐるなれど。お龜とやらいふ容貌よき娘を親しらずにもらふてそだてあげ。たがひに兄弟のやうにして。にくからぬ中であつたとやら。そのお龜でも側にゐたら。又まぎれにもならうけれど。それとも行がたしれず。生死のほどもわからぬと。サ、ちらりとおりやきいたぞや。何をいふてもこちらのお雪は。まだ一向の子どもなり。内にゐてもおもしろくあるまいが。今では文之丞もおぬしをば。こちらへもらひうけてからは。お龜もゐぬゆへたのしみに。おもふはコレそちばかりぢやから。わるい耳をきかせぬやうに。せにやならぬが若いうち。利發なもので些づゝは。身にあやまりの出来るもの。もつともはやあそびなどは。めん／＼の得手勝手ゆゑ。暑さ寒さも何ともおもふまいが。また内ではさうはない。アこの寒いに出てゆきをつたが。風でもひきそへねばよいが。夜がふけてかへらねば。寐てゐてもろく／＼ねられず。人の足音のするたびたびに。歸つたか／＼。門をしめたて這入れぬのかと。引たて耳をしてきいてゐるぞや。ずいぶん折ふしは附あひなどで。あそびにもゆくがよしサ。若いうちの事なれば。なんでもするなはなれど。このころはあまりにこうじたぞや。それがつゝは。モウどうなつてもまゝの川。と身をさまじもつかぬ

やうに。なるものだからたまは。内にみてみんな氣もちつとはやすめるやうにしやれ。このくらゐなことはいわずとも承知してゐるであらうが。つものらぬやうにしたがよい。異見に金五郎は一言半句のかへすことばもなかりしが、金だんくの御異見心根に徹しまして。申し上ることもござりません。これまで種々に御苦勞をかけたは。重く身のあやまり。おゆるしなされてくださりまし。おあまり入りたるをりからに。ゆき、モンおあにいさまへ。アノ上方からお使がまいりましたヨト聞より金五郎は俵かねたる。たよりにとびたつうれしさをしられじと胸にをしかしく。金ナニ上がたから人が来たかへ。トいふに白翁も。「ヲ、なんじや上がたから便りがあるか今も今とてうわさをした處。はやふ金五郎行て見やれ。トすゝむる。きく耳だて。金五郎はいそくとして玄關に立出。使ひに逢て狀うけ取りきて見れば刀をもとむる金一包は。使ひのものに持せつかはし候へば。あらためてうけ取申すべし。こまゝといひ送りつ。猶其書狀の封じの奥より。隱居白翁への書簡も出しかば。その狀は白翁のところへさし出し。かの一封の金をうけ取。おのが部屋に入りて返書をしたため。使ひの者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかば。飛びたつばかりによるこびて。すぐに懐中し。立出んとして中間を見れば。お雪はひとり一心に。人形の着物を縫ふてゐるすがたは。今年十四になりけれど。よろづうちばにして。あげなく容貌かたちもうつくしく。心だてさへやさしけれど。小さんにくらべてはをととなるべし。金、コウお雪ぼう。それはこのあいだの人形にさせる着物か。トはれておゆきはゆき、ハイあなたにいたゞきました。人形のござります。金それはいゝがの。おれは今出て行から。おぢいさんやおつかさんがお聞なすつたら。今仲間からよびに來てまゐりましたと。いゝ子だからさういつてくんない。トいへばおゆきは「ハイ、かしこまりました。金、なぜ。そんなにわらふのだ。ゆき、それでもお仲間へお出あそばしたと申してもおかへりが遅いと。うそだとお思ひあそばしませう。金、何さあとは又どふでも。いひやうがあるからいゝはな。案じずとさういゝなよ。ゆき、ハイさやうならおはやく。お歸りあそばしました。トいふに金五郎は出でゆく引ちが。うび「おぢやうさんな

にをあそばします。ゆき、これかへ。これは此あいだおあにいさんに。いたゞい人形の着物だよ。うび「もういゝかげんね。さまいぢりもあそばしませ。いつまでもそのやうに。ね。さまばかりかわいがつて。どふした物でございます。今に若旦那さまの奥さまに。おなりあそばすお年でからに。ゆき、ヲヤうばはいやなことをおひだよ。あれはおあにいさんだものを。そんなことはなりません。さうしてもうどこかに。奥さまがお出だよ。うび「それだからあのやうに。お内にとは片時も。お出あそばす空はなく。それといふもおまへさまが。もうちつとをとならしくあそばせばよいに。ほんのね。さまで。若旦那の女くるひをあそばすを。しらぬ顔でお出あそばすから。わたくしはもうじれたくつてなりません。トいわれてお雪は氣のどくそうに。顔をあかめて猶あばい。ゆき、それでもアノおあにいさんは。おぢいさんやみなさんに。ま事におこゝろづかひをあそばすから。おかわいさうだものを。ちつとは御保養のあそびを。あそばしてもよいではないかへ。うび「それは又しれた事。あなたはお家のお娘さま。若旦那さまは血すぢでも。御養子でござりますもの。お心づかひもあそばす筈を。お主おもひの岡焼もちわらひながら。ヲヤ、そんな事をいふとしかられるよ。上がたの伯父さんの。まことのお宿は爰だから。おとつさんよりお兄さんが。大切だつね。から。おつかさんがおつしやたよ。子供心にも金五郎を。大事にするいぢらし。さても金五郎は。件の金をたづさへて。飛がごとくに額俵屋へ至りて。あるじ重兵衛に逢て。小さんの身の代を。わたしは是までひとかたならず世話になりしを厚く報ひ。夫よりた。ちに青柳橋の。邊なる桑川といふ。料理屋の裏に家をもとめ。造作までも奇麗にしてこの家に小さん金之助をひきとり。乳母をかへ婢女をおきて住はせけるに。小さんはゆゑなく。産後すら。肥立ものか。ら。小さんはつくく。行すを。考へ見れば金五郎も。養子の身にて。この身をはじめ。金之介や乳母下女まで。はぐ。まんこと大ていならず。所詮わが身はおちぶれて。一旦廓の藝者して。人にも顔を見しられたれば。今さら斯くてくらすとも。誰しらぬものもなげば。女の手わざにはか。しき事も出來ねば。またもとのげいしやとなればなれし

事ゆへ。さのみに氣ほねもれぬわざ三筋の糸の世わたりも。藝は身を助ると。たとへのふしも金五郎が。せめては心やすめなりと。思へば金五郎へ我胸を。うちあけてものがたれば。今更一旦うけ出せし。小さんをふたゝび客へ出さん。人のおもはく世のそしりも。口をしくはおもへども。萬事心にまかせぬゆゑ。詮方なくて承引ければ。小三は是より又もとの。かへり花さく唄妓となりて。客の相手に出しかば。容貌もすぐれ座もちなれば。引手あまたにいよ／＼はやり。内に居る間はなかりけり。頃しも霜月のすゑつかた。小さんは金之介を。かきいだき。その身もこたつへよこになり。出もせぬ乳をふくませて。ねんころ／＼と鼻うたをうたふて。寐かしつけてゐる。そのかたわらに乳母のおちゝは。火鉢に養花をこしらへながら金の介の頭巾を縫つてゐる。かゝるところへ金五郎はしやうじをあげ「ヲヤ入らつしやい。ましたか。さぞおさむうござりましたらう。金五郎さうよ。なんだかひどくひへるのふ。ぼうずめは又ひる寐か。こゝらをはをりて。巨燵へあたりて寐ころべ。小さんはかた手にてたばこをすひつけ。金五郎に。小三もしおまへさんエ。あの廊から最中のもらつたのがありますがアノお雪さんにあげましてはわるふございませうか。金ナニわるくもねへが。あんな大きなものにやるよりは。取ておいて坊にやるがい。小三それでもこの子には。あんまりあまくつてわるふございませう。ほんに甘露梅もありましたから。一所にしておぢいさんのところへでもあげませうか。金ばかアいひねへ。石部金吉鐵かぶるといふかたい内へ。花街からもらつたものが出されるものかな。トいはれて小三「ヲホ、。、。ほんにさうでありましたね。それはさうとアノおゆきさんは。さぞおうつくしくおなりなさいましたらうね。金さうさ。まんざらではねへけれど。まだ一向のねゝさまなり。どこのか人とくらべては。とても及ばねへ論なし。トゆびのさきで小さんの顔をちよ。又そんなにくらしいことを。夫でもモウ女といふものは。子もちになると色氣もなくなり。つまらぬものでありますね。金ちげへねへ。色氣がなくなつても汗氣があれば澤山だ。のふばア。トこゝろをかくれは。ちよ。ヲホ、。、。ほんにさうございませう。わたくしのやうになつてはいけません。御新造さまなんどはこれか

らが肝心でございます。小ヲヤいやよ。夫でもおつなもので。子供にかまけると。いくじなくじむさくつて。わか身ながら婆アじみたとおもふやうだよ。夫だから座しきへ出てもお客がみんなわたしの事を。子も山姥だなんといふからわたしも夫をやつぱり通して。斯いふ唄を唄つてやるよ。わかい時は二度はない。有頂天までのほりつめて。親に苦勞をかけるはばかよ。子をもつてしる親の恩ほど深いものはない。いとわいな言たとへ金銀で富士の山つむと子にや易られぬ。ほんに世の中に子ほどかわいいものはない。中にはむねきなお客は。てめへのやうなものにやア。ろくな子は出来やアしめへ。子といふものは尻をひつても。できるのなんのとぢらす人があるから。わたしも又まけぬ氣で。味噌をあげるじやアないけれど。かわい／＼人と大ぼねを折て。こしらへた子だから出来合の子とは。ちつとちがひますといひますから。色氣がなくなつていゝといつて。呼んでくださるからおかしいのサ。金ヘンとんだからくりのいひ立だ。ほんにこのごろぢやア。めつさう口が達者になつたよ。道理でおれもいひまくられる。トいはつた。介がみ、をひきはなをつまむゆへ金。小三アレまたそんないたづらばかり。とう／＼おこしておしまいなすつた。せつかくよく寐かしつけたものを。金いゝはな。あんまりひるねをすると。夜になつて目をさますから。やかましくつてねられねへ。小三おまへさんではあるまいし。金ナゼ。小三なぜもよくてきました。あなたはいつてもひるまでづゝおよつてはお起なすつて宵ツぱりをなさるものを。金なんの。むりにおこしても。もうねあきた時分だから。アレ機げんのいゝ事を見な。おれが顔を見ちやアにこ／＼わらふぜ。いゝ子か／＼いゝ坊ちやんだぞ。ト金の介の顔。こりや。おつかアのやうに。うは氣になつちやアいかねへぞ。小三ヲヤけしからねへ。わたくしよりあなたに似たら。親に世話ばかりやかませませう。トいはながらだ。お竹や何をしてゐるのか。坊が起たからちつとだいておくれよ。下女「ハイ／＼サア／＼おぼ／＼さんお出てなさいまし。アノお乳母どん。わたしやア今おぼ／＼さんを。つれ申て惠迎院へ行てあそばせ申すから。アノ齒人やが来たたら。ながしの下駄の齒を入させて。おくんさいよ。うば「アイ／＼。それはいゝが。

お泣なすつたらはやくお歸りよ。お怪我をさせ申さぬやうにおし 下女「アイそんなら行てまゐりませう。トお竹はそとへ出
 女「おたぼが来るを見て 小三「ヲやおたぼさん、丁度よい間だよサアおあがり。坊を今あそびに出したからこの間にちよつ
 と結ておくれな たぼ「それは丁度よふございますね。ヲヤ旦那お出なさいまし。この間は間ちがひまして。さつぱり
 お目にかゝりませぬ 金「ほんにさうサ。なんだか急にさむくなつたね。モウこんなにかたつと首つひきを。するやう
 になつちやアいけねへのサ たぼ「ヲやおまへさん。そんなことをおつしやるが。こたつといふものは能もので。ちよ
 んの間の樂しみがありませんよねへ小三さん 小三「なんだねおたぼさん。おつな事をおいひでない。人の鼻をこするや
 うな。わたしアそんなことはきらいサ 金「コウおたぼさん。おまへもよつぽど好物家だね。なるほどちよつといち
 やつくには。まんざらわるくもねへやつさ。冬の色事はこたつて出来るやつが。いくらもあるものさ 小三「もしおか
 しくもないそんナはなしは。もうおよしなさい氣障でありますはね。サアおたぼさん。今に薔花がでけるから。其内
 結ておくれなねへトこれよりおたぼは小三 たぼ「小三さんきのふはアノどこへお出なすつたへ 小三「きのふかへ。きのふは
 舟で酉の町へ行たはね。夫だからいつもより髪がだいなしになつたのサ 金「ナニきのふは舟へ行たから髪がこわれた
 と。そいつはちとあやしい たぼ「ヲヤ、旦那が何かおつしやるよ 小三「又おやきははじまりさ。めづらしくもござ
 いませぬ 金「これがやけねへどうするものか。番人のねへ生菓だもの。どんな人が釣かれやアしねへ 小三「ヲヤ
 とんだ冤を受るもんだ。たとへどんな釣人があつて。餌魚をどんくまけばとて。曲つた針にやアかゝりませぬよ。
 はゞかりながらわたくしは 金「ヘンとんだ所てりきむやつよ。あかゑが芝居をするやうに トからかつてあるうち 小三「ば
 アやお茶はまだ出来ぬかへ ちぼ「ハイやうくできました 小三「そんなら一ツあげやう ト金五郎のはつおととりて、たぼ「是
 ははゞかりさまモウおかまいなさいませぬ。ほんに旦那へ此ごろに顔見せはどうでござります 金「わたしも此間から
 さういつてゐるのサ。小三「も見てへといふから一所にお出な。四五日のうちに たぼ「夫はありがたふござります。樂

しみにいたしておりますよ トかいもの入り來り「モン小三さんへ。このぢうのお留守居衆が。夕方行から口をかけて
 置いてくれるといつてめへりましたよ 小三「ヲヤさうかへ。けふはお店の衆のやくそくも有が。こつちは夜が更るから
 ことわつて。おまへのほうへ參らうよ わかい者「そんならちほど御案内をいたしませう トわかいものは たぼ「どれわた
 くしもまゐりませう。さやうなら小三さん。又明日トあいさつして。髪ゆひおたぼはかへりけり

第五回

小三は桑川より口がかゝりしゆゑ。鏡臺取出し身じまひの。紅粉おしろいもふかくはせず。ちよつと化粧で櫛笄前ざし一本うしろへは。銀の細うちばかりさして。いきなつくりのいやみなし。金五郎は手枕して。こたつにあたりねいりし様子に。小さんは戸棚よりかいまき出し。そつとかけて枕をあてがひ。そこらかたづけ金五郎の羽折をたゝんで戸棚へしまひ。火鉢のそばへすわり。たばこを一ぶくのみ。そばにある淨るり本を手にとりあげ。よみながら乳母とはなし。小三コウバアやよ。こんなことをいつたらまた。つまらぬ事とわらふだらうかの。水のながれと人の行すゑほど。定めぬものはないよ。此淨るり本の三勝を見るやうなわたしの身のうへ。よく似てゐるがもしひよつと浮世の義理にからめられ。どんなわかれにならふもしれずマアさうなつたらどうしやうと。外に苦勞はないけれど。そればかりが案じられて。人の知らぬ胸をいためるよ。身ト身ト行トすトをトくりトかトへトしトほトろトりトとトおトと。うば「アレまたしても」。そんな益にもたゝぬ事をおつしやるものではござりません。その三勝の身のうへは。それはほんの戯作もの。今どき縁切だのなんのかのと。芝居かしやれ本ではあるまいし。どふしてそんなことがありますものか。たわいもない事ばかりトいトひトまトぎトらトせトどト共トなトみトだト小ト。さんトもトむトねトなトなトでトおトろトしト。ほトんトにトさトうトいトへトばトそトんトなト物ト作ト物トとトはトしトりトつトもト。身トにトつトまトさトれトてト縁ト言トいトふトもト。やトつトばトりト女トのトあトさトはトかトゆトゑト。金ト坊トとトいトふト子トまトでトあトるトもトのトをト。御ト本ト妻トにトはトなトらトれトずトとトもト。末トのトすトるトまトでト添トとトげトやトうトとト思トはトな

いてなんとせう。もしもの事があつたならば。夫は又その時のこともう。案じまい。おはなしかへ桑川より。小三さんならばアア。行て来るから氣をつけておくれよ。ト出か。ほんにアノ坊が。歸つてわたしが居なかつたら。又おとつさんをいびるだらうから。アノはいちやうにうづら焼があるから。あれをやつてだましておくれ。わたしが又かへりに。なんぞお土産を買て来るから。そして若旦那がお目がさめたら。大かたお茶漬を上らうから。鍋焼でも取てあげておくれ。ト萬事に氣くばりねけ目なき。斯まで夫やわが子をば。大事にかける心から。座しきへ出てもとにかくに。内の事のみ案じられるれど。勤といふ字は是非なくも。いやな客にも襪げんとる。心の中ぞつらからめ。かくて小さん金五郎は。たゞ金の助の愛におぼれ。他事なく暮すその年も。くれて又来る春がすみ。たなびく空もうらゝかな彌生なかばの事なるが。金五郎は仲間の者にさそはれて。向ふが岡の花見もどりのほろ酔に。みな舟にうちのりて。青柳橋まで來りしが。こゝより上りて金五郎は。人々にわかれて可助といふ。供の男を引つれて。桑川の前へ來れば。乳母は金之助をいだしつゝ。かくと見るより遠くから。うば「ヤヤ、おぼうさん。アレおとつさんが入らつしやいましたよ。金五郎「ヲ、坊か。ばアにだつこしていゝのふ。おつかアは内にかへ。うば「ハイお宿でござりますサアおぼうさん。おとつさんにおじぎはへ。へい御機げんよふと。ヲホ、。イエおとつさんにだつこはなりません。もうまつくになりますから。お寐んねがよござります。金五郎「金ぼうやおとつさんはおつかさんのとこへ行てお乳をのむよ。あば「だよ。トいふに金の介。おとつちゃん。いや、おつかちゃんのちゝいや、うば「ヲ、さやう、おつかさんのお乳はお坊さんの。おとつさんではござりませぬねへ。おとつさんは御きげんゆゑおじらしなすつていけません。金五郎「ハ、坊やのばかや、トからかひながら内へ。ゆき見れば小さんは。今座敷よりかへりしまよ。三味線宮によりかゝり。物思はしげなる顔つきに。金五郎は。小さんどうぞしたのか。おつな顔してゐるのふ。トいはれてにつこ。小三「いゝへどうもいたしません。今座しきからかへりましたのサ。そしてあなたは。どこのお歸りてござりますへ。金「ナニおれか。拙者め

は今日仲間の者の付あひにて。よんどころなく向ふ島へ。御遊覽と出かけて鯛七へおしかけた處が。女子どもが大勢出て。ソレお手をとれ足を取と。めつたむせうにそやしたて。それからなんでも大ざかもり。さいつおさへつ唄へや弾や。うたぢれて迷ふて。まよふてぢれて。くぜつも千話も屏風の外へはふり出したる一ツ夜着はやしつさおせく。堀までつけれ。あとは野となれ山となれ。床とつたらねてかへれ雨ふつたら居つゞけた。などうたふからたまらぬて。小三道理だぞマアきつい御機げん。それはさうと。あなたは京を御立の時。おとつさんのおつしやつた事を。覺へて御出あそばしますかへ。金これは又あらたまつたおたつね。親父のおしへを守ればこそ。外の女に目もふらず。たつた一人を守つてゐるから。何もはやお案じなさることはござなく候サ。小三ヲホ、ホ、ホ。そのおほしめしならうれしいけれど。今では日かげのこの身ゆゑ。おちいさんや皆さんが。このやうなことは御存じなく。只あなたがわがまゝで。放蕩をあそばす事と。おほし免すてござりませうから。お宿のお首尾がお大事ゆゑ。あんまり御酒をあがりますと。あなたのお爲になりますまいかと。それが苦勞でなりません。と思ひにあまるし。心ににくしとおもはねど。一盃きげんの金五郎。ア、百も承知二百もがつてん。お爲ごかしのその異見聞たくもねへ耳がけられる。酒をあんまりあがりますと。あなたのお爲になりますまいツ。ヘン酒を呑ふがのむめへが。おれが口だから勝手だに。よ大きにお世話お茶でもあがれツ。そんな利くつらしい異見をいふのは。大かた外におつりきな。おもしろへはなしでも有からだらう。小三ヲヤ久しいものでありますよ。金ナニ久しいなじみがあると。それだからなんのかのといつて。はやく歸さうと思ふのだな。よし。そんなに邪魔になるなら歸つてやらうとめるな。小三はいつもの事とおもへばわざとそしらぬかほをして。お腹が立ならどうでもなさい。たまははおはやくおかへりなさるも。御孝行でござりませう。ヲヤなんだか風が變つたやうだ。ア、雨がふらねばよいがト。さからはぬゆへ金五郎はきせるをしま。金ナニ御孝行でござりませう。お香くお茶づけがきいてあきれらア。雨が降ふが降めへが。歸るに四も五も入るものか。ト。酒のわくどつ。我儘氣まゝをい

ひちらし。ぢれつゝ内へかへりけり。乳母はこの時金の助を連れて歸りかゝれど金五郎が不機げんゆゑに、次の間にてあそばせて居たりしが。やうくこなたへ出来り。うば御新造さまへ。今日はおとつさまの御機げんが。おわるふございましたねへ。何のお腹だちであのやうに。お發りなすつたのでござりますへ。ト。いへば小さんは「ナニサいつてもあゝだはな。御酒をあがるとなんだの彼だのと。わたしに無理ばかりおつしやるのサ。たまにははやくお歸し申さないと。あなたもいろく譯あるお身ゆゑ。おやどの御首尾が大事だからさ。お内では心づかひもなさるだらうし。わたしにはわがまゝの。いひどころだと思ひなすつて。いつでもの通り。それに此ごろでは日にまして。だん／＼御酒が上るから。まことに苦勞でならないよ。わたしは何といはれても。つねから御氣性を知つてゐるゆゑ。御酒をあがつて御きげんの時は。その氣であるからよいけれど。やつぱりおゆきさんにもあの通りに。無理ばかりおつしやるかと。影ながらそれが案じられるよ。わたしも女の情だもの。いととおもふお方をば。つれなくいひておかへし申すも。浮世の義理や二ツには。お身のためをおもふゆゑ。心にもない事などを。いひ出すまでの胸のせつなさ。すいりやうして。ト。なみだぐおちうはまきこ。うば御尤でござります。譬にもいふ通り。一ツかなへば又二ツと。何をいふてもまかせぬうき世。十分な事はござりませぬもの。いろく御苦勞あそばすも。因念とやらでござりませう。ト。ありがちなるはなしなかばへく。ヲイお竹殿ちよつと爰をあけてくん。下女「アイ／＼佐介どんかへ。ト。しやうじあければ佐介はひろめ川のりやうりばん表より。小三ヲヤお竹殿ちよつと爰をあけてくん。佐介「ホイそいつはおほしくじこみて。モシ旦那はどうなさいました。小三ヲヤ佐介どん旦那はもうおかへりだよ。佐介「ホイそいつはおほしくじり。けふはなぜはやくおかへんなすつた手。さつきお出なすたのを見とどけたから。せつかく。くめん十めんして。旦那のお好な一ト口ものを。仕こんでもつてめへつたのに。小三ヲヤさうかへ。それはマアよくいそがしいのに。氣をつけておくれだうれしい手。佐介「なんにしても旦那がお出なさらねへぢやアはじまらねへ。そんならこの鉢のものを。何かは。旦那へのこゝろさしだから。置いてめへりませう。ト。さかなを置いて。さても金五郎は。酒がいわゆる疝癪の。腹立ま

ぎれとがもなき。小三につらくあたりちらしてかへりしが。根もなきくぜつの事なれば。又あはねば氣になるゆゑ。四五日たちて晝すぐるころ。小三のもとへいたりしに。小三は留守にて乳母ばかり針仕事をしたりしが「ヲヤ若旦那さま。此ごろはまことにくお遠くしうござります。金五郎さうサ。此間はちつと用が多くつて。さつぱり出られねへやつよ。うばアノあなたがいつそのあいだ。お腹をお立あそばして。おかへりなすつたから御新造さまが。まことにお案じなすつてお出なさります。金ハ、ハ、ハ、さうだつたかの。おれはさつぱりしらなんだ。アノ今日はどこぞへ行たか。うばハイ今日は鮫清に。なんとやらの會がござりまして。金フウ坊はどうした。うばお坊さんは今お竹がどこへかおつれ申てまゐりました。金さうか。おれはわすれはしねへかのふ。うばヲヤとんだ事をおつしやいました。三日や四日お出なさらぬとおわすれなさるものでございませうか。今朝などもいつそおとつちやんく。あなたの事をおつしやいました。金ハ、ア。子どもといふものはどふもにく、ねへものだの。アノこの間来たとき。ちつとあたまへふきてがしたやうだつて。そんなにふえもしねへかへ。うばハイお頭のでござりますかへ。そのやうにふえもなさりません。それはさうと若旦那さまへ。こんな事は申すまでもござりませんが。御新造さまが明ても暮ても。あなたの事のみお案じなすつて。それはく御苦勞のやすまる間とはござりませんから。その御心根をおもひやつて。あなたもどふぞあんまりお氣を。おもませあそばさぬやうになすつてくださりまし。金イヤモウおれとても。にくしとおもふ小三ではなし。殊に子まで出来たのに。すこしはおれの手だすけと。いやな座しきの勤をするのは。なみ大ていの女などはなく、及ばぬ心だてとおもへば。一日片時もつとめをさせる氣はねへが。足はぬがちゆゑ是非もなく。苦勞をさせるが可愛そうだ。トほろりとおとす男泣。折から桑川わかひもの清介。料理はん佐介入り来りて。「へい旦那このあいだは。金ヲイ清介に佐介公か。さアあがねへ。兩人へい御めんせへ。トふたりながら。清もし旦那此間はねから入らつしやいませんね。きついお見かざり。又外に何か。おもしろい。世界でも出来ましたか。金」とんだ事をいふ

おもしろい世界どころか。いつもまじめでさへねへやつよ。ちつとおもしろい世界へ。案内してもらいてへのふ。清は是はまためいわく千萬。ハ、ハ、ハ、佐旦那この間子。あなたがお出なすつたのを見とどけて。ちよつびり趣向してめへりましたら。もうあとのお祭りで。大きに鼻をあきましたのさ。金ハ、アさうだつたか。そいつア残念だつたの。しかしその心意氣がありがてへそんなら今からはじめやう。ト是よりいろく大酒もりとなるまゝに。たがひにさいつおさへつして。いとにぎやしくなりにけり。金五郎はとこの間のは。金なんと清公や佐介公なんぞは。いつもくいそがし。いから。女の所へ行ひまはあるめへのふ。清サア。そこがもしおつなもので。是てもずんぶん女ゆゑにヤア。相應に謀斗もいたしますのサ。まづ女に逢はふといふ晩にヤア。内を都合してはやくきりあげ。おたしなみの藏衣裳を。引かけの親かたの目をしのび足。こそくくくとぬけがけの逸足出して阿多氣へおしかけ。ろじ四ツ眼も目にかげず。たきおこして上りの天神。サアそれからが口舌のこんたん。おもしろ狸の腹づゞみ。トのりぢではなす。座敷をしまひ歸り来る。小さんのあとより。箱まはしの仁介三味せん箱を背負ちやうちんをかた手に引さげ供をして来るがりながら。仁介どん大きに御苦勞。そんならまた明日来ておくれ。トおびにはさみし金を出し。サア是で一ツ呑てお寐よ。トわたせば雨まは仁介へいこれは有がたふございます。さやうなら明日。へいおやすみなさいまし。ト三味せんは。かへり行。小三は金五郎のそばへすわり。小三ヲヤよくお出なすつて下さいました。此間はなぜさつぱり。おいてなさいませんへ。トかほを見わらふ。金へんあんまりよくも来ねへのよ。来るなといふかち来ずに居れば。又うらむのかあきれるのふ。四五日おれが来なかつたから。うるさくなくつてよかつたらう。あんまり邪魔にされるから。呼によこすまでふつりとも。来めへとおもつてあきらめて居たが。逢ずに行てはぢやアなくつて。逢ずにあると氣になるから。顔が見たさについとかく。やつぱり迷つて又こゝへ。小三ヲヤばからしいなんでありますへ。清どんや佐介どんが聞いてゐるのにそんな事を。金ハテ人が聞いても大事ないての。コウ小三。こんな馬鹿にヤア誰がしたらう。おれも生れつき是ほどの。阿房

ではなかつたつけのふ佐介公。楊貴妃や玉もの前のためしもあるから。さのみはづかしいとも思はねへの 佐介「こりやア旦那の御尤だ。惚てもりきむのはやほのいたりサ。小三さんはやつぱりおぼこ気がぬけませんね 金「なんのノ、おほこどころか。ほらが變じて古狸とはなりにけりだ。ア、化されるノ」と。知りつゝやつぱりばかされるはおれが一生のあやまりだ 小三「ヲヤよろしく申しておくんなさい。あなたこそわたしをお化しなすつたのでございませ 金「そりやアまたなぜだ 小三「それでも唄にもうたふ通り。心がらとて古郷をはなれ。しらぬ此地で苦勞するとは。よくわたしの身の上に。かなつた唄でございませよ 清介「モシ、ト小三「苦勞するのおまはんをたより。それに邪見な事ばかり」モシ旦那。小三さんの心はこのうたの文句の通りでござりますよねへ小三さん。一ツ心意氣がうけ給はりてへもんでござりますす 小三「なんだねおかしくもない。娘子供ちやアあるまいし。心意氣なんぞはいやだはね 佐介「そんな事をおいひなさらずと。ちよつと一ツおやんなせへ。ソレどいづどい、なだべこ。ちやらノ。どんぶり鉢アういたノ、金「ア、やかましい何をいふのだ 佐介「ハア、サア、小三さんサア一ツ、トいはれて小三はせんかたにとり、うた、なまじなま中ほれたがうらみほれざ苦勞もせまいもの 清「ハ、妙だノ、小三「モウ是てかんにんしておくれ 金「コウおつなものでの。おれも實は上がたせへろくだが。都といへば聞えがいくが。上がたせへろく上がた猿といはれては一句もねへのす 佐介「その上がたにもおめへさんのやうな通人がありやすから。東ツ子は一句も出ません。全體は旦那がわるいのさ。おめへさんがあんまり程がいくから。やばなら斯したうき目はせまいと。小三「さんがこれノ、で。氣がもめるでござへませう 清「はへるまねする、金「そんなくぜつはむかしの事よ。コウそれよりやア清介今の阿多氣の物語の二番目狂言をはなさねへか。後學のために聞てへのふ 清「ナニもう跡ははなしますめへ 金五郎「なぜ 清「小三さんにしかられます 小三「清どん何だへおもしろいはなしかへ 清「なアにわつちが色の戀はなしさ、トいふ所の小女、清介どん佐介どんお客があるよア 佐介「ヲイ、そいつは斯してはあらねへ 金「小三そこにある

紙入を清公にやつてくんな。そして此一ツ提は。佐介貴公に譲つてやらうトいふなり 兩人「ハイ是は有がたふござりませす、トいふなり 出で行 金「ア、酔たノ、けふはどうしたかまことに酔たトそのま、そこへうちふして 小三「お竹やもうこのを かつつけておくれよ 下女「ハイ、もうよろしうございませすかへ 小三「ア、い、のさ。乳母や今夜は若旦那は。よつぽどあがつたかへ ちよ、い、へ。そんなにおすごしおそばしたやうでもござりませんが。いつたい御酒がおよわいか 小三「さうサゼんたいあがりはなさなんだが。ちかごろはよくあがるよ ちよ、さやうでござります。若旦那さまもお宿では。萬事おほしめすやうにもいかず。お心づかひもあそばしますから。ちつとづ、御酒をあがらずは。お氣のはれやうがござりますまい。ほんにお坊さんもよくおよつたから。若旦那のお床をのべませうか 小三「そんならその子をわたしが抱て居やうから。お床をとつて上げておくれ。ト金之助をいだしあぐるにぞ。乳母はこの内六疊の座しさへ床をとり夜着を出して ちよ、モシ若旦那さまへ。サアおよりまし 清「おこ 金「ヲイ、ア、い、心もちだぞトたちあがりて 下着ばかりになりて入り 金「サアおつかアも寐ねへか。坊主はおれがだいて寐よう 小三「あなたが抱ておよつたら。それこそつぶしておしまひなさるだらう 金五郎「い、な。つぶしてもおれの子だから。だれも何ともいひ人はねへ。萬一おれがつぶしたら。又い、のをこしらへるは 金「ト金の介の手を 小三「すきな事をおつしやるよ。アレおよしなさい。そんなに引はると目をさまします。起しちやアわるうござります 金「ナニ起しやアしねへちよつと貸てくしなさい。そんなに引はると目をさまします。起しちやアわるうござります 金「ナニ起しやアしねへちよつと貸てくれ 金「トむりに金の介、エ、よく寐坊主だぞ。コレちつと目をさましてあすばねへか。ちよ、ちよ、ちよ、トくすぐりて 小三「ア、レおよしなさいといふのに。寐るさきへ立て起しちやアいけませんよ 金「ハ、ハ、ハ、そんなら乳母の處へ行て寐ろ。今日をさまして泣出すと。おつかアの何のか邪魔になるさうだ 手へわたせば 乳母は金之助をかき抱きて。次の間へ入りてうち臥しける

小さん 假名文章娘節用 後編中巻終
金五郎

ハイといらへつゝ立出れば卒爾ながら小三どのゝお宿は。爰でござりますかな。小三ハイその小さんはわたくしてござりますが。あなたはついに見なれぬおかた。どちらから御出なされました。白翁ハアそんならあなたさまが小三どのか。わしはこなさまにちと内々咄しがあつてわざ／＼來ました。ゆるさつしやれト上へあがれば。小三何はともあれそこは端ぢか。マア／＼こちらへお通りなさいましト奥へ通せば座に。自扱こなさまの名はかねてより。聞ては居れど逢ふはじめ。わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが。今日わざ／＼來ましたのも。外の事でもござらぬが。アノ孫の金五郎めが事。イヤもう見るかげもないあのやうな者を。よふマア可愛がつてやつてくださる。眞身にとつてはうれいともかたじけなことも。禮は詞に盡ませぬ。その深切なこゝろを見込で。ちとたのみたい事がござるト。聞より小三は胸に釘。はつと心に當惑し。いかゞはせんと思ひしが。今さらおどろく事にもあらず。かねての覺期はこゝぞとおもひ。胸なでおろし氣をとり直し。茶煙草盆を出しつゝ手をつかへ。小三ほんにわたくしも若旦那さまのお咄しにてつね／＼から。御尊さをうけ給はりましたあなた的事。お目にかゝりますはじめてでござりますれど。眞身の親に訪れたこゝろ。おうれしうござります。よふマアお出あそばしましたトいふかほつく。白翁イヤあまりよくも參らぬ。ア、物ごしといひ取まはし。容貌まで高位の。奥方とてもはづかしからぬ。人にすぐれた生れつき。いかなる人の身の果か。見れば見るほどうつくしい。ア、若いものゝ迷ふはもつともかい。こなさんを内へ入れたなら。孫めが尻も落つくであらうけれど。上へのこきえ世間のおもはく。義理と人目の詮かたなき。たのみといふは茲の事。知つてるかはしらねども。金五郎はわたしがためには。惣領むすこの一人孫。世が世であるなら。無理わがまゝもが仕次第だ。だん／＼深いやうすがあつて。これが親は家出なし。其弟が今ての家督。その養子となりし金五郎。あかの他人といふてはなけれど。養子と名のつくかなしは。おもふにまかせぬ世間の人目。家のお雪といへるを。娶合せねはならぬゆる。金五郎もふせう／＼。やうやくこのごころ誓ひしても。お雪はまだ子供同然で。

おもしろくないから片時も。内に居つかぬはもつともかい。わしが孫でいふてはないが。世けんの人にはほめられ。て。それほどの事わきまへぬやうな。氣性でもなかつたが。今に夜どまりはなほやまず。女房はほんのすもり同様。それは誰ゆゑこなさんゆる。わしが命のあるうちは。内外の者もわしにめんじて。金五郎がわるいとはいはねども。見らるゝ通りわしも老人。今をもしれぬ身のうへゆる。わがなき後は金五郎の身のために。ならぬこともあらうかと。案じ過せば夜の間も寐られず。苦勞で壽命もちどまるやうじや。こんな事いふたら鬼とも蛇とも慈悲なきの心とおもはつしやらうが眞實あれがにくゝもなくば。内の嫁のお雪の中に。子どもの一人も出来るまで。遠ざかつてもらいたい。さすれば世間のおもはくもよし。又子どもでも出来てからは。こなさんを内へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で。こなを内へよぶときは。部屋住の事ゆゑ世けんへすまず。こゝをとつくり合點して。しばしのうちを辛抱して。思ひきつて見てくだされ。もしそのうちが待遠なら。こなさんの心になんやうな。身の爲によい處を見たて。この爺がしたくして。縁付けて進ませう。さうすりやあなたの身も落つき。おほくの人のきげん氣づまをとるにも及ばず。せめてはわしが禮心。氣樂にして進ぜたいトものやわらか。見さげられもし殊にいやといはねば。いつそわが身のなり行を。うち明んとはおもひしが今さら素性を明しなば。見さげられもし殊に又。金五郎の爲あしからんトおもひきたぬ。小三だん／＼のおたのみうけたまはり。何と申さんやうもなく。大事の大事の若旦那さまを。人にわるくいはせたり。あなたがたへいろ／＼な。御苦勞をかけましたもみんなわたくしがいたづらからつくつた罪でござります。おゆるしなされてくださいまし。それをマアにくいとおぼしめさず。氣樂にさせてやりたいとかへつてやさしいそのおことば。もつたないとも有がたいとも。申さふやうはござりませぬ。去ながらわたくしは。たとへ外にどのやうな。けつこうな處がござりませうとも。樂しみのぞみはござりませぬ。只若旦那やみなさまの。おためになります事ならば。たとへこがれて死すまでもふつつり思ひ切ませうトいふるな。うるみ聲わ

つとばかりにせきあげて。正體もなく泣みたるころのうちぞいかならん白翁もともによ「ヤレ〜マアよくおもひ切つてくださつた。かたじけないぞや小さんどの。そのかなしさをみるがいやさに。今日行てたのまふか。明日行ていはふかと。一日〜と見合せても。どふていひ出さねば果しがつかねば。心を鬼にしてわざ〜来たが。さぞにくからうが。是も身のため。うき世の義理の詮かたなさ老の身に後生は願はず。縁切りに来た罪つくりわしが胸のせつなさも。すいりやうしてくだされよこの事とくと承知なら。けふあすといふでもないころまかせにいつなりと。この身にも怪我のないよう。手ぎはよくやつてくだされトいひつゝ立「金五郎とは終切つても。わしはやつぱり孫嫁のころ。この後なんぞ不自由あらば。かならず〜遠慮なふ。なんなりとさういつてよこさつしやれ。こなさんの身の落つくまでは。いつまでもわしが貢ますぞやト他人とおぼく白翁が。やさしきこと葉にうれしさあまり。かなしさやるせなさまに。とかくのいらへさへもせず。只うつ臥て泣居たる。その心根の不便さを。おもひやりつゝ白翁も。老のなみだにかきくれしが。心よわくてかなはじと思ひ直してかへりける。小さんはもとよりお雪の事を。聞てゐたゆゑ末〜は。中を断れんは必定なり。もし縁切らるゝ事とならば。生てみたとして甲斐なき身の。別れてつらき日を送らんより。死して苦患をまぬかれんと。こゝに覺悟をきはめしも。せまき女子のころから。嗚呼是非もなき事にこそ。かゝりしほどに乳母のお乳は。最前よりの一五十一を。次の間にて聞ものから。小三の胸のせつなさを。さこそとおもひやるほどに。おのれもともに胸のうち。はりさくばかりのくるしさを。こらへてしのび泣みたるが。今はなか〜こらへかねて。わつとばかりに走り出小三のそばへうばもしあなた。とんだ事になりましたねへ。あのやうにマアうつくしく。おいそれとお受合なすつたは。どふいふお心か合點があまりませんおぼうさうんのある事を。なぜうち明てかう〜だと。おつしやらぬのでござります。子までなしたる戀中と。お聞なすつたらお祖父さまも。無理に切れるとはおつしやるまいに。今若旦那と御縁を断て。どうなさる思しめしてござります。お坊さんがかわゆくはこ

ざりませんか。あのお子さんの事はお案じなさらぬか。マアどふいふお心でござりますト只ひとすじに金大におもふゆゑ。心を付るこは異見。乳母はかくこそありたけれ小三はなみだ「ほんにそなたのいふ通り。子まである身を断れる事。せつないともかなしいとも。胸の中ははりさくやうで。そのくるしさは譬へられうか。それゆゑ金ぼうのある事を。うち明やうとおもふたが。男の子は縁切らるゝとき。男親に付がならひ。なま中な事いひ出して。あの子まであちらへ引とられては。若旦那も今までよりは。なほ〜御苦勞が増であらうし。二ツには又わたしもあの子を。手ばなしではたのしみもなく。さぞ日にましきみしからうと。みれんらしいがいひ出さぬも。やつぱりたがひの爲ばかり。又若旦那と縁切つても。わたしや外にどのやうな。男が有うと二人とは。馴染をかさぬる氣はないから。いつがいつまでもいまの通りに。斯してくらす心ゆゑ。そなたもやつぱり今までのとほりに。金坊の世話をしておくれよトいふもなとや。乳母も目をこすりながら。うばまことにあなたのお心の中を。推量いたせばいたすほど。わたくしの胸もはりさくやう。なる程おぼうさんの事を。おかくしなすつたは深お心。たとへ今日が日御縁がきかれても。一生別れきりといふてはなし。ほんの人目や浮世の義理と。お祖父さまの先刻のおことば。すこしの御辛抱でござりませう。又おぼうさんの事はおつしやるまでもなく。ば〜ア〜とお馴染なすつたものなんて佗人とおもひませう。もつたないがわたくしが。産申したお子だとぞんじますもの。たとへどのやうな苦勞をいたしても。お育て申す氣でござりますから。ちつともお案じなさいませう。しかし是からわか旦那の。お手がきれたらなをあなたは。いろ〜御苦勞あそばすだらうと。それがおいたはしうござりますトほろりとためなみだ。小さんも浴衣の袖を目に小三「わたしも今度の縁切りが。一生の身の大事だから。只何事も神まかせ。わるい工をしたのじやアなし。天道さまも見とほしゆゑ。今日はけふ明日はあすと。その日の風に任するばかり。せつばつまつたそのときは。又外に思案もあらうから。それを案じてくんなんさんな。今にも若旦那がお出なすつても。かならずわるい顔をしないて。今お祖父さんのお出なすつた事

も。おしらせ申ちやアわるいよ。うば、それは吞こんでおりますが。なんぼお祖父さまのおたのみで。お家の爲や若旦那のおためとは申しながら。常にかはつてあなたの氣づよさ。お思ひきりのよさといふものは。あんまり見事でございますから。どふも合點がまゐりませぬ。トいはれて小三は死する覺悟をさとられじ。トわざとまぎらすぢ。小三「アイタ、、、、今のもや、て持病の積が。どうやら頭痛もするやうな。よこになる。乳母はせんかたなくも。次の間へ行て金之助のゆかたびらを。縫ふも泪ではかどらし。小三さんはしほし氣をやすめんと。よこに寐ても眠られず。只胸さきのみとどろきて。とやせんかくやとさまに。思ひなやみしをりからに。隣れる家にて若ものども。二三人にて隣高に。浮世ばなしのいろ／＼なる。中一人が。トコウ八さん。おめへおらがむかふにゐた。つとめあがりの女を見たか。トフウ見た。ト二十三四のいゝ女だつて。あれがどふした文でもよこしたか。トばかアいひねへ。アノ女て此間大騒動があつたアな。トハテノまた逃てもしたのか。トどふして。逃たぐらゐないゝけれど。首をく／＼つて往生したアな。トエ、く／＼つたか。ヤレ／＼とんだ事をやらかしたの。そりやアマアどふいふ譯だ。ト聞ねへアノ女の。婦多川の女郎だかの。さる處の息子に惚て／＼ほれぬいて。たがひに心をあかし合て。末は女夫夫婦にならうと。約束をしたが聞ねへ。その息子がおめへ内にやアの。いゝ嫁があるんだアな。それをなんでも深くかくして。まだ女房は持ねへから。請出す／＼とだまかしたか。大ふでかしよ。それからおめへ相應に。金まほりもいゝもんだから。親父の金をひん盗んで。身受をしておれが長屋へ。連れて來て置つて置ての女房はたゞき出しの。から手におへねへから。親父はおほおこりて。上がたへやるの。田舎へやるのと大もんちやくに。した處があゝの女は。女郎に似あはぬよく出來た者で嫁が出されたり親父がおこつたのを聞と。サア氣をもんで。息子が不埒とはいふものゝ。嫁を出したり内がもめるも。みんなわたしがあやまりと。ひどく嫁に氣がねをして。生てゐちやア四方八方。丸るくいかねへと思つたそうで。と／＼書置をして。首をく／＼つて死んでしまつたから。嫁も歸るし息子もそれから。しかたが

ねへからおとなしくなつたが。なんとその女郎はよつほど氣めへもので胸がいゝに。第一貞女といふ女だ。トほんに女のかゞみだのふ水滸傳一百八人の中にどうかありそうな豪傑な女だの。なるほど女は魔のもので。外面如菩薩内心如夜叉とかなんとか。佛さまがいわしつた通り。顔はうつくしくつても肝魂のおそろしいのがあるものだ。しかしあの女もその息子の。一旦恩になつたから。男の爲や何かを思つて。死んだのはあつれば名が残るが。おいしかな首をく／＼つたからおしめへだ。とても死ぬならいさぎよく。身を投るもちうだから。剃刀で咽をくつとやると。鏡山の尾上ときてがうぎにきいてゐるせ。トさうよのふ。そこがやつぱり氣がよわいから。剃刀でやつたらいたからうとおもつて。く／＼つたのだらうが見つともなかつた。トさうだらうさうだらう。それちやアやつぱりその息子の。面よこしでわらはれ草だの。ほんに死ぬのもよつほどあべゑものだ。なんにしてもおそろしや。トはなすを小三はききまじし。トハテ世の中に似た事があればあるもの。今のはなしのやうすでは。この身に似たのも辻占か。あきもあかれもせぬ中を。心におもはぬあいそづかしが。どうマアなんといはれやう。死ぬる今期に若旦那に。お腹をおたゞせ申ては。後の世までの心が。りとつ蓮もおほつかなし。ア、なんとせう彼とせう。トひとりむねのみ。金之助は婢女のお竹と。いつかたへ行てあそびるたるがさきに白翁が立歸るとき。すれちがひて歸り來りしが。子ども心にも小三や乳母が。なにやらなげくやうすゆゑ。褒美さへもねだらずして。又門口に立出て。土ほぜりして居るをりから。金五郎が來るを見てよろこびて内。金の介「おつかアちやん。おとつちやんがお出だよ。おつかアちやん／＼。ト田代はいつた。りするうちに。金五郎は入り來るゆゑ。小三は顔をしかめつ。起あがりて右の手にて。おさへながら。小三「お出なさいまし。トいひつた。さしうつむいてことばなし。金五郎どうしたおかしな顔つきだの。氣色でもわるいのか。トいつにかやさしき詞に。小三はいと胸さき。さけるばかりにさしこむ積を。おさへても猶おさまらぬ。心一ツに白翁が。いひたる事をいかにせん。なま中な事いひ出さば。たのまれしかひもなし。又金五郎に胸のうちをさとられじ。トわざと。小三「けふ髪をあらひましたら。まこと

に頭痛がつよくして。ふさいでならぬにいろ／＼な事を。考へますと心ほそくて。それでつい顔いろもトせつなきかくし金之助はさしのぞきて「おかアちやんもう氣色なほつたかエトいわれてなみだを小三「アイもういゝよ金五郎なんの氣色しよくがわるさうなら。髪を洗はなけりやアいゝに金の介おとちやん。今ね。よしよのおぢいしやん来て坊こはかつたよ金五郎「ナニおぢいさんが来た。そりやどこのおぢいさんだトとはれて小三は胸とどろくをそらさぬ顔で小三「ナニサなんでござりますすよ。矢劍堀の御隠居さんが御出なすつたのでござりますが。この子は見るとこわがつて。どふもなりませんヲホ、トわらひに中。さこそつらくもかなしかるべし金の介「おとちやんお土産あるかへ金五郎「ホイしまつた。ツイ今日はわすれて来た。そのかはりばアと行て。何ぞいゝものをとつて來な金の介「アイチヤワば、ア行ふやうトせたげるゆへに次の間ようば「サアお坊さんまゐりませうト金の介をいだき出てゆくそぶり「金、なんだてん／＼におかしな顔をして。どふもおれにやア合點がいかねへ。なんぞ苦勞な事でも出來たか。コレなぜおれをはへだてるのだ。そりやアわからねへといふものだけ。小三「エ、なにも込入た事もござりませんから。あなたをばへだては致ませんが。餘うつ／＼として居ましたから。つい色々な事を案し過して。互たがひにこしかた行末を。咄はなて果は泪をこぼし。ふさいでなりませぬからとろ／＼と。少氣を休めたのでござります。ガわたくしよりはあなたのお顔。いつにないお色のわるさ。お心持でもお悪くはござりませぬか金「ナニおれのはこりやア持めへだから。時々ふさぐが直になほるよト口にはいへど心には何くれ彼と男氣の。それとしらさぬ胸の中。言ぬはいふに彌増て。猶さらつらきものぞかし小三「あなたちつとお氣ばらしに。御酒でもあがんなさいませんかエ金の介「やゝ酒よりはマアちつと寐よう。全體けふは番だから。どうも來られねへ處だつて。きのふもおとゝいも來ねへから又案じるだらうと氣になつてそれでやう／＼ぬけて來たのよ。一ト寐入やつたら直るだらうト小三のまくらを引よ「のう小三。實に人のいつ生は。どうなるものかされねへものなの。今ごろ斯して暮さうとはおいらア。夢にも氣がつかねへよ。未だかけて夫婦だと。互たがひに思ひ

おもはれたに。お雪といふ悪魔が這入て。苦勞をさせるせつなさつらさ。夫ゆるにこそ祖父さんや兩親へ。いち倍氣がねをするといふも。ア、うるせへ世の中たのふ小三「其様にマアお雪さんの事を。とやかくとおつしるがお雪さんは大事の／＼お家のお娘でござりますから。かわいがつてあげてくださいまし。どうして私は日蔭の身ゆゑ。どうなつてもよろしうござりますから。そんなにあちこちお氣をつかつて。必ず煩わづらてくださいな。それが私は苦勞で／＼なりません。しばし涙にくれ六ツの。かねのなるまでまどろまんと。金五郎はこゝにうち臥ける。是より小三金五郎「にあいそづかしをいふや否そは三べんを見やて知り給ふべし

小さん 假名文章娘節用 後編下巻終
金五郎

器の古きを愛るのは。ひねつた茶人の一癖にして。旨き物を食たがるは。小兒と意地のきたな連中。婦人を視て目のなきは。放蕩家の病なるべし。觀所と趣向のあたらしきを。妙で誤説の咎めもなく。ヤンヤと蘭語で贅言は。戯作通の看的。評判よし野の花より高く。部数は春の山ほどに。賣んことを欲するは。言ねどしるき發客の慾情。活業原より忌敵。速いが勝の新版は夕河岸の魚を競ふに齊し。近屬娘節用の。刻成て發市は。近きになれば序文でも。口上なりと出たらめに。はやくくと書肆より。使をおこして居催促。机下に居眠し。調市の躰を聽ながら。筆を採て斯ばかり有のまゝに記すになん。

甲午の孟春

三文舍主人

小金五郎 假名文章娘節用 三編上卷

江戸 三文舍 自樂補述

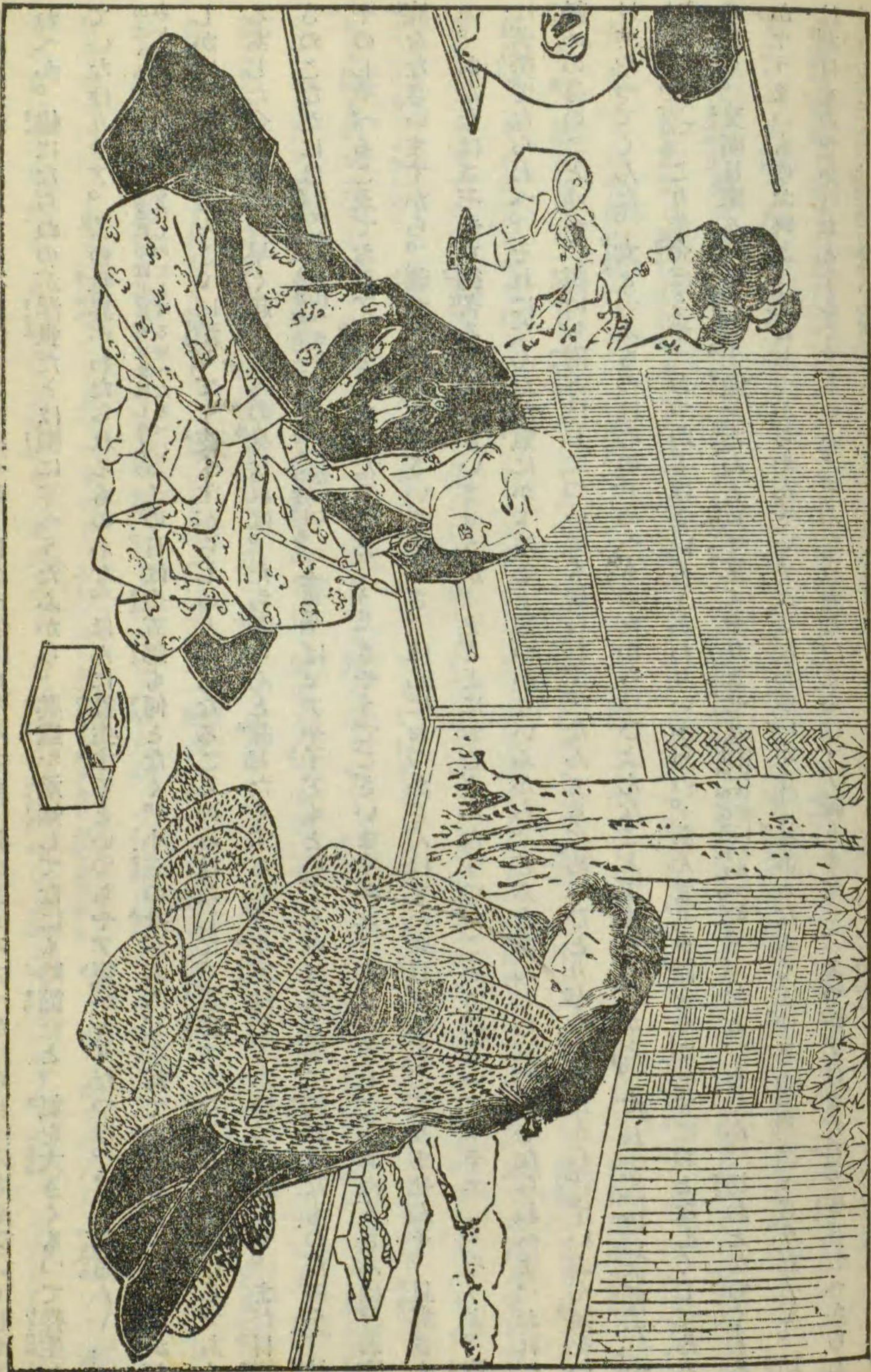
第七回

生者必滅會者定離は。浮世のならひと悟つたる。言も今は身のうへに。おもひあたりし憂事と小三は胸にこたへたる。人にしられぬ心勞も。かねての覺悟といひながら。さすが女のやるせなく。浮氣を捨て眞實に。二世を三世とちぎりたる。かはらぬ中の金五郎の爲とはいへど今さらに。義理といふ字にせめられて。縁を切らんはなかくに。身を裂るゝよりくるしくて。とやせんかくと案じれば。あんじるほど猶物おもひ。まさる苦勞を胸の中に。置どころさへ泣いたね。心を鬼に持とも。道にかけたる愛相づかしは。いふにいはれぬ恩愛と。執着の絆たちがたくふつゝ。おもひなやみしが。左にもかくにも末かけて。添はれぬあだな縁にしゆゑ。なまじいなこといひ出して。臨終にくしみ受んには。女子は罪の深き身に。罪かさなりていつの世に。罪滅さんやうはなし。うすき縁にしは前の世の。因果と思ひ定めなば。人をうらみ身をうらむ。よしなき罪はなきものをと。あじきな世を悟れども。心ほそさのいとしく。生さきのある子を捨て。いとしい男のためながら。くらき冥土へ旅立んは。よく業の深き身と。又くりかへす迷ひの闇に。ひとり胸のみくるしめつ。年ごろ日ごろの辛勞が。つもりくつてこの頃はうき立ぬ氣のむすぼれて。食事も日々にほそるものから。面もかたちもやせがれて。うつらくと氣を病むも。ことわりせて哀れなり。かゝりし程に金五郎はあんじること大かたならず藥よ醫者よとさまゝにこゝろを配り氣をつけていたはりや

しくさるゝにつけ。小三はいとゞその情の。あつきと恩の深かるを。おもひつゞけ考ゆれば。いかに義理でも操ても。いとし可愛の夫と子を。捨て死すべきやうもなく。いつその事に白翁が縁きつてくれとたのみたる。事をうちあけ金五郎に。はなしてだん合したならば。どうかかうかとさまゞに。こゝろもみだれ氣をもみて。病ひはますゝ重るゆゑ。寐ても起てもほせるのみ。頭痛とゆるぐ齒のいたみに。胸のやすまるひまぞなき。金五郎はつとめの身ながら。あんじることひとかたならず。日毎に訪ひ來るが。今日しも例のごとく入り來りて。奥へとほれば小三のそはに。ろせましとならばたてよ。金五郎「どうだ小三。けふはちつとも快方かの。トとほれて小三はくるしき中にも金五郎のかほ。小三「ハイやつぱりけふも同じ事。どうもふさいでなりませぬ金五郎さうか。まことにどうも困つたものだ。薬は毎日せひ出してのむか。ばどア立つて呑してくんなよ。ばちへすみをつぎながら。ハイなるツたけ精出しておのませ申て。はやくおこゝろよくしてあげたいとぞんじます。今度のお醫者のお薬は。まことにあがりにくいそう。ねつからどうもはかどりませぬ金五郎。そりやアわりのう。どうで薬はのみにくいから。誰しもすゝんでのむものはねへが。そんなに無精じやアどふもいかねへ。それにあの醫者にかけてから。ねつからはかゞしくねへやうだから。なんなら醫者を取替るがよからう。小三「ナニあのお醫者さまもお功者だから。轉すにもおよびますまい。どうでかういふ病氣といふものは。はかゞしい事はないと申すから。お氣をもんでくださいますな。わたくしがこのわづらひより。あなたに御苦勞かけますことがと。おもひまはしますともう。いつそのまゝ死にましたほうが。はるかましてございませう。トいひつゝなみだ。金五郎「またそんな馬鹿なことをいふヨ。なに死ぬのがましなものか。病ひは氣から撥るといふから。氣のもちやうではやくも直り。重くもなるのに。おめへのやうに些と煩ふと。死ぬはうがましだ。と。氣を病むものだから。ちよつとした病氣も埒があかねへのだ。小三「それでもどうも心から氣を病む氣はございませぬが。もとより苦勞症な生れつきゆゑ。つまらないことも氣になつて。あんまり深くかんがへますから。金五郎「それがわ

りいな寐る目もねずに考へて。氣を氣をもんで苦勞をしても。まゝにならねへことが儘になるものかな。餘計なくろうで命を削るやうなものだ。勿論平生おれの爲をおもつて。人の知らねへくろうをしてくれるのは。深實うれしいは山。だが。こんなわづらつてくれちやア。實にどうも困りきるぜ。是からは考へ事はざらりとやめて。苦勞は地獄へでも捨てしまふがい。小三「あなたはさう一ト口におつしやいますか。迎も女は罪が深いから。苦勞は一生放れませぬ苦勞よりこのからだ。さきへ地獄へまゐりませう。トあはれなことをいひ出すに。金五郎「その氣の小せへのが病ひの原だ。老人かなんぞじやアあるめへし。是しきの病氣で死ぬものかな。ちつと氣をきりけへて。向島の姉御のところへ。保養にでも行て見るがい。小三「わたくしも向いまの姉さんに。久しく逢ひませぬから。この間からどうぞして。まゐりたいとぞんじておりました。老少不定は世のならひ。盛りの花も散るは常。定めなき世と申しますから。あすをもしれぬわたくしが身のうへ。もしもの事があつたらば。金五郎「おの介の顔を見つめる目になみだ。袖にあふれて膝のうへに。雫と落るを子心に。ふしんにおもふ金之助は。のびあがりて小三の顔を。つく。ト見てひざに。金の介「おつかちやんなに泣のた。おとつちやんお阿いか。坊あやまゆから堪忍ちておくゑよウ。トいはれて小三はたまりかねるを。可愛さあまりてせつなさは。胸もはりさくばかりなる。金五郎も男心に。口にはさまゞいひまぎらせど。小三の胸をおしはかり。せまき女のこゝろから。よしなき苦勞に取つめて。もしものこともあらんかと。おもひ過して胸せまれど。さとられじとはな紙に。泪つゝむぞ無理ならず。乳母のお乳もかたはらに。二人がこゝろを推量して。共になみだにむせびける。小三「はやくこの子のまだくわんぜんもなく。わたしが愚痴な心から。つまらぬ事を案じ立て。あんまりかなしくなつたゆゑ。ついなみだをこぼしたのを。旦那にしかれることとおもひ。あやまるこゝろのしほらしさ。なぜ子どもといふものは。こんなにもマアかはいかろう。この子の成じんするにつけ。慾にかぎりはないゆゑにいつまでもたつしやでゐる氣でも。壽命がなければそれかなはず。もしあすが日に目を寐むつたら。さ

ぞマア跡で泣だろうと。それが今から見らるゝやうで。死ぬ氣はさら／＼ないけれど。とても長命のできないわたくし。遺ごんではござりませんか。ひよつとマアさかさまごとで。この儘死にでもいたしましたら。たより少ないこの子の身のうへ。他にんの手につかないやうに。どうぞ向島の姉さんのところへ。おあづけなすつて下さいまし。とても日かけて育つたこの子。すへ始終あなたの御家督をつぎますこともなりますまいから。養子にやらねばならぬ生さき。今からあんまり他人の中で。いちめられたり苦勞をさせたら。根がひよはい生れゆゑ。虫もちにでもなりませうから。外へやつて下さいませ。御如才もござりますまいが。六ツか七ツにもなりましたら。手ならひや讀書も。教へてやつて下さいまし。又二ツにはお雪さんと。御夫婦中よくおくらしなすつて。御祖父さんはじめ御両親へも。御苦勞をかけ申さぬやうに。御孝行になすつて下さいませれば。わたくしはモウどのやうな。佛事供養をして下さるより。思ひ残す事もなく。うかみます。あなたには子どもの時からおなじみ申して。ひとかたならず御恩をうけましたが。この世の縁が薄いかして。この子ができてても未かけて。添ふにそれはぬ身の因果。何のむくひでこのやうに。後生のわるい生れかと。いくたびおもひかへしても。かへらぬことでござりますが。是もやつぱり女の愚痴。このうへのお情には。わたくしのからだはあなたのお寺へ。どうぞやつて下さいましそふしたならあの世へ行て。おそばにおられませうかと。はかないやうでござりますが。今の身にはそれが楽しみ。お察しなすつて下さいましト又もなみだともろともにく。金五郎またそんなつまらねへことをいふよ。あんまりよく思ふから。ちつと取のぼせたのじやアねへか。この一日二日はなんでもおれの顔さへ見ると。あはれつばい事ばかりいふから。おれまでどうか氣色がわるくなるやうだ。ぐちなことを考へ立して氣でも狂ふといかねへからほんに氣をしつかりもつがいぜ。お雪にひどく氣がねをするから。それでこんな病氣がおこるのだらう。あの子お雪と祝言したのはしつてある通り祖父さんや親父の氣やすめの爲だから。何も今さらおめへを捨る心もなし又金坊ができたから。榮耀榮花こそさせ



られねへが。そんなに不自由もさせめへし。日かげ者でもなんでも。共にこゝろさへかはらねへけりやアいゝじやアねへか。儘にならぬのが浮世だとは唄にさへうたふから。其處を承知してなにも時節だと。氣を大きくもつて往生していなけりやア。苦の世界がわたられるものかな。ほんに往生するといつちやア氣がよりだつけ。ア、鶴龜く、ト小のこゝろをなぐさむるとはしにもいまはしきとの。この日は金五郎も何となく。小三の身があんじられて。歸るこゝろもなかりみいひて氣にかけるもむしのしらすゆへなるべし。しかば。看病がでらこゝに泊りて。夜もすがらしめりがちなることのみはなして。夜更てみなみなうち臥ける。あくるあした金五郎は。早く起出仕への身なれば。たち歸らんと身じたくするに。小三はこゝろのつかれにや。まだ目覺さぬこなたには金の介があさおきにてうはをあひ手にあ。金五郎「ばアや子どもといふものはまことに朝おきなものだのう。坊やのしやべることゑておらア目をさましたやつよ。うば「さやうでございませるかエ。どういたしてもおぼうさんは。お晝寐をなさいますから。朝がおはやうございませすのさ。ほんにおつかさんはまだお目さめがござりません子。旦那さんエ。あなたはさぞモウ御苦ろうでございませうが。まことににおまんすつたこととてございませす子エ。金「そうよ。實に苦勞でならねへ。それになんだか氣にかゝることばかりいふから。どふもあんじられて安心ならねへよ。おれは勤めの身のことゆへ。毎にち附どほしについても居られず。なんでもてめへひとりがたのみだから。ずいぶん氣をつけてやつてくん。女といふものは心のせめへものだから。ひよんなことでもしめへかと。それが一ぱい心配だトいながら金の介のあこりや金ぼらうや。おつかアはきいゝがわりいからの。あんまり世話をやかせずにおとなしくしてゐるのだよ。又明日來る時に。お土産をたんと買て來てやりませうトいへばうれしき金の「おとつちやん。坊おとなちくするかやうまいものお呉よ。明日おつかちやんきいゝまだわゆいかや。坊おとなちくすゆヨ金五郎「ア、さうだ。坊は利口ものだからおとなしくするのふ。そんならおとつさんはマア歸りませう。おつかアはまだ目を覺さねへからしづかにしなよトいふはおきいつ小三「アモウあなたお歸りなさいませすかエ。今日は御番でありますかエ。金五郎「ア、モ

ウ四ツだから歸らざアなるめへなんぞ用でもあるのか。小三「さやうさねへ用と申すのもございませんが。なんだか今朝は御歸し申すのがトなごりおしげ金「又そんなことをいつてとめるのか。けふは顔ツつきがてへいゝやうだぜ。なんにしても歸つて又出直して來やう。主人へつとめの間をかゝぬも。親父や祖父さんへのこゝろやすめだ。マアなんでも精山して薬を吞がいゝぜ。小三「それでもあなた今夜はお出なさりやアしますまい子。金「大躰ならくり合して來る氣だが。あんまり遅ければ明日のあさは是非來る。それとも用でもあるならさういつておきねへ。小三「ほんにそれそれ。金ぼらの脊中の灸がまがつておりましたから。どうぞ直してやつてくださいませ。そしてまだ抱瘡がございませすから。觀音さまの二玉さまの股をくぐらせてくださいませしヨ。この頃はあつちこつちにだいたいぶ抱瘡がありますから。だから。それにアノモウひとり行をいたしてあぶなくつてなりませんから。轉ばずの玉子守と。水てん宮さまのお守りをおかけさせてやつてくださいませ。爰らはきんじよに川がおほうございませすから。水がこわくつてなりませんトいじにつけて子をあんじるこ。金五郎「なんだな。そんな事はいつてもいはれるものを。あんまりいろゝなことをいふから。おれも歸るのがおかしいやうだマアモウ一ふく吞てから歸る事とせうト男心にも氣にかゝればわかれのつらきもむり小三「袖引たばこてあなたのお足を。無理にとどめた哥妓の時分は。眞のくろうも苦にならず。はやく身まゝになりたいと。樂しみ盡てかなしい今の身。おもへば夢のやうでございませすねへ。金五郎「さうよこの子のできねへ時分が。ほんの色事後生樂むりなくぜつにすねたり妬たり。つらいと思ふは逢はねへ晩夕への恨みは今夜の手くだ。おもしろい事もたのしみも。かんげへて見るとむかしのやうだ。爺いしみたいひぐさだが。ア、年はなんでも重らねへ事だ。あの時分のやうな身のうへに。もう一度なつて見てへものだトじゆつくわいめきたるくりことにふきこ金の「おつかちやん坊。ばアと遊ぶのモウいやゝだよ。なんぢよ味いものお呉よう。小三「アイゝ。モウおあそびはいやゝかエ。そんならばアや。お菓子でもやつておくれヨ。うば「ハイゝ。お坊さんサア落雁をあげませす子エ。金の「乳母坊。落雁いやゝだ

よ。梨子食たいよ。おつかちやん。佛ちやんの梨子おくゑよう。小三ナニ佛さんの梨子かエ。坊はこのあいだお齒が痛く、だつたから。信州の戸隠さんにお願ひ申したから。梨子は給られないからお菓子におしよ。いゝ子だチエぼうは。金の「お菓子いや」だもの。佛ちやんに上がちて居る。梨子おくゑよう。金五郎坊やなぜそんなにだをいふ。梨子は毒だから悪い。だをいつていびるから。おつかアの氣色がわるくなるのだ。おとなしくしてお菓子をたべな。赤いうまいのがあるから。コレ坊や。なぜそんなに似指をいぢるのだ。似指をいぢると手へ灸すゑるよ金の介、或いやく御めんだよおとつちやん似指いぢやないかや。なんじよ買ておくゑよう金五郎「ア、さうおとなしくするなら味いものを買てやりませう。おとつさんはお屋しきへ歸るから。お竹に抱子して。兩國のお橋の方へ一處に來な。お菓子とお手遊として何を買てやろうのう金の介「アノウお菓子とおもちやと。そいかや。アノウ佛ちやん上る花」買てお呉よう。トいはれて小三はむねにきつ。金五郎「エ、このぼうずは妙な子だのう。なんぞといふと佛さんへ買て上やう」といふが。氣になることをいふ坊主だぞ。マア何てもいゝから一處に來い。そんなら小三大事にしな。ばア氣を付てくんよ。へ出てみる小三は金五郎のうしろよりきものゑりをなほしながら。小三「さやうなら御機げんようアヤあなた。ちよつとこちらを向てお見せなさいまし。トいとまごひにもわかれをおし。金「ナゼ己がとうぞしたか。小三「ハイお頭上に何やら芥が、トとる手もふるへこゑくもり。おもへばこゝろも消くに。じつと見つめる目になみだ。せきくる胸のせつなさ。を。咳にまぎらす顔に袖。あて、泣目をかくすなる。心の中の四苦八苦。おもひやるさへ哀れなり。金の介はわやん早くお出よう。ぼう脊負居て待居るヨ。トせたげられて金五郎もせ。またぐはづみに門口の。石につまづき。金五郎「ホイ。こいつアしました。小三「アヤどうなさいましたエ金五郎「ナニ鼻緒を踏きたのヨ。ハテ面妖な。きのふ買った雪踏だから。切れるはづはねへけれど。どうもふしぎじやねへかのう。ト又氣にかけて。小三「そんならアノきのふお買なすつたお雪踏の鼻緒が。アノ切ましたかエ。金「フウこいつアどうも氣がゝりた。小三「エ、トむねにたへ。あのそんならお雪踏

をお竹にもたせて。直しのところへおやんなさいました。金「なアに二本鼻緒が一本きれたのだから。履て行て端臺で直させやう。サア金ぼう一處に來な。ト心ならずも。小三は金五郎のうしろ蔭。見ゆるまで見おくりて。名残りの泪のやるせなく。とゞめかねしをかくては果じと。思ひかへしてしよくじをば。やう／＼に給しまひ。やうじをつかひながらきのぬけ。小三「ばアアヤ。けふは旦那もいろ／＼御用があるそふだから。モウ出直してお出なさりもしまひし。わたしも氣分が大きによいから。保養がてら今ツから。向ふ島へ行ふと思ふよ。それにこの節はモウ花屋しきの七くさもさかりだろし。天氣はよし。金ぼうをつれてぶら／＼と出かけやうよ。うは「それはよろしうございませうが。おわんばいのわるいの。とふ道をおあるきなすつたら。又あとがおわるうございませうヨ。小三「ナニ爰からはそんなに遠くもないものを。ぶら／＼と出かけたら。氣がはれてかへつてよかろうヨ。向島の姉さんも。金ぼうが成人したのを見たがつて。連て來い／＼とお文をたび／＼およこしだから。マア何にしても出かけようヨ。ト是より小三は身じたくして。乳母に金の助をおぼはせて。向島へと出行ける。小三の姉眞名鶴は。富家の隠居に愛せられて。向じまの州崎村なる。秋葉の社のほとりちかくの。別荘に住居して。月雪花を友としつ。いと樂くとくらし居けるが。この春隠居は世を去りて。なき人の數に入りしかば。本家の主人も眞名鶴の便りなき身をあはれみおもひ。殊に壯年のことなれば。いづかたへなりとも支度して。嫁入らせやらんと深切に。情厚くいひけれども。眞名鶴は今さら縁着て。榮耀をのぞむ心もなく。勤の身にて年久しく。つらい苦勞もしあきたれば。たとへ不自由のくらしをするとも。世を物靜やかに送らんこそ。上もなき樂しみなれば。あはれ尼となり佛門に入りて。隠居をはじめ亡親の。後の世をもとふらはんこと。生涯の願ひなりとて。ひたすらにのぞみけるゆへ。本家の主もその心操の。清らかなるをふかく感じて。望みに任せ。別荘を眞名鶴にゆづり。その庭の中に庵を造らせ。念佛庵といふ號をつけて。佛事をいとむ補助とし。日々の雑費はつき毎におくり。不自由なくくさせければ。眞名鶴は日ごろの望みもかなひその恩義の厚きをよるこび。浮

世をのがれし心地にて。髪を切り尼となり。名を紫雲とあらため。月々に彼庵にて。百萬遍をいとなみつ。佛に仕ゆるを身の業とし。行ひすましてくらしけるは。いとく殊勝の事なりけり。頃しも秋の中なれば。庭面に枯梗女郎花なでし子藤はかまなど。さまざま秋草の咲みちたるま。紫雲は御佛にまゐらせんと。庭下駄をはきおりたちて。花を手折てゐるおりから枝折戸の外に人おとするゆゑとめ見るより。紫「ヤヤ」青柳ばしの姉さんだ子。よくマアお出だねへ。サア「こつちへお上りナ。ヤレ」よくお出だ。トきすがしんみのよろこぶこと大かたならず。小三も姉の無事な顔を。見てうれしさのかぎりなく。乳母の脊中に負れゐる。金之助を抱きおろし。手をひきて座しきへ通りのあいさつすみてみやげもの。紫「ヤレ」まことに久しぶりだ子。ヤヤ御無用におしならよいに。遠方だのにお土産まで。ほんにこのあひだ人をあげた時。おまへがちつと氣色がわるいと。お返事に書ておよこしだから。どういふやうすかといつそモウ案じくらしして。ちよつと見舞にまゐろうとおもつてゐたがあいにくわたしも時候にあたつて。つい「けふまで出かねてゐたよ。まだおまへも顔の色もわるいが。氣分はだんくよいほうかエ。そして舟でいもお出のかエ。小三「イヤあるいて参りましたよ。見かけ程心もちわるくもございませぬが。只ふさぐばかりでございませぬのさ。わたくしはモウ手まへにかまけて。御無沙汰ばかりいたしますから。あなたのおあんばいのおわるかつたのを。ぞんじませんでお尋ね申もいたしません。紫「ナニサわたしはほんの當分の事。モウさつぱりと心よいヨ。ほんに金ぼうよくお出だ子。ちつと見ないうちに大きくお成だぞ。目つきや口もとがおとつさんに生だねへ。小三「金ぼうや。手をついておばさんに。ハイ御機げんようトお辭儀をしなよ。紫「アイ」よくお辭儀がでますぞ利口ものだぞ。サア「おばさんに抱子をおしうまいものを御馳走するから。ヲ、よくいふことをお聞だわ可愛い」ねへト金の介をひぎのうへにいた。紫「乳母アお出かエ。ハイしばらくおたつしやでよい子。うば「へいありがたふござります。まことに御無沙汰さまをいたします。へ、へ、へ、ヲヤお坊さんおうれしうございませぬかエ。お抱子でよふございませぬ子エ。紫「この子もおまへの

舟籍で。まことにおとなしく成人した子エ。ほんに氏より育てがらとやら。此すへともどうぞ面倒見てやつておくれらば「イエモウお利口なお生れつきでございませぬから。目からお口へぬけますやうで。よその子供衆より御合點がよくまゐりますのさ。紫「ほんにそふだらう子エ。金ぼうや。おとつさんは御機げんよいかエ。金「アイおとつちやんお屋敷に。お竹内に居ゆヨ。紫「ヲ、お竹は内におるす番でおとつさんはお屋敷しかエ。よくわかるねへ。お常や。お養花を早くこしらへてソシテ。今そふいつたものを取にやつておくれかエ。下女「ハイ」只今お養花もできますヨ。アノお菓子も三松どんが取て参りました。紫「そんならはやく爰へ持て来て金ぼうに上ておくれそしての鯛七へそふいつてやつて金ぼうやおつかさんのお好なうまい魚を取ておくれヨ。下女「ハイ」かしこまりましたトにはなと菓子。小三「ヲヤモウおかまいなさいませぬ。今日は御馳走をいただきますより。久しぶりでゆつくりと。むかし咄や。うさばなして。氣をはらすのが何より御馳走。紫「ほんにさうさねへ。女といふものは久しぶりで逢ても。身の上ばなしかなんぞよ。外にはなしもないものさ。マアお茶ができたからお菓子をおあがり。サア金ぼう好ならたんとおあがりヨ。小三「ハイありがたふ。さやうなら坊やいたゞきな。ヲヤ「おめづらしい。お牡丹餅でございますかエ。紫「アイ富貴牡丹といふ道明寺のおほぎサ。そちらにあるのは都鳥といふお菓子で。両方ながら向島の名物だからたべて御覽。小三「ほんにさやうでございませぬかエ。サア坊いたゞきておたべ。ばばアにもお相伴させませう。金「おつかちやん牡丹餅おいちいヨ。坊たんと食ゆヨ。小三「ほんに誠においしうございませぬ子エ。乳母とんだよいお菓子だのう。うば「さやうでございませぬ此やうなお菓子に向島を賣ますのをさつぱり存じませぬ子エ。小三「そふさモシお姉さんエ。これは御近所初めましたかエ。紫「アイ直きこの秋葉さまの裏門の通りで。土手へ出る道サ。松花園といふ内で。ちかごろ賣初めたがとんだよくする子エ。小三「さやうでございませぬ。實に美味でございますから。坊が大悦びでたんといたゞきます。紫「それはよかつたねへ金ぼうたんとおたべヨ。乳母は酒の方だから今にお看が来ると一ト口あげるヨ。うば「イエ御酒より

か又このおはぎと都鳥は結構でございます。そして手奇麗でございますから。おつかひ物やお土産などには。よろしうございます。これは今にはやり出させう。紫さうサわたしの處の本店なぞでも。人をつかはさる度毎に。いつでも買て来いとおつしやるそふさ。どこでも評判がよいからはやつて来るのサ。小三ほんに向島も今じゃア都になりました子エ。紫この節はおまへ。梅屋敷の七種が盛りだから。たいそう見物の人が出るヨ。それに蓮華寺の大師さまのお庭がよく出来たから。だんくこつちも賑やかになるはず。小三さやうでございます。わたくしも些やすみましたら。坊をつれて梅屋しきの七くさから蓮華寺の大師さまへお参り申ませう。今年は旦那も前厄でございますから。お身のうへに何事もないやうに。金ぼうの行すゑやわたくしの。後の世の助かるやうに。よく祈つて参りませう。トほろりとみだをこぼすにぞ。紫ほんにおまへもわたしに似て。後生願ひだと思えるねへ。金ぼうは退屈だらうから。三松と一處にお庭の池の緋鯉に。お菓子でもやつておあそび。うはに手をひかれてには。調市の三松を相手にして。池のほとりをめぐりあるき。緋鯉の子などおひまはし餘念もなくぞあそびある。

小五郎 假名文章娘節用 三編上巻終

小五郎 假名文章娘節用 三編中巻

江戸 三文舎自樂補述

第八回

その時紫雲は長羅字の。烟管に多葉粉を吸つけて。小三に出せば手。小三ほんにおうらやましいはあなたのお身。うるさい世事の御苦勞もなく。朝夕こんな静なところに。憂世を捨ての樂なおくらし。わたくしもどうぞ三日なりとも。佛につかへて死にたいと。こゝろに願つておりますが。身の罪障が深いかして。それさへかなはぬ憂苦勞。なんの因果でござりませう。雲もなにとなくむねせまり。紫なんのわたしの身のうへが。うら山しいとおまへの僻言。世に在てこそ人は花金ぼうといふ。實を結んで。苦勞はあろうが又樂しみ。旦那も人におすぐれなすつた。發明なおかたゆゑ行すゑはそれこそ安樂だはず。おもしろい事もおかしい事。たのしみもかなしみもしらぬこの世の世捨人が。なんの本意であるものか。是も定まる因縁と。思つてみてこそ又安樂。姉妹二人が同じやうに。浮世を捨ては亡親たちの。菩提のためとおもはれやうが。却つてそれでは不孝の罪。せめておまへは人なみに。世を過てこそ兩親が。草葉の影からおよろこび。かならずくわたしが身を。うらやまないで金ぼうや。旦那を朝暮大切に。うき苦勞をもしんぼうして末の榮へをたのしみに。時節をまつのが樂のたね。すこしのことをきなくおもつて。あんまり苦勞ばかりおしだ。大わづらひにでもなるうもしれず。氣をきりかへてわたしにも。苦勞をさせておくれでない。トしんみのことば身にしるかな。涙を袖に包みかね袂をぬらししはばら。詞さへ泣ばかりなり。紫雲はこれをおんじわび倘や金五郎が小三を

見かぎり。お雪にこゝろをうつせしゆゑ。胸をくるしめ氣をつかひて。このわづらひの出しかトおもひすこして 譬おまへのふさぐを見るにつけ。病ひの根がしれないから。どふもわたしは案じられるよ。癪や血の道でふさぐのなら案じるほどの事もないが。何やらひどく氣をいため。心のつかれのわづらひかと。見たはひが目かしらないが。思案に落おない事でもあつて。一人で心勞してゐると。ろくなことは考へ付ず。苦勞にくらうをますやうな。つまらぬことを考へ出すから。だん／＼病氣は重るとも。快氣ほうはすくないものさ。他人は格別眞身のわたし。世を捨し身といひながら。苦勞なことがあるならば。おまへの胸を隠すに。はなして聞せておくれなら。女の智慧の淺はかでもそこは膝とも談合づく。へだてぬてこそ實の姉妹。からす啼がわるいにつけ。夢見のわるいや何かにつけ。おまへの事が氣にかゝり。後生を願ふさまたげと。おもへど凡夫のかなしさに。浮世を捨ててもやつぱり苦勞。心のやすまるひまはないは子トまをあらはすことばの中に 姉の異見のありがたさに。小三は始終涙にくれ。胸もはりさくばかりにて。顔もえあげずなまけとなみだをふくみたる 姉の眞じつ眞身の妹と。おぼしめしてくださればこそ。お案じなすつての段々のおことば。ゐたりしがみだをほらひ。小三眞じつ眞身の妹と。おぼしめしてくださればこそ。お案じなすつての段々のおことば。うれしいにつけ。悲しいにつけ。なんであなたをへだてませう。この世に杖と柱とも。ちからにおもふはあなたおひとり。浮世に人は澤山あれど。考へて見るとおまへさんや。わたくしほどな因果者は。あんまり外にはありません。生れ落ると親にはなれ。姉妹二人揃いもそろつて。古郷をよそにはる／＼と。しらぬ東へさまよひ来て。うき川竹のながれにしづみ。苦勞にくらうをしぬいたあげくに。あなたは行すゑたよりのお人にはやくお別れなすつたゆゑ。お若い身そらに世を捨て。附會しらぬ佛の道。それにひきかへわたくしは。恩と情を捨かねし。浮世の義理にせめられて。日蔭に咲し仇花の。散てゆく身はいとはねどまだ撫子もめばへにて。育てあげぬか一つの氣が／＼繋そのなでし子が氣が／＼とはエトとがめられて。小三サアその氣が／＼とは金ぼうが事。とかく虫もちて病身ゆゑ。明ても暮ても苦勞になり。どうぞ丈夫に育てたいと。おもひましても子供の事。なにが給たい彼がたべたいとそれは

／＼日かな一日。見るほどの物たべたがり。ねだりごとにも三どに一どは。食過ぬやうに氣をつけて。だましかせばぐわんぜんなく。いや／＼をして泣ますから。ツイ可愛さにひかされて。灸とおどすより早てまはしと。ねだるお菓子をあてがひますと。又食すぎてはお腹が痛い。痛い／＼の食傷の度毎に。虫氣でいつもちよつとは直らず。一體ひよはいうまれだのに。わたくしの乳をそだてぬから。猶病身になりますと。おもへば不便がいやまして。よその丈夫の子供のやうに。折檻もしつ／＼よくもしからず。わんぱくそだちが增長して。手にのらぬほどのいたづら者になりましたせへかして。些づゝ丈夫に育つやうだとおもへば。旦那は又行儀がわるいの。育てがらがわるいからのと。あの子の身の爲をおもつて。小言をおつしやるも無理ではないが。まだやう／＼丸三歳に。なるかならぬのふところそだち。生れ落からちやはいやつて。あんまり大事にしすぎたゆへ。わがまゝ氣まゝに育つ筈。今更急に折かんしたり。泣時あたまを打たりしてきびしくしたらわが儘も。少しづゝは直りませうが只てさへひよはい子が。それこそ驚風の虫でも引出し。ほんとうの病身になりますだろ。可愛い／＼につけ不便につけ。苦勞のやすまるひまもなく。氣を氣をつかひますゆへに。今の病氣もおこりましたの。是もわたくしが氣がましいから。せずとよい苦勞を餘計にいたして。壽命をちよめましますも心から。とても長生はできませんが。思へばまことに世の中ほどうるさいものはござりませぬ。それゆゑにこそあなたの御身が。うらやましようござりますトなみだながらのかちごと聞くもなみだの目 繋ほんにそふいへばそうでもあらう。けれどもそれはほんの一隨。はやい譬が世の中に。子寶とさへいふものを。大切な金錢よりも。子ほどまさつた寶はないと。誰しもしつた世の常言。子を持た身に苦勞の絶ぬは。おまへばかりではあるまいし。みんな世間のならひだは子。高貴でも下賤でも。子にひかざるゝは親の常。マア見るかげもない橋の上の。むしろ蒲團に世をおくる。食ふや食はずの乞食でさへ。子を大切に可愛がり。寐る目もねずに育てあげても。出世の出来ぬ乞食は乞食。上を見れば方圖がないから。貧しいものを思ひやれば。寒い目もせず不自由なく。くらしてゐるは安

樂さ子。欲にかぎりのない世の中ゆゑ。十分なこと不足におもふは。人情だからしかたもないが。おまへなんでも日かげの身で。儘にならぬを苦におしたが。満れば缺るといふ通り。十分過ぎたことはないもの。人のほしがる金銀が。有り餘るほどの大家には。子を欲がるほど子が出来ず。貧乏人の子澤山を。うらやむといふとだから。金銀づくにも換られぬは。金ぼうといふアノ大事な子寶。よし病身の生付て人のしらない苦勞をするも。親となり子となるほどの因縁づくだとあきらめて。面倒を見てそだてなくつては。親の役目がすまぬといふもの。サアそれだから少しの事を。くよくよ案じて煩らつては。おまへの身にも壽命の毒。彼子の爲にもなるまいから。氣を引立て煩はぬやうに。身を厭ふのが肝心さ。世に樂みも何にもない。わたしが身をうらやまずと。金ぼうの行すゑを神佛に祈つて。成人させるがおまへの手柄。女の道の缺ぬといふもの。しかし子持の身でありながら。旦那の爲の手助けに。身すぎ世すぎといふもの。人の機げん氣づまを取る。今の身での座しき活業は。ア、さぞいやだらうつらからうと。わたしがおまへの身をおもつても。おまへの心が悟れて。もう胸もはりさくやう。何かにつけて苦が絶ぬから。ふさいで病氣のおこる筈。とはいふもの。わたしと違ひ。おまへは身ひとつといふではなし。幾度もくどくいふやうなれど。あんまり苦勞に苦勞かさねて。今のわづらひが。大病になると。もしものことがありもしまいが。さういふ時にはわたしはもとより。金ぼうも便りがなくなるから。どふぞこの末は願てもかけて。煩はぬやうにしておくれ。定まらぬ。世のならひゆゑわたくしが。けふが日もしもの事があるや。しれぬ生身のことなれば。逆さまながら御回向を。受ますこともあろうも知れず。達者でおつてもなき後でも。眞身はあなたおひとりゆゑ。何彼につけて金ぼうが事を。どうぞおねがひ申しますから。わるいことはどの様にも。お叱りなすつて下さいまし。ト子にまよふゆゑは。わたりは。紫雲なんだエモウ。そんな哀れつばい。事はいつておくれでない。娘となり嫁と生れて来たからは力になつたり

なられたりするのは。そりやアいはないでもしれた事。もうそんな愚痴はやめて。金ぼうをつれて梅屋しきへでも行て。ちつと氣ばらしをして。お出も庭の遊びに。あきたるに。金介の介母乳に。いだかれ座敷へ来れば。紫雲は抱きつ愛しつして。わが子のごとくに可愛み。是よりみなくもるともに。梅屋しきへゆかんとて。内には下女と下男を。残して小三と紫雲は連立。花屋しきより。蓮華寺の大師へ詣て。程なくして立歸り。紫雲は種々の美味をととのへみなく夕餉をすむる。馳走に時を移しければ。秋の日はや西にかたぶき。入相ちかくなりしかば。小三は家にかへらんが。小三ヤレ。今日は久しぶり。ついになくゆるくと。身のうへばなしに爵をはらし。まことに保養いたしました。日の暮るにも氣がつかず。盡ぬはなしをくりかへして。大きに遅くなりました。乳母おまへも支度がいなら。モウそろそろ歸ろうじやアないか。紫マアおまへよいは子。それに今日は遅くもなるし。内にさしたる用がなくば。又こういふよい首尾はないから。今夜一ト晩泊つてお出な。病氣がよくなつて。座しきへ出るやうになると。又出るといふが手重になつていつ来られるか知れないから。寐物がたりにゆつくりと。身の上ばなしの跡をついで。ふさぐ胸をはらしてお出よ。小三わたくしもたま／＼ではございますし。盡ぬお名残だからどうぞして。泊つてまありたいとぞんじます。今夜わたくしが留主のあとへ。ひよつと旦那がお出なさるとわるふございますから。どうも歸らずばなりません。紫雲は。ほんにさうさねへ。旦那の御機げんをそねてもわるし。一ト晩でも儘にならないことだねへ。そんなら船でおかへりな。しかしゆれてわるからうから駕籠の方がよからうか。小三ナニそれにも及びません。ずるぶんあるいてまゐられますから。紫雲それでもおまへ氣色がわるいに住還ては。くたびれるヨ。小三、エ却てすこしづつ頭痛のいたす時は。歩くほうが勝手でございます。紫雲さうか子。そんなら金ぼうばかりも泊つてお出な。のう金ぼう。おまへは。乳母と爰へおとまりよ。金アイ坊。おぼちやん處へ。寐仕て。お池の龜子つやまいゆよ。トのなにかめづらしき子。うろにかへるを。小三ヲヤそんならぼうはおとなしくしておとまりヨ。ばアのいふことをよくき

いて。だをいつてすねるではないよ。アノ内に居るやうにおこるとの。おばさんが。泊てくだらないよ。あなたが。可愛がつてくださるから。直きに泊ろうと申しまして。おくめんがなくなつてこまります。紫それだからまことに可愛いのア。人見しりをする子供は。愛相をしても泣出すから。うっかり口も開けないが。此子のやうなにこやかな。可愛いらしい子ありません。小三坊はまことに仕合せものだよ。こんな野廣い處へ泊ていたゞいて。おつかアよりあやかりもののだ。そしてアノ坊やおつかアがなくなつても。たづねて泣のではないよ。泣との直き灸だよ。おばさんの處には灸がたんとありますから。おとウなくしてお出よ。金アイ。坊おとなしくすゆが。おつかちやんどこいお出だ。小三おつかさんは。アノ内が遠ウいから歸らないと。おとつさんにしかられるよ。たいひつ、金の介をいの子のか是が名残かかなしやと。いはねど胸にせきあげて。顔を見つめる目に涙。しばしことばもなかりしが。疑はれんと心つきしわらひが。小三ほんに子供といふものは。何をいつても無我夢中。後生樂なことでありますねへ。トおるひ下へ。帯直す顔つきも。常にかはりしやうすゆゑ。紫雲も乳母も何となく。小三の身のうへあんじられかへしがたきて紫どうもわたしは今ツから。おまへを獨りかへすのが。心にかゝつて落付ぬから。今夜は泊つて明日の朝。はやく歸つたらよさそふなものだ。のうばア。うばさやうさ。旦那だとして一ト晩ばかりの事。譯をおはなし申しましたら。お腹立もありますまいやら。是非今夜はおとまんさいましなトとあるとばも。小三そうだけれど。けふはこなたへ來ることを。旦那におはなし申さんだから。泊つてはどふも濟ないよ。それに是非おはなし申さねばならぬ事もあるから。三松どんでもお借り申て。ちつともはやくかへろうよ。うばさやうならおぼささんもお歸りがよふございませ。小僧どんばかりでは。おかへし申されません。わたくしもお供いたして。龜の子は又明日。見にまゐりませうねへお坊さん。金フウ。ばア。坊歸ゆのいやゞだよ。龜の子の處へ泊ようよ。うばあゝだものどうもこまりきつた事だ。どういたしたたらよからうやら。紫そんなら斯ませう。坊と乳母はおとまりと極て。おつかさんには三松に

欠助を伴て上やうよ。それでは紫ける事もあるまい。うばさやうならどうぞそふなすつてくださいまし。ヤレ、それで落つきました。トみなへん。小三は紫雲と金の助に。名残のことばが置みやげ。かしくしつ。小三さやうならあなた御機げんよう。御厄介でもござりませうが。金ぼうが事をおねがひ申します。ばアそんならたのんだよ。金ぼうやおつかアはモウ行から。おとなしくして機げんよく遊びヨ。あばゞだよおさらばよ。トのころかたなくつどい。輪回の絆にひかされて盡ぬ名残のやるせなく。紫雲も乳母ももるとともに。金の助の手をひき門口まで。別れを惜み送る身より。送らるゝ身はこの世から。くらき冥途の旅の空へ。消ゆくものと悟りしも。さすがは尊き法の道を。受たる身ゆゑ御佛の。眞身の姉に導きをさせてたまはるものにやと。ふり歸りては目に涙。哭音をしのぶ親鳥の。雛に別るゝ思ひにて。氣も絶々になる鐘の。無常の風にひびき來て。耳をつらぬく入相に。おどろかされて氣を取なほし。心弱くてかなはじと。別れてこそは歸りける。さる程に金五郎は今朝小三に別るゝ時。常にかはりて名残がお生まれ。歸る心のつらかりしが。主人持身の儘ならねば。ことばを契りて別れしかど。その夜は夜話の番にあたりて。出る事さへならざるゆへ。心ならずもとやかくと。紫じわびても詮方なく。明る夜遅しと待かねて。御殿より内へ歸りても。胸さわぎの常ならねば。食事さへせず着物を着かへ。青柳橋まで急ぎ來る足も空に飛がごとく。小三の許へ來りしは。やう／＼日の出の頃なるべし。はまで入口の戸も明ねばきては何事もなかりきと少し。金五郎。ライお竹起ねへか。モウ日かあたつてゐるぞお竹。ト下女はおどろき。お竹。ハイ。旦那さまでござりまするか。ヤヤ。大きに寐すぐしましは。トかけがねはづして内へとび。金坊主はどうしたまだ起ねへか。小三の病氣が悪かアなかつたか。お竹。ハイ昨日は大きにおこゝろよいとつて。お坊さんをお連なすつて。向ふ島へ入らつしやいました。お坊さんは乳母どんと御一處に御逗留て。お獨りあちらの男衆に。おくられて夕べお歸りなさいました。金ナニきのふ金ぼうを連れて向島へ行たが。よく歸つて來たのうそれじやアくたびれてまだ起ねへのだらう。トいひつ。小三のねや行。か。ヤヤ、ヤヤ、トびつくりぎ。後居に倒るゝ物音に。

下女のお竹も何事にやと。かけ来りてやうすを見れば。小三は白無垢を身にまとひ。いつの間にやら自害なしけん。朱に染て死したる體に。おなじくわつとおどろきて。倒れてわな／＼ふるへる金五郎は狂氣のごとく。金、小三ナゼ死んだ。どうしたのだ。氣が狂つたかコレ小三。小三／＼下だきおこしよべごたへもこと。虫の息さへなきゆゑに。さすが男の心もみだれ。泣ごゑくもらせなみだ。金、コレお竹。てめへが内に一處に寐ながら。小三が斯いふやうすがあつたら。ちつとはしれそふなものだのに。しらずに殺してしまつたか。情ねへことをしてくれたトウちをいふのもこの時桑川のわかい者。清介せいきもかけ来りて。おどろくこと大かたならず。何はともあれ向島へ知らせんとて。佐介を紫雲のところへはしらせければ。紫雲も乳母も仰天して。金之助を連駕にうちのり。飛がごとくに馳来りて。小三のすがたを見るよりも。あまりの事のかなしさに。夢か實か辨かねて。涙にむせぶばかりなり。紫雲は顔に袖おしあて。聲くもらせつゝ金五郎に。小三がきのふのやうすを語り。金之助の行すゑまでを。とにかく憑みて別れ路に。名残の泪の盡ざりしも。斯いふ覺悟をきはめしゆゑ。情なやかなしやと歎かたへに書置かきおのありしをうはうは。コレマア御覽じまし。遺書までこんなになすつて。お果なざるはよく／＼な事とは申しながら。いとし盛りの。お坊さんをこの世へ捨て。跡のなげきを思しめさぬは。あんまり聞えぬお胸欲おせまい心でござりましたトしじうな。みだに。むせびる。金五郎は男子ながら。共に心も消くに。歎きにしづみうつとりと。夢現ともわかぬまで。おしさやるかたなかりしが。さすがさかしき生れゆゑ。武士の身でかへらぬことを。くりかへして歎くこそ。人のおもはくも面目なしと。やう／＼おもひあきらあて。かの遺書を手にとりあげ。ひらきて見ればこま／＼と。わが身のためと家の爲を。おもひつめての覺悟の文體。讀めばよむほど後悔の。身をきらるゝよりせつなさに。あきらめてもまた涙ぐむ目をしばた。金五郎。老少不定は世のならひ。翌をもしれぬ身の上だと。きのふ小三がいつたのが。思へば紀念の言となつたか。浮世の義理とおれがためを。おもひなやみて先だつ不便さ。亡跡の事まで苦勞にして。異見まじりのこの書置。よむ身にならうとは氣がつかなん

だ。いつか世に出し人なみの。樂なくらしをさせてへと。思つた事も水の泡。子供の時からけふが日まで。かわいや一日樂もせず。日影の身にて苦勞をし死。死んだ劬勞の原はといへば。おれが片とき内にぬゆゑ。親に不孝といはせじと。その身を捨しこゝろねは。眞實過てうらめしい。たとへ一人りて死だとして。わが手にかけても同じ事。死なずとしよふはあろうのに。短氣をしたからみんなのなげき。呼んだか夢のやうで。かへらぬ事だが不便でならねへ。南無あみだ佛ト系かうするかほ金の介はつく。おとつちやんナニ泣のたへ。おつかちやん佛ちやんになつたかエ。乳母なげ泣やう。おばちやんもお泣かエ。坊おつかちやんこはいよウトともに泣だすあどけなき。紫雲もわつとなき出し。紫、ほんにこの子のかしこい事。誰おしへねどおつかアが。佛さんになつたとは情ない。こんなかなしい事を見るのを。虫が知らせたせへかして。きのふ歸すが氣にかゝり。乳母と二人でとゞめたが。あの時歸さずはなんのマア。あつたら命を捨てせやう。歸すも約東歸る身も。みんな定まる因縁ながら。薄命な妹が身の果やトくりかへして。みな／＼歎きかなしみて。涙に疊も浮ばかり。哀れといふもおろかなり。斯では果しなき人の。爲にならじと金五郎は。男心を取直して。紫雲をいさめ乳母を上げまし。の邊の送りもねんごろに。七日／＼の訪とむらひも。手厚く法會なしにける。かゝりし程に金五郎は。おさなき金之助が母に別れて。便りなき身となりしを案じかねて。小三が存生より。紫雲の許へ預けくれよと。たのみしことばもあるゆゑに。日がら立て金之助を。乳母もろともに向島へあづけ。青柳橋の家は取かたづけ。殘るかたなく心を配り。をり／＼紫雲の庵を訪らひ。金之助を愛しながらも。只小三の事忘れかね。家に在時は部屋にのみこもり。お雪にだに是等の始末を。秘しかくして語ることなく。氣のひき立ぬも理なり。白翁はじめ家内の者も。金五郎がこの頃にては。急にうつて變りしごとく。夜あそびにも出ざるゆゑさては身持の直りしかと。よろこぶものゝいつとも。何か心に案じ顔。屈宅らしくふさぐの。見るにつけ又白翁は。老の身の思ひ過しに。倘金五郎が短氣から。小三に怪我をさせしもしれず。それゆゑにこそふさぐのか。小三の身のうへおぼつかなし。いかなるこ

とかたづねゆき。やうすを聞て安堵せん。とひとりひそかに兩國の。小三が家へぞいたりける。

小五郎 假名文章娘節用 三編中巻終

小五郎 假名文章娘節用 三篇下巻

江戸 三文舎 自樂補述

第九回

朝夕に。木の落葉を雨と見つ。冬をば告る寂しさに。心も空も時雨月。訪ふ人もなき草の扉へ。友さそひ来て音信は。水鶏にあらぬ小雀の。ちよはよと啼聲を。聞につけても哀れ添ふ。紫雲は小三の亡後を。弔らふひまに金之助を。なくさめてもまだ聞わけの。泣ては母を尋ぬるゆゑ。不便の増て可愛さに。泪のかはくひまもなし母におくれし金の介は紫雲や金五郎ともろと七七日の寺まおりに小三のかへ花をたむけ念佛となへておがむをば見やう見まねの子心に内へか。金「なんまい」。のちやんなんまい。ばアこゝへ来て。なんまい。仕なよおばちゃんもお出ようトわけわからね。見るにつけ聞くにつけ。乳母も紫雲も俱なみだ金の助を。紫「コレ金ぼうや。又そんなことをして。おばさんを泣せるのかエ。ア、梅檀はふた葉とやら。やがて成人したならば。孝行者にならうのにいたいけ壮りのこの子を捨て。死だ小三が心の中。マアどのやうにつらかつたらう思ひやるほど後生のさわり。ア南無あみだ佛あみだ佛トつまぐるじゆすもしめりがち。うば「とてもかへらぬ繰言と。思ひ直し氣を取なほしましたも。お可愛そふなことをいたしましたトかたるもはなすもなみだゆ。金の介はたいくつして。金「ばア。おばちゃん處モウいやだよ。面白くないかや。内行うよおつかちゃんへ行うよウ。うば「又そんな事をおつしやるかよ。お聞わけのわるい。こゝがお坊さんのお宿でございますから。内へ行ふ〜とおつしやるものではございません。金「フウ。坊の内爰でないよ。おつかちゃんへ行ふよう。おばちゃん。ばアいけないヨ。坊内へ歸やせない

よ。紫ヲ、そふかエ、わりいばアだぞ。ア、しかしだましますかしても。まだぐわんぜんない子供だから。内へ
 歸ろうといふも無理ではない。小三が座しき活業で。なんぼ傍には居ない勝ても。三日と離れた事もないのに。やが
 てもう五十日あまり。賑やかな處で育つた子が。こんなさむしい處へ来て。緋鯉や龜の子が合手だから。どうでも遊
 びにあきるはず。コレ金ぼうや。おまへは利口ものだから。おぼさんのいふことをよくお聞。アノおまへのおつかさ
 んはのそれは、遠ウい處へお出だから。モウ内には誰エもお出だはないよ。それだから内へ行ふ、といはずに。
 おぼさんの處にいつまでも居るのだよ。金坊のおつかやん死だから。お寺へ行ちまつたかエ。紫、アイさうサ。金夫
 だから坊の内無、かエ。紫、さうサ。よくわかるぞ。それだから爰が坊やの内だよ。おらばとふたりでなぐさむる。モシあな
 たへ。どこのか御隠居さまが。お目にかゝりたいといつて入らつしやいましたヨ。紫、さうかエ。そんならどなただか
 マア庭口からお通し申シな。下女、ハイ、ト立てにわ口へまわりしをり戸ひらきこなたへと通せ
 マ御免ください。座になほりて。「偕ハヤわしは金五郎が祖父で御さるが。たしかこなさんは。小三どの、姉といふこ
 とゆゑ。聞たい事はなした事。山、あれは孫めにかくれ。わざ、尋ねてまゐつたが。おさし合なお客はござら
 ぬか、もわからねばたゞいんぎんに手をつかへ。紫、是は、どなたさまかとぞんじましたら。金五郎さんのお祖父さんよふマ
 マお出あそばした。何にも御遠慮な者はをりませんから。何なりともお心おきなく。おはなしなさるがよろしうござ
 ります。トやさしきとばに白翁は老の目やにを。自、ヤレ、姉妹とはいひながら。小三どのに生うつし。おまへの顔を見るにつ
 け涙がモウさきだつやうじや。扱何から申さうやら。心のうちがとり込て。前後するの老の癖。退屈ながら一通
 り。はなすを聞てくだされや。その子細といふはしらしやつた通り。不思議な縁で金五郎と。小三どのと深ふなり。
 たがひに思ひおもはれ、ばこそ深切づくが苦勞のたね。大概に惚合てゐたならば。人のおもはく世の義理にもかゝは
 らずに。たのしみだらうにあんまり可愛がりいとしほがられたから。孫めもその情にまよふて。うちを外の夜どまり

ばかり。一ツづゝ年はとれども。放埒が直らぬゆゑ。始末のつまりが案じられて。異見はしても糖に釘。豆腐にかす
 がひきかぬが儘よと捨て置ては爲にならず。又物もをり、磨なれば。錆付て切れぬ道理。その錆を落すには。普
 通の合せ砥では。とても切れることではないと。推量をして見る時は。わしが心の荒砥にかけても。切らねばならぬ
 浮世の義理お雪といふ孫娘と。祝言までさせたから。とても添はれぬ悪縁と思ふたゆゑに孫めにかくれ。ア、いつて
 かあつたげな。小三どの、内へたつねゆき。はじめ逢ふたその席で。よろこばせもせず孫めが身のうへ。かうい
 いふ譯あれば。長ふとはいはぬほどにいやでもあらうがしばしが間。どうぞ縁切てくだされと。無粋なむごいたのみ
 をば聞てなみだにむせながら。義理と恩とを聞譯て。ふつり思ひ切ましょと。いはれた時のわしが胸。うれしさあ
 まつて不便なは。小三どの、心の中。さぞつらからう悲しかろ。とおしはかられて侶なみだ。ア、浮世が儘になるな
 らば。容貌といひ利發といひ。やさしい心の生れつき。孫めと夫婦にしてやつたら。さぞマアたがひに嬉しがろと。
 思つたばかりでそれもかなはず。是非も泣、歸つたが。それから後は金五郎めも。そは、するやうすもなく。内
 にばつかりあるゆゑに。偕は心が直りしかと。家内のものがよろこんで。機嫌をとるほど鬱ぎ顔。じれては部屋にと
 ちこもり。何か屈宅なやうすを見ては。又案じるが親のつね。兩親の者もお雪めも。全しやうに苦勞かれば。わしも
 やつぱり氣にかゝり。考へて見る程合點がゆかず。もし金五郎がわか氣の癖で。愛相つかしの腹立まされ。疵でも付
 て騒動を。出来したゆゑにふさぐかと。思つて見れば片時も。あんじにむねがやすまらず。わざ、青柳橋へ尋ね行
 て。見ればおもひもつかぬ人の。栖家となりて勝手口も。變つた事で引越せしかと。あたりの人に尋ねしに。小三ど
 の、しる人にや子までなしたる身ながらも。男の爲と義理づくで。身を捨られたあつばれ貞女。近所の者までその當
 座は。皆惜がつて泣きましたと。なみだながらの物語り。聞て突胸のわしがびつくり。かなしさ不便さやるせなく。そ
 の捨られし子の行きき。開けて眞身の姉子のところへ。引取られしといふことなれば。悔みもいひたしやうすも聞た

さ。孫めが顔も。イヤ孫ではない彦であつた。見ねば心も落つかぬゆゑ。鴛籠をとばせてやう／＼來ました。子まである身としたならなんのむご縁切らせう。なま中包みかくされたが。今となつては却て恨み。年に不足のないわしが長命せずばこのやうに。かなしい泪はこぼさぬもの。なんの因果で生延たか。おもへば年が恨めしい。ト老のなみだが愚痴になるのもことわりなり。紫雲もあらし聞とるうち。紫雲は妹が薄命は約束事とは申ながら。子までなしても日かげ妻一日半時人なみの。息をもつかぬ苦勞を仕死。わたくしとても眞身といふは。天にも地にも小三ひとり。力におもふ甲斐もなく。杖にはなれし今のかなしみ。わすれ記念の金の助で。すこしはうさもはれますが。まだマアまことにくわんぜんもなく。明ても暮ても母をしたひ。泣につけすねるにつけ。達者で居たならどうかうと。思ひ出して同じやうに。泣いて泪のかはく間は。ほんに一日もござりません。白翁「イヤモウそりやいわる／＼までもない。おまへの胸を推量すると。わしが胸もはりさくやうで。矢も楯もたまる事ぢやない。マ。マそれは左もあれ。孫めが悴はどこにおるか。ちよつと逢たい逢はせてください。紫はんにさやうでございました子。金ぼうは奥にお出かエ。乳母一寸連てお出ばよりさきへかけたり。金おばちやん。坊おとつちやんお出だとおもつたヤ。餘所のおぢいぢやんだ子。紫、是はしたり。よそのお祖父さんではないヨ。是は坊ヤのお祖父さんだから。手をついてお辭儀をおしよ白「ヤレ／＼おとなしいよい子じや。ドレ／＼祖父の側へ來やれ。ヤ、よくいふことをきくぞ。そんならお土産をやりましよ。サア／＼手を出しやれ。ヲ、手へ／＼がよく出來たぞ。ヤレ／＼可愛い、能子じやナア。トようかん一トさほ出そうれし。金おばちやんコレお菓子お祖父ちやんお菓子だ。有難うごぢやイまちゆ。紫、ヲヤよいお菓子をおいたゞきたの。よく忘れずにお禮を申たぞ。よいお祖父さんを持って坊は仕合せものだぞ。白ハ、ハ、ハ、ハ。イヤこの坊ヤを見るにつけ。はじめ逢つたわしてさへ。可愛くつてならぬもの。いくら疾深く異見をしても。金五郎めが聞おらぬも道理かエまして小三どのの女事。このマアいたいけな子を置いて飽もあかれぬ中て男のためと身を捨られたは。貞女

ともあつばれとも。賞ても是が稱つくされふか。しかし眞身のこなさんが。身に取てはこの爺を。鬼とも蛇とも悪魔とも。さぞマアにくいと思はつしやろが。そのいひ譯ではなけれども。この子を内へ引取て。晴て金五郎が悴と披露し小三どのの亡跡も。ねんごろにとむらはせまじよ。せめてはそれをなぐさめに。思ひあきらめてください。トなみだふき／＼いれしきかぎりなくなみだ。だん／＼厚い思しめし。何とてお恨み申ませう。みんな過世の因縁ゆゑ。どうもしかたもござりません。それにつけても、姉妹が。身のうへのあらましをおはなし申すもお恥かしいが。わたくしどもが生立は。かやう／＼でござります。ト兄弟二人母なきゆへ小三が身は生れ落より文の丞に養。その恵にて里に行しが。早く父にも死わかれ。里親にだまされて。うき川竹に沈みし事。小三も金五郎と共に育ち。たがひに末を契りしに。金五郎は本家へ養子となれば。小三は便りなき身をかこち。心狂ひて鴨川へ。身を沈めしがふしぎにたすかり。悪者の手にわたりて。つひに同じ花街へ賣られ。唄妓となりてくらすうち。縁ありて金五郎にめぐり逢しより。二世をちぎりにてふかくなり。つひに子どもの出來しゆゑ。身請をされて聞はれしこと。又その身も全じころに。さる人に受出され。この別荘に養はれしが。便りの人に早くわかれて。頻に佛門の志願おこり。髪を剪り尼となりつ。世をのがれてくらすうち。妹が身の薄命から。浮世の義理にせばめられ。浅事ならぬを覺悟して。心つよく身を果せしは。みな男の爲を思ひ。操を立ぬくこゝろざし。妹ながらも天晴貞女。只一トすぢの不量見と。おぼしめさず心に。推量してやつてくださいまし。トいふしじうをつまびらかに。白「さて／＼姉妹揃いもそろいし。貞婦といはふか義婦といはふか。殊に小三は幼い時から。金五郎と一處に育ち。家出して死だと聞た。養娘のお龜であるとは夢にもしらぬが大きなあやまり。といふ譯のある事を。養子の身ゆる金五郎も。遠慮して人にも明さず。ひとりて苦勞をして居たかと。思へば小三が心の中と金五郎が胸の中が。不便でどうもなりませぬ。ト思ひやりつ／＼なげくに紫雲もなみだをせきかねてともなひは物たりはなしはなみだもなみだでも。白翁は。泣く紫雲に別れをつけ。家に歸りて金五郎の。両親はじめお雪にも。小三がなり行紫雲の身

のうへ。金之助か事までも。くはしく語りける程に。皆もろともに涙にくれて。小三を惜まぬものもなし。この上はすこしもはやく。忘れ紀念の金之助を。引取て小三の凶後。ねんごろに弔らはんとて。金五郎にもこのよしを相譚ふに。喜ぶこと限りなく。それより日をえらみ向ふ島より。金之助も。乳母もろともに呼むかへ。お雪の子となしていつくしみ。小三は世になき数に入れども。あらためて先妻と呼稱し。佛事も手厚く行ひければ。金五郎はいへばさなり。紫雲乳母もなくよろこび。家内の者も朝夕に金之助を掌中の珠と愛し。只すこやかに成長するを。指をりかぞへてくらすほどに。はやくも小三が百ヶ日に當りければ。金五郎は寺に詣んとて金之助を乳母に抱かせ供の男を引連て菩提所へとて出行ける。あとにお雪は下女とともに金五郎のへやをかたづけなどする時下女あやまつて大はこぼんを打かへしけるはづみに引出して。下女「ヤヤ、御新造さんへ一寸御覽あそばせ。女中のお文がございましたよ。お雪「ドレお見せ。ほんにねへ。ヤヤ常のお文だと思つたら。書置の事としてあるから。こりやア小三さんの書置だよ。わるいものが有た子エ。モウ是を見たら中を讀まないのに。胸が一ぱいになつたヨ。下女「ヤヤ書置でございましたかへ。ほんに思ひ出してもお可あいそふてございます子エ。お雪「そうさ大かた若旦那の事が。いろく書であるだらうから。見たさも見たいが泪のたね。それにひよつと知れてもしたら。お腹をお立なさるとわるいから。マアくよしにしませう。トしまはんとするところ母「お雪ヤ。モウ今に金五郎も歸るだらうよ。はやくそこを片付ておしまひ。お雪「ハイモウしまひました。アノおつかさん。一寸是を御覽なさいまことによい手てございますねへ。母「ドレく。ヲ、書置の事。ア、小三どの、書置かエ。又そんなものを見つけ出して。お雪「それもお杉が見つけましたもの。開いて見ましてもよろうしうございませうか子エ。母「不遠慮なれど。あんまり可愛そうだから。ちつとばかり明て見なナ。アノ杉ヤ。おまへはの。お煮花のしたくをしておくれヨ。下女「ハイく。かしこまりました。ト下女は勝手へ立てゆくお雪はこはく逢ふは別れの初めとはかねてより人の身の定めなきに引くらべ覺悟いたしをり候ひしにやうやく只今おもひあ

たり候まゝこの世の御名残に一筆書残しよりまづとや御平らかに御くらし被遊候御事此上もなふ御上よりこび申比まゐらせ候さてしもわが身事いやしき賤のふせ家に生れ草葉の露のはかなき身を御父君の御情にてやうく人となり候御恩のほど海とも山とも詞には盡しがたく夫のみならず親姉までも命をつなぎ御恵みの浅からぬ御事いつの世にかむくひまゐらせんやうもなくあまつさへ一日の御恩もおくらずかへつて御辛勞のみかけまゐらせ候この身の罪の深き事申上へくやうも御座なく候えにしは神のむすばせ給ふ御事にやもとよりいやしきわき身ながらも君の御情にあづかりよりひとかたならぬ御氣がねのみあそばしさふらふもみなわが身故と存し候へば身もよもあられず只つたなき身をのみうらみより御祖父さま御はじめお雪さまにもさぞくわが身を御にくしみ御うらみ被遊候はどはてくは君の御ためあしからむと行すゑのことぞんじつとけ候へばながらへをり候ほどつみをかさぬる思ひにて後の世さへも空おそろしく又このうへにかずくの御くろうかけまゐらせんもはかりがたくせめては我身を果し候はゞすゑく君の御こゝろもやすかるべしととくより覺悟はきはまゐらせ候へども女心の浅ましく御名残のみをしまれてけふまでながらへをり候御事まことに御はづかしく存し候へども女心の雪さまと御中よふ御父祖様御はじめ御兩親さまへも御孝行のほどねがひ上まゐらせ候二ツには姉事は御存じの通りまことにたよりなき身のうへこれまではおよばずながらもたがひに便りにいたをり候へども末くは猶くたよりなき身にさふらへば何とぞ御見捨なふ御めをかけ被下候やうねんじ上まゐらせ候。又金之助事はぐわんぜんなきわんばくものにさふらへばわが身なきのちはたづねわび泣むつがり候半かと今より目に見え候やうにてみれんながらふびんにぞんじより姉方へも昨日まゐりよそながらいとまごひのついでに金之助の事もよくく頼みおき候へばあのかたへ御あづけ下され西東もわかり候やうに成候はゞ母なし子とて人にわらはれぬやう手ならひなどよくく御をしへ下されへくかへすくも君の御身もち只今のやうなる御こゝろにては御ためあしく候まゝ是よ

り御心を入れかへむりなる御酒を御すごし被成ず御宿にのみ御出あそばしお雪さまにも無理なる御事申なされぬやうねがひ上まゐらせ候猶このうへの御ねがひには後の世の御事に御座候百とせの御よはひ過させ給ひて末來はひとつはちすのうてなこそひとへに願ひ上りまことをさなき時より御したしみ申あげ時の間の御わかれだに心うくそんじさふらふにかながき御わかれとなりさかさまなる御ゑかういたゞき候はいかなるむくい因果にやとくりかへしまことに御なごりをしさいはんかたなくころもみだれさふらふて申上度御事は濱の眞砂の盡せねど明がたちかきかねの音に死出の山路へ心せきをしき筆とめりし

道しらぬくらきよみぢへ初旅の

身に御佛を力にぞして

とよみ終り。お雪も母ももろともに。目を泣はらして顔見あはせふきなながら母「ア、ヤレ、くよしない文を明て見たゆゑ。かなしさもかなしき胸がせまつて。大きに涙をこぼしました。金五郎の迷ひしも。尤な管美人だと。お祖父さんさへ小三が容貌を。おほめなさるほどな生れつき。容貌は格別な事だが。心だてといひこの手蹟まで。うつくしいとも見事とも。約束とはいふものゝ。わか死をするゆゑに。人にすぐれて生れて來たのか。金五郎のためをおまへに義理を立通して。名を汚さない貞女の鑑。ほんにお雪やかならず仇に思ひんなさヨ。この書おきはおまへの爲には。實によい手本だヨ。このやうに金五郎を大事にして。道を立るが女のたしなみ。金ぼうも鹿略にしてはすまないヨ。お雪、ほんにさやうでございませす。わたくしが人なみに。よく氣のつくやうな生れなら。このやうな事にはなりません。因果な事でもございました。トおや二人がくやみなきなみに袖を下女「若旦那さまのお歸りトつぐるに母お雪は手ばやく文をしまひ。泣がほかくして出迎へばの顔見て。お雪どうぞしたのか。泪ぐんだ彦つきだが。ハ、ア大きな形をして。又おつかさんにしかられたの。お雪、イ、エそんな事ではございませせんがトおとひかぬれがアノ金ぼう

はどふいたしましたエ。金五郎「ばアと先へ興へ行たトきものまきながらア、ヤレ、くたびれたぞ。ほんにお雪けふはの。寺参りをして直に向ふ島へ行つたら。紫雲さんのお傳言があつたぜ。おめへに金ぼうを連れて。ちつと泊りがけに來いとヨトはいへどもお雪はうつむいてハイといつ金「ハテどうもおれはおめへのやうすがわからねへが。何をそんなにふさぐのだろ。ハ、アきこえたこりやア何だの。おれが小三の寺参りに行たから。それで續にさわつたのだ。お雪どういたしてまあそんな事が。金「心になけりやアどういふ譯だか。心をおかずと言てきかせな。一生添ふと思ふには。隔てぬてこそ夫婦といふもの。お雪、そのへだてるといふ事は誰かわたくしに教へましたか。金「なんの事な。こつちはそんな覺えはねへもの。お雪、外の事はともかくも。小三さんの事ばかりを。金「へだてたといふ事か。お雪「ハイ。それゆゑにこそこのかなしみ。先からわたしに。斯くだと。譯をお聞せなすつたら。あなたも御苦勞をかけますまいのに。金「なんだナ。又おもひ出したやうに。モウいくらいつてもはじまらねへ。みれんも大概にやめてくんナ。お雪「しつこいやうでございませす。何につけ彼につけて。常々わするゝこともなく。みんなわたくしがおるかゆゑだと。この身を恨んでおりますが。けふは取わけいつもより。金「百ヶ日だけ氣になるか。お雪「又そんなことばかり。お疑ひが晴ませぬから。申しますからお腹をお立あそばしますなヨ。アノあなたのおるすのうち。お烟草盆の引出しから。小三さんの遺書が。出ましたゆゑツイちよつと。金「見たので氣色にさわつたら。お雪「なんぼおろかなわたくしでも。先から深い譯ある事を。知つておつたらどうでもいたして。あなたのお側へ小三さんを。呼ます事もできましたらうになぜかくしてはくさいました。金「モウどのやうにいつたとて。とてもかへらぬ縁言だ。小三の事をかくしてゐたは。おれが一生の誤りだから。堪忍してくんな。年もいかねへおめへにまで。いろく苦勞させたのも。みんな因縁約束事。このうへはいふまでもねへが。金ぼうを可愛がつてやつてくんナ。ア、何だかひどく鬱て來たお雪おめへいゝ子だから。茶碗に一盃酒を持て來てくんナ。そのうちちよつくり奥へ行て。みんなの機嫌を取て來やうトはおりをひつかけ奥へゆくお雪

は酒をもち來れば金五「お雪金ほうはの。祖父さんの側に媚付てゐて。好きなたり事をしてゐるぜ。お雪さやうでござい
 郎もへやへかへりて。まずかエお祖父さんにはよいお合手でございます。ハイあなた御酒を。ト茶わんをほんにの。金ヲツト有がたし御苦勞だつ
 た。ト手にとりあげていきをもつかず。雪ヲヤあなた召あがるのなら。煖めて參ればよふございました子エ。金ナアに冷てもい
 る。是で氣色が直つたやうだ。お雪ほんにその事もあの書置に。いつそ案じて書て有ましたヨ。金そふだつけのう。
 いつでもこのぐい吞ては。小三にひどく氣をませたが。ア、今思へば是も後悔。モウふつり止にする。思へば小
 三はおれが爲の。善知識でもあるだらう。ト可かにつけて身のおこなひをあらためるのも小三の貞。是よりして金五郎は。主君へ忠勤
 怠ることなく白翁初め兩親に。孝を盡すこと日にまし厚く。お雪とも中陸ましくして。金之助を愛育し。紫雲の庵り
 も四季折々に。訪ひおと信て疎遠せず。忠孝信義全きゆゑに。家内に和順の基をひき。お雪の腹にも子を儲けて。幾
 千萬代賑はしく。益家富榮かえける。かゝる目出たき因によりて。金五郎が實の親。文之丞も年來の。勘氣をこの時
 免されしかば。京師の家には養子をなし。その身は直に東へ下り。親族眷屬に對面して。喜ぶ中に小三の身の果。聞
 て悲歎の泪にくれ。類に無常を觀するものから。終に髮を剃佛門に入りて。身を雲水にまかせつゝ。諸國行脚に出し
 となん。

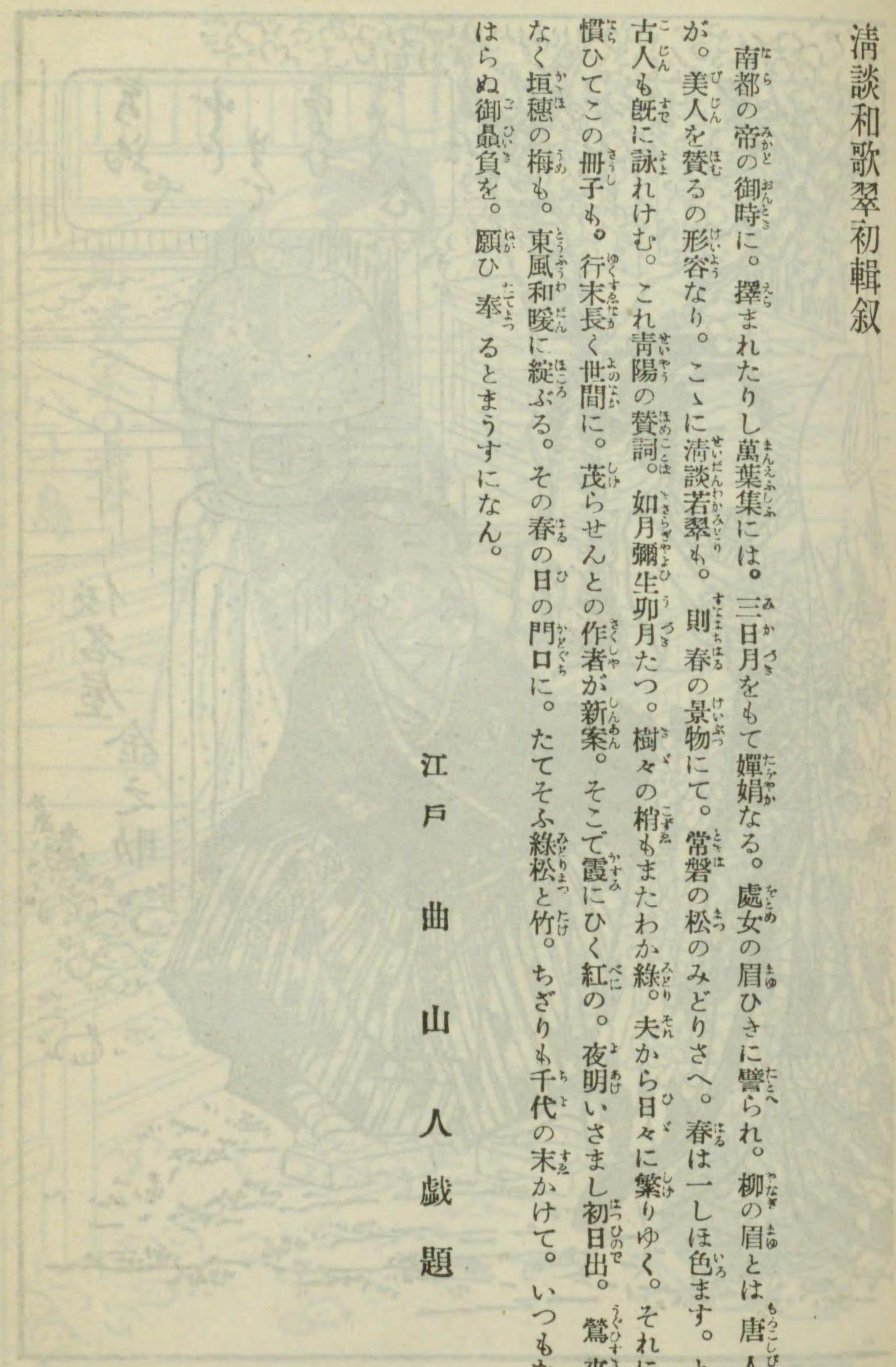
金五郎 假名文章娘節用 三編下卷 大尾

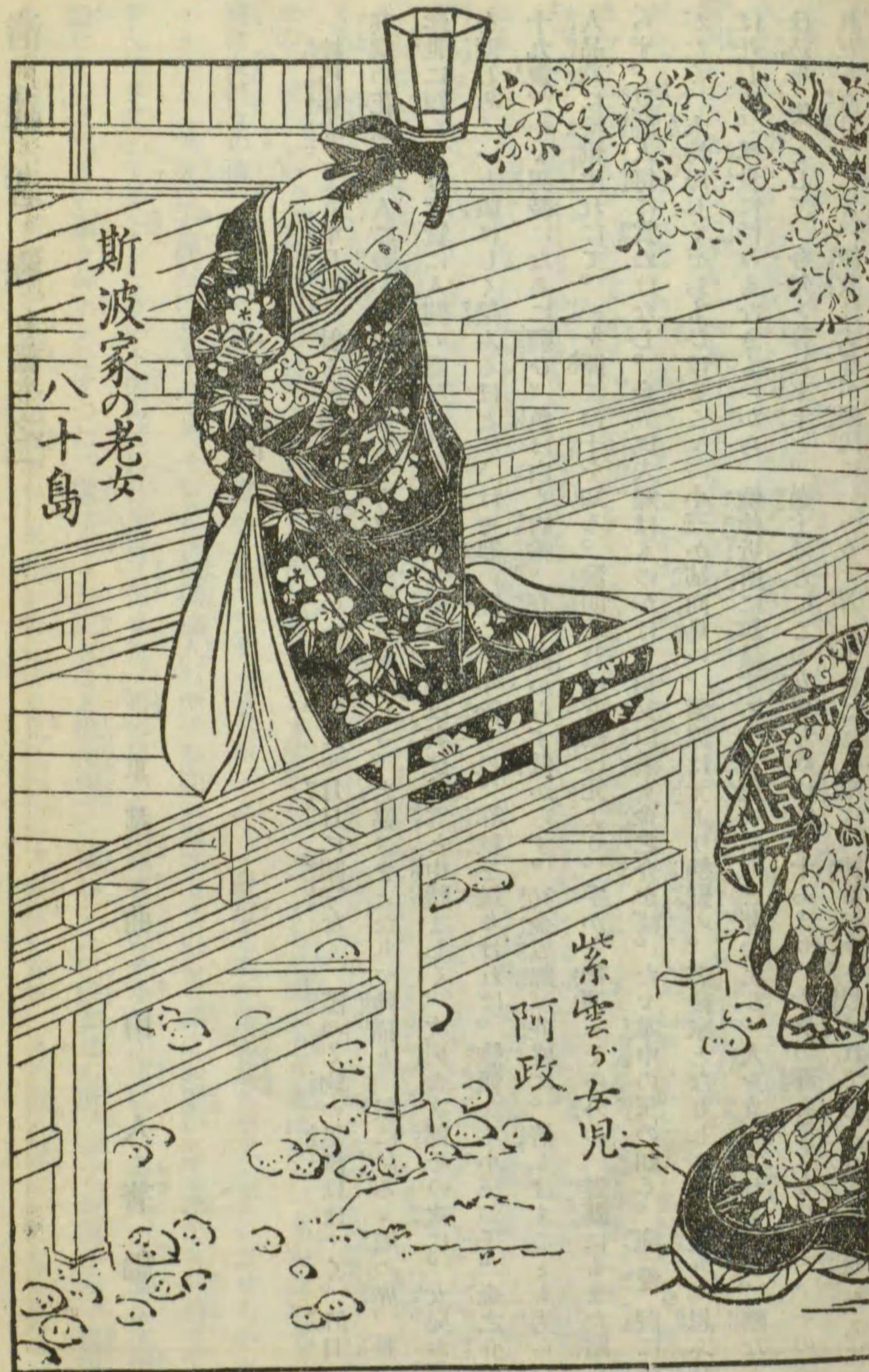
清談若綠

清談和歌翠初輯叙

南都の帝の御時に。擇まれたりし萬葉集には。三日月をもて嬋娟なる。處女の眉ひきに譬られ。柳の眉とは唐人
 が。美人を賛るの形容なり。こゝに清談若翠も。則春の景物にて。常磐の松のみどりさへ。春は一しほ色ます。と
 古人も既に詠れけむ。これ青陽の賛詞。如月彌生卯月たつ。樹々の梢もまたわか緑。夫から日々に繁りゆく。それに
 慣ひてこの冊子も。行末長く世間に。茂らせんと作者が新案。そこで霞にひく紅の。夜明いさまし初日出。鶯來
 なく垣穂の梅も。東風和暖に綻ぶる。その春の日の門口に。たてそふ緑松と竹。ちざりも千代の末かけて。いつもか
 はらぬ御負を。願ひ奉るとまうすになん。

江戸 曲 山 人 戲 題





第一回

梓弓春立しより年月の射るが如しと古歌にもいへり。實にや月日に關守なく。隙ゆく駒の足掻ははやく。昨日は其處の花嫁と。人に覗かれ視られしも。今日は忽地やかましき。老婆さまとなりて狎猫と。俱に忌るゝ酒の席。長い浮世に短かいは。實に人間の盛なり。かくて假名屋金五郎は其後お雪と中陸ましく。次男金次郎その次に。女兒お銀を産しめ。いと賑はしく榮ふるほどに。はや夢の間に十年餘りの。春秋を送りければ。惣領なる小三が子。金之介は十九歳。やゝ男装になるに隨ひ。色は白く肩秀。脊も高からず低からず。父金五郎が莊盛に。倍りはするとも劣らぬ人品殊に伶俐生れにて。一を聞ては十を知る。發明なれば武藝は元より。手かき物讀みその外の。遊藝にもまた暗かた。見聽人毎に賞ぬはなし。金五郎夫婦はものかは。祖父白翁も金之介をば。たゞ掌中の玉の如く。寵愛詞に述べた。末侍母しくぞおもひけるこゝに小三か姉向島の。紫雲は元より摘髮の。若後家となりしより。便りに思ふ妹は死して。浮世に恃みもなきものから。徳倅近所に難儀する。女兒のありと聞および。人を立てこれを買ひ。藝など仕込を樂として。今年と暮れ來年と。過すほどにこの女兒お政は年も十あまり。六ツの春とぞなりにける。その生れだち直朴にして。標致は式部が源氏にいへる。若紫もこれにやは。勝るべきと思はれて。その品容の嫵なるに。これを視る人魂を。動かさぬはなかりしとぞ。然れどお政は年こそゆかね。その心さま眞實にて。戯れたる方に心

を移さず。朝夕母によく仕えて。生めけることはなし。ある日假名家金之介は。半日の暇を得て。久しく叔母の左右をもきかず。殊に彌生の初めに。塙の櫻もほら〜と。咲初たるよし人もいへば。それを見がてら向島を志してたち出つゝ。かなた此方をみめぐりや。急がぬ道をふう〜と。歩行も遅き牛島わたり。木々は染ねど秋葉の森。はやその家の門へ來れば。手拭ひ出して足につく。塵など拂ひおとしつゝ。金ハイ御免なさいといふ聲き〜つけ。年來紫雲に仕はるゝ。お澤といへる婢女は年も三十七八にて。萬事如在のない女。ヲヤ若旦那さんでございませすかト言ながら。障子をあげ「サアお上り遊ばしませ。今日は誠によいお天氣だから。萬一入ツしやるかと存じました。金叔母さんはお替りもないかエ。何だか種々鬧がしくつて。兎かくモウ御無沙汰がちサ。さわハイ例も御機嫌能ございませ。しかし生憎今日は。お寺參りから大師さま。觀音さままで廻ると被仰ました。モウ些先刻。仁介を連れてお出遊ばしました。金左様かエ。そりやア残念。しかし御息才なら。おめにかゝらずとも宜。夫なら吾儕も直に是から。奥の方まで行て見て來やう。さわアレまア宜ぢやございませんか。お政さまは入ツしやいますから。まア〜お上り遊ばしませ。然してまだ木母寺の方は。花も一向咲ないさうでございませすト留る折からお政はかけ出。まきヲヤ兄さんよ入ツしやいました。お上んなさいませ。私、私が幾干お留め申ても。何方へか入ツしやると被仰てお聞遊ばしませんヨ憎らしい。貴嬢お留遊ばせ。まき澤も折角左様まうしますから。マア〜鳥渡お上り遊ばせナ。金左様か子。實は女計りの所へ上り込ちやア。人間が悪いと思つてサ。さわホ、ハ、叔母さんも矢張女ぢやアございませんかホ、ハ、金、夫は左様だけれど。さわナンノお前様他人ぢやアお在んなさるまいし。誠に堅いことばかり仰被ます子へ。さア〜お上んなさいト引あげられては了得ました。否にはあらぬ猪名の野や小篠が下にふく風も。心動かす圓居なり。さわさア漸々お上んなすつた。實はモウお政さまと唯兩個で。淋しくつて成ません所。サアお嬢さん。貴嬢のお子舎にいたしませう。見晴しが宜から。金、慥か塙がよく見えたツけ。彼處が宜子。まき種々發かつてをりますか

ら金「ナニ左様なことにやア構はねへ。ハ、アお政さん針線か。大分よく出来る子肝心だ。まさ、ナニ一向出来ませんから。常住呵られますトいひながらその縫物を。片わきへおしつけて。まさ、アレ御覽なさい。此頃は大造人が出て参りました。金「成ほどこりやア大勢だ。何だお師匠さんでもあるめエ。澤「まアお茶を一つ。お嬢さんソレ何か有たぢやアございませんか。まさ、ア、金玉糖が。餘まり些だねへ。さわ「まア夫でも宜ございませぬ。今にまた御馳走をいたします。金「無理に引あげたからにやア定めて御馳走は悉皆あるだらうアハ、ハ、ハ、さわ「夫はモウ當然でございます子お嬢さん。金「此間叔母さんに聞ば。大造琴がうまくお成だといふ事だ何ぞ弾てお聞せなさいナ。まさ、ホ、ハ、ハ、慈母さん。其様な啞ばツかり些とも出来はいたしません。金「何も其様に格がらずと宜ぢやアないかノウお澤。さわ「左様サお好みならお彈遊ばしませしナ。まさ、夫でも出来ないものヲ。さわ「アノ此間お貰ひ遊ばした繪を。若旦那さんにお目におかけなさいナ。まさ、ホンニ誠に奇麗な繪を。お隣から貰ひましたは。金「左様か。ム、なるほどこりやア美しいノウ。當時は錦繪も強宜によく成たしかし左様いふと老年めくれけれど。さわ「だん／＼上手になります子へ。まさ、此方の御覽遊ばせ。景をよくかきました。金「ム、なるほどこりやア宜ト兩個は暫く繪に見惚れ。餘念なき體を見てお澤は莞爾をいらせ。さわ「ホンニ左様して入ツしやる所は誠に何方も劣り勝りなし。桃と櫻の一對の御夫婦さま。何卒早く左様いたして。あげたいものでございませぬ。まさ、ヲヤ否なお澤だノウト顔少し赧らめて身を戻れば。金「之介もまだ了得には。戀には疎き少年なれば。同じく顔を赤くなし。何とも言はず繪を見てゐる。さわ「夫でも此間旦那さま紫雲の被仰ま嬉しからうと思ふけれど。金「之介こそ吾儕がために。マア甥とはいふやうなもの。母も元來本妻ではなし。此方からは言出されぬ。思ふやうにはならぬものサ。と何ぞと言すとそのお嘸し。貴嬢もまた何様かすると。金「之介さまのやうな優しいお方が。廣い世間にも多分はあるまい。彼いふお方の御新造さんに。なるお方はどんなマア能月日の下で

生れた人だらうと。一度ならず二度か三度。被仰たてはございませぬか。ホンニ何卒左様になりますと。數ならぬ私どもまで。何様に嬉しうございませうといはれて此方は恥かしさに。いよ／＼赧らむ緋櫻や。露もつ花の風情にて。さし俯けば金「之介も。またいひ出んよしもなく。聞ぬ如くに繪を見てゐる。お澤は餘りにいひ過ぎ。年ゆかぬ身の兩個とも。言いふしほもなか垣の。あればぞ結句妨ならんと。少し笑ひに紛らして。さわ「ドレ何ぞ御馳走の。準備にでもかゝりませうといひ捨て。衝と立てゆく。金「之介は顔をあげ。金「お澤は誠に啞ツ吐だ子。まさ、何故でございます。金「夫でもお前が。言もしないことを言たなんゾといふし。また叔母さんのことも。兪あれは啞だらう吾儕のやうな者を。叔母さんはマア兪もかくも。お前が左様言て呉やう筈がない。何故といふにこの向島は意氣な人や通人ものが。寄凝まつて居る處だ。吾儕等なゾアその衆中の。足下へも寄付れねへからサ。まさ、そりやア何様な人が居ますか。竟に他へ参つたことがないから存ませんが。縦令意氣な人があらうが。通な人があらうが。其様なのは嫌ひでござります。金「然して何様なのが宜エトお政の顔を覗きこめばお政は莞爾。まさ、アレ其様に御覽なすぢやア。否でございませぬ。金「それでもお前が挨拶をしねへものヲ。さア何様のが好だヨ。左様お言ト猶すり倚て覗きこめばお政はその儘逃ぼ。金「之介は思はずも。戰慄と身に染む戀風の。やるせなきまで可愛くなり。抱き着んとする處へ。ばた／＼来る婢女お澤。それと兩個は身を少し。離れてこなたをうち視れば。さわ「お嬢さん餘まり何もございませぬから。おでんを取て参りました。冷ないうち上ませう。お前様も御一所に。召あがるが宜ございませぬ。まさ、ヲヤ左様かエ。夫なら直に持てお出な。何ぞお殺てもあると宜が。慈母さんがお精進だから。御留守には却て悪い子。さわ「左様サ不斷から構はず給ろ／＼と被仰ますけれど。子へ若旦那さん何様も可笑なもんでございませぬ。金「マア其様なもんだらう。然して精進物の方が。第一體の養生にやア宜といふ事だハ、ハ、ハ、さわ「その代り多分取て参りました。金「いかさまお澤